特71
645

300957-000-7

特71-645

観音霊場記圖會（西國秩父坂東）

厚譽春鶯／識

M35. 11

ABC-0001

西坂坂
國秩東

觀音靈場記圖會

特

西國三十三所觀音靈場記圖會序

夫微妙圓通大士觀自在菩薩者於過去無數劫成等正覺號正法妙如來矣雖爾猶大悲深重而愍當今閻浮之衆生還來於吾日域現卅三應身形普度脫衆類傳聞往昔華山上皇歸心於佛乘而躬巡回名山靈區殊求觀音靈場凡於一十二州得卅三所蓋擬卅三身也是乃西國之權興也從爾以來無貴無賤慕閻其叡蹤行巡禮者連綿不斷矣或人告予曰吾雖數回卅三所未知其來歷云何願師染毫示之焉余曰齡向耳順而恒有健忘之癖故固辭焉然屢請不

輟因茲不堪默止繙看之書雖不多竊考索舊記採此拾彼闕其疑而採正斥其似而掇實間加以口說管見解以和訓名曰西國靈場記若脫落宏才手曲賜添削是余所庶幾也

採於亳洛下九品蘭若窻下

厚譽春鶯欽識

源基定圖會撰次

第一番

開基　裸形上人

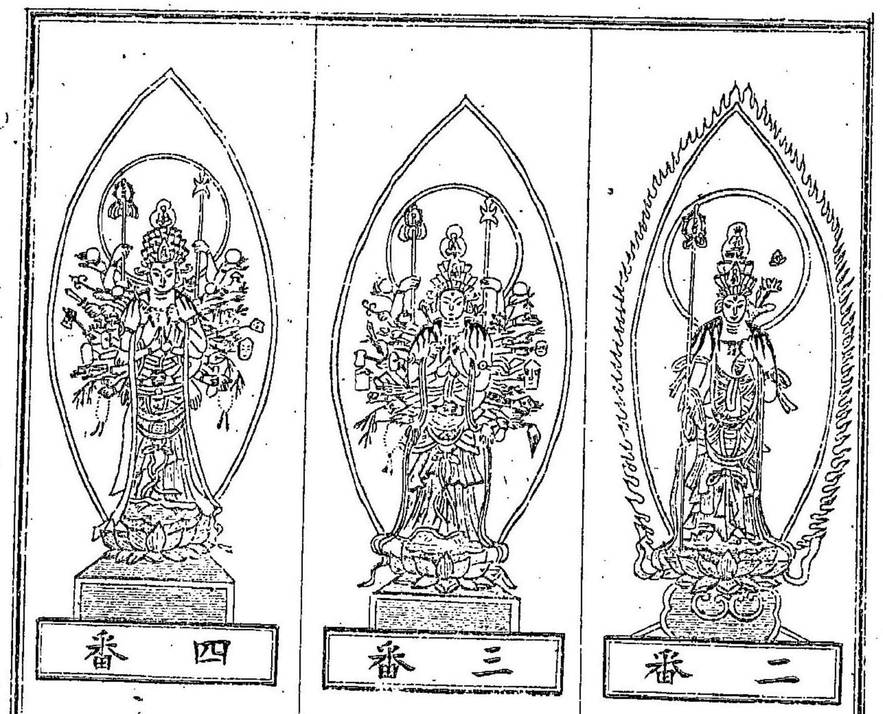
本尊

如意輪觀世音

二臂之座像

紀州牟婁郡

那智山



二番

紀伊國名艸郡
紀三井寺
本尊 十一面觀世音
御長 一尺二寸
開基唐僧威光上人

三番

紀伊國那賀郡
粉川寺
本尊 千手觀世音
御長 一丈八尺
開基大伴氏孔子古

四番

和泉國槙尾山施福寺
仙樂院ト号
本尊 彌勒菩薩
左右觀音 文殊四天王之像アリ
開山 行滿上人

五番

河内國丹南郡
藤井寺
本尊 千手觀世音
座像
開基 行基菩薩

六番

大和國高市郡
壺坂寺
本尊 如意輪觀世音
丈六坐像
開基 報恩沙弥

七番

大和國高市郡
岡寺
本尊 如意輪觀世音
丈六座像
開基 義淵僧正

十番
九番
八番
大和國城上郡 長谷寺
豐山神樂院
本尊 十一面觀世音
御長 二丈六尺
開基 德道上人
南都興福寺
南圓堂
本尊 不空羂索自觀世音
御長 一丈六尺
弘法大師御作
山城國宇治郡
三室戸寺
本尊 千手觀世音
閻浮檀金佛 御長八寸二歩
建平 隆明阿闍梨

十三番
十二番
十一番
山城國宇治郡 号深雪山
上醍醐寺
本尊 准提觀世音
建立 聖寶僧正
近江國志賀郡 号正法寺
岩間寺
本尊 千手觀世音
開基 泰澄上人
近江國志賀郡
石山寺
本尊 二臂如意輪觀世音
御長 丈六
開山 良辨僧正建立

十九番

本尊　千手觀世音

御長八尺

開基　行圓上人

都　号行願寺　革堂

十八番

本尊　如意輪觀世音

御長一寸八歩　太子七世之守本尊

聖德太子建立

都　号頂法寺　六角堂

十七番

本尊　十一面觀世音

御長　一丈

開山空也上人御自作

山城國洛東　六波羅密寺

十六番

本尊　楊柳千手觀世音

大同二年　建立

開山沙門延鎮

山城國洛東　号音羽山　清水寺

十五番

本尊　十一面觀世音

御長二尺

弘法大師御作

山城國洛東　今熊野

十四番

本尊　如意輪觀世音

御長五尺二寸坐像

開基　智證大師

近江國志賀郡　三井寺

二十番

山城國西山善峯寺

本尊 千手觀世音

御長六尺

開山源羌上人

廿一番

丹波國桑田郡 号菩提寺 穴穗寺

本尊 聖觀世音

御長三尺

願主宇治宮成

廿二番

摂津國島下郡 總持寺

本尊 千手觀世音

御長三尺六寸

變化童子作

廿三番

摂津國豐島郡 勝尾寺

本尊 千手觀世音

御長八尺

開山善仲善羌兩僧

廿四番

摂津國河邊郡 中山寺

本尊 十一面觀世音

開基 上宮太子

廿五番

播磨國賀東郡 号御嶽山 新清水寺

本尊 十一面觀世音

御長 丈六

開山 法道仙人

廿一番

本尊 千手 觀世音

御長 一丈二尺

開基 法道仙人

播磨國賀西郡 号一乘寺 法華寺

三十番

本尊 如意輪觀世音

御長 丈六

開山 性空上人

播广國飾西郡 号圓教寺 書写山

廿九番

本尊 馬頭觀世音

御長 三尺

願主 結城宗太夫

若狭國鴻浦 松尾寺

廿八番

本尊 聖觀世音

開山 齊遠禪師

丹後國與謝郡 号世野山 成相寺

廿七番

本尊 聖觀世音

建立 行基菩薩

近江國淺井郡 号木業寺 竹生島

廿六番

本尊 聖觀世音

御長 三尺

聖德太子 建立

近江國蒲生下郡 長命寺

特71
645

西國三十三所 觀音靈場記圖會 一

西國廿三所順禮の由來

抑西國三十三所といふ事はいつの頃より初りて功德何ほどの事ぞと尋ぬるに昔聖武帝神亀年中大和の國初瀬寺の開山德道上人と申は智道兼備の尊き名僧にておはせしがあるとき頓死なし給ふに怪げなる官人二人上人の御前にきたり我々は閻魔王よりの使なり上人を伴ひ申べしとの仰により參りたりと有ければ上人ありがたや閻魔王より御めしとあれば辭退申べきいはれなし早々參るべし案内したまへとのたまへば然ばとて兩人の官人さきにたち案内ある渺々たる野山をすぎ行たまふに遥かむかふに鐵城あり程なく其所にいたり見れば大門大殿あり其結構なる事金銀珠玉をちりばめて光りかゞやく有さま言葉にも述がたく閻上人を大殿へ請じ閻王出させ給ひて笑みをふくませ給ふ御貌ばせ美玉のごとく上人はうやくしく何なる御事にて召れつるぞやと尋ね給ふに閻王のたまはくされば上人今日の本の地におゐて救世觀音の淨土といふ靈地三十三所あり一度此靈地をめぐるものは地獄に落る事なしこれ觀世音は御身を三十三身に分ち緣にしたがひ末世の衆生を濟度なし給ふかゝる

77W16237

廿二番

近江國神崎郡 觀音寺

本尊 千手觀世音

御長 三尺

聖德太子御作並建立

廿三番

美濃國谷汲山 華嚴寺

本尊 十一面觀世音

開山豐然上人

此首傍に丹刄一面三十三所の其一寺なり正觀世ちよして其亟弦其ほとけ故ほ瓜生結緣のあ我為ほ載ま

丹州上林 中照山 日圓寺

本尊 聖觀世音

御長 一寸八歩

古佛一凡千歳之作佛

靈場ありといへども曾てしる人もなく其上善根を成さず剰さへ惡業を作りて日々に死に來る多者く極樂へとては行ものなく只地獄へおち來るものゝ多きことたとへば夕立の雨のごとし我是をなげきかなしむといへども我と我が身にて作るつみ罰のむくひ心の鬼にせめられぬるこそ是非なけれ何とぞ此觀世音の淨土あることを衆生にしらしめ觀音の利益をうけて地獄の苦しみを受さるやうと此事告しらすべきものなし然るに上人は誠にばさつの德を得し名僧なるに依て觀世音の淨土三十三所をしらせたく是を末世に弘めさせ給ひなば其利益廣大なりぬたとへ一度たりとも此靈場をめぐる輩は足のうらより光明をはなちて一百世六地獄をふみやぶるの功德ありもしわやまつて地獄に墮するものあらばわれ則妄語のつみによつて其ものゝ身にかはり地獄のせめを受べし三十三所はこれ〳〵なりと敎へ給ひ此事を知らせんために乞ひむかへたりと仰げるに德道上人つゝしんで承り有難き御諚さながら末世の衆生は只うたがひの心深ければこれをいかゝせんとなげき給ふに熖魔王も實に、左もあるべき事なりとて寶印を下したまはれば上人熖王に謝し奉りて玉殿をしりぞき出たまふに初め導たる二人の官人出來りて上人を娑婆世界へ送り奉るさても上人は三日三夜の間死居給ふといへどもいまだ身體にあたゝまり有が故に御弟子たちもしや蘇生したまふ事

やあらんかと望も得せず守り居たまふにふしぎ成かな三日あつて蘇生し給ふ御弟子たちは悅び集りかしつき申事大かたならず德道上人は右の御手をにぎり詰ねたまひて誠に熖王より御わたしありし玉の寶印を持て宣はく有がたやまさしく寶印をさづけ給ふと思ひしにたがふ事なしとて御弟子たちへ此程の次第を御物語ありて夫より德道上人は弟子を連れ西國三十三所順禮の先達と成給ふ抑日本にて觀音の堂の初りは攝津の國中山寺にして聖德太子の御建立なり此故に中山觀世音を順禮の一番としてめぐり給ふ彼熖王よりさづかり玉ひし寶印を石の唐戸に入て中山寺に納給ふ觀世音は　忝も十方諸菩薩の慈悲の要を持たまふ御佛なり　則　佛とは慈悲を體とし給ふゆゑなり

佛とは何をいはまのこゝろむしろたい慈悲心にしく物ぞなき

德道上人熖王の御かはばせ美玉のごとしとのたまふ又奥州外濱にて水村彌五兵衛といふ者蘇生してめいどの語がたり致せしに熖魔王は御面ばせ美しといひしとあり然ば美しきにちがひなし古より熖魔王の像を作るにことゞくすさまじく惡ろしき形なり是は己々が見る心なりたとへば惡人なれば己にくき奴と白眼つけいかり給ふ故恐しく見ゆる又善人なればいかり給ふいはれなくして笑をふくませ給ふこれ人間界にても同じ事たとへば氣に入らぬ

人には自然と貌つきあしく氣に入り心合のものにはうちとけ咄しなどするぞと〜なり

花山院御順禮

一番は中山寺なりしに那智山を一番として中山寺を二十四番に入給ふ事はいかなるゆゑぞと尋に人王六十五代花山帝紀州熊野へ御參詣より初る花山院と申奉るは六十三代冷泉院の御子也御年十七歳にて御位につかせ玉ひ御后は關白粮忠公の御娘也しかるに藤原爲光卿の息女入内なさしめ弘徽殿にふかれて御寵愛ましくけるゆゑ則弘徽殿とは申せしなり其頃は大内裏とて殿舍の數も多く其御かまへ宏大にして此外女御更衣などいふ女官迄も三千人そなへり其中に弘徽殿は御寵愛のふかきにより御威勢日に增今はは や日のもとの中に女といふものは弘徽殿にとゞまりたり多くの女官は日陰となれば自から弘徽殿を恨み給へば御年十七歳の御ときなにとなく御惱みましく〜終に御命終られ給ふ帝の御なげき申も中々おろかなりされども今は其面かげだに見ゐ給はざればたゞ明暮なげかせ玉ふ折から粟田の關白道兼公の持せたまへる扇子を御殿にわすれ置玉ふを女官たちひろひとりてあちこちと持あつかひ給ふを帝御覽じ付たまひ坂上せて御覽ずるに妻子珍寶及王位臨命終時不隨者といふ大師の經文の文を書付たり帝思し召やうは誠や死すれば妻子といへども伴ふとあたはず寶も身に付にあらず六道をわかれ〜に行なるべし若きとて頼なし位あればとてのがれなく夢まぼろしの浮世なりと御發心あらせたまひ寛和二年六月廿三日の夜に入て左中辨藤原成中納言義蔭卿二人を御供に連させ給ひて内裡を忍び出たまひ西洞院通安部晴明が家の前を通られ給ふとて不圖内を見入させ給ふに晴明は暑にやたゞざりけん夜は更ぬれどもいまだ伏もやらで涼いたりしが空をながめ大に驚き大子御位をのがれさせ給ふ天文たしかにあらはれたりとてあきれ驚きて内裡へ參る花山帝は此けしきを聞しめされあら怒ろしの晴明やと仰ありて忍びて立のきたまひ山科の花山に御急ぎ有ける内裡には晴明がはせ參るによりはじめて此事をしりて其所よ此所よと尋たてまつれども更に御行衛のしれざりしが明がたに山科にましますよしは聞ゐたりされども夜のうちに御飾をおろさせ御入道ましく〜御名を入覺とかゐさせたまひ左中辨是成と中納言義蔭卿も入道なし給ひそれより熊野三所權現へ御參詣ましまさんと思召綾羅錦鋪の御しとねを捨させたまひ御わらぐつに御杖御笠にて雨露をしのがせ給ひ熊野へいたりましくけるが三所權現もこゝに感應ましく〜けん帝に告させ給ふには法皇の御身として是まで御參詣まします事誠に御殊勝の御心ざし感じまゐらすが故告知せ申なり今日の本の地に觀世音の淨土三十三所あり むかし大和の國初瀬寺

の德道上人へ熖王より此淨土を告給ひ其地へ一度順禮したる輩は地獄に落すまじと熖王ち
かひの寶印を上人へたまはりしが上人これを中山寺に納めそれより觀音の淨土三十三所の
有けるが其のち絶てめぐるものあらず何卒法皇今又先達と成たまひて三十三所の靈場をめ
ぐり初め給ふべし案内には河内國石川寺佛眼上人といふ名僧あり是を尋給ふべしと御告あ
れば法皇は有がたの御告やたばかりの靈場ならんには早くめぐるべしとて河内の國へ御出
まし〳〵石川寺佛眼上人に御對面あり我は花山院法皇なり熊野權現の告に依て來りたり今
日の本に三十三所の觀音の靈場あるを上人よくしり給ふよし順禮の案内を上人にたのめと
の權現の御告なりと仰ありければ上人はなみだを流し上善天子の御位をすてゝ有がたき御
志かなさらば御供申べしとて佛眼上人は熊野權現へ御供御願の心にて一番に熊野へ御參
詣ましましぬ是よりして那智山を一番にぞ成したりける佛眼上人と申は經文を讀誦し給ふ
に眼より光明をはなつほどの名僧なり是によつて佛の眼と云て佛眼とは申せしなり弘徽殿
は敎世觀音大士の變化なりかりに弘徽殿と形をあらはし煩惱菩提心の利益をなし色情よ
り花山院に菩提心を興させ參らせ觀音の靈場三十三所の方々をしらせ給ふ事の有がたさよ
今の世に尊みとなふる所の三十三所の御詠歌はすなはち花山法皇の佛眼上人とゝもに順禮

し給ふ御時の御歌なり

○一番　紀州室郡那智山觀世音

裸形上人の開基なり頃は人王十七代仁德天皇の御宇にして

高き家に登りて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり

と御詠吟遊ばせし御慈悲ふかき聖王の御代なり其心は佛法いまだ日本へ渡らざるの時なる
に裸形と申せしなりはだか身に衣ばかり着て居ませりかるがゆゑはだかの形とかきて裸形
上人とは世の人申せしなり天竺國は熱國にて羅漢達みなくはだか身に衣ばかりをめして
居給ふなり此裸形上人は木食にて木の實ばかりを食して木實なきときは木の葉を食し居た
まふ頃は佛法といふ事なければ佛といふ事をも出家といふ事をもしらず神國なれば死火
をきらひ死人あれば其家へ外よりは三年が間火を取りかはさずつき合ならずかるがゆゑに
死人をきらひ親にても年老ぬればやがて死なるゝならんと前かたに野山へつれ行捨かへり
しかば犬鳥の餌食と成はてる事なり元より佛法なければ寺といふ事もなき故にいかほど大
事にかけたる御方にても皆々かはる事なく生ながら山に捨られねる心のあじきなさかなし

さはいかばかりぞや佛法のわたりしは人王三十代欽明天王の御宇にはじめて百濟國より善
光寺の御本尊を渡せしに佛とはいはずして銅の人形といひしなり夫より佛法ひろまり今の
世にては年老たりとて野山にすつる事もなく息ひきとるまで藥上食よと介抱し死すれば弊
禮のいとなみ後々までのとふらひする事佛法の德と聖德太子の御蔭なり然るに裸形上人は
熊野那智山にてこの處は佛法の靈場なりとて那智の瀧に向て千日が間行を勤めたまふに瀧
つぼより光明かゝやき水二つに分れければ一寸八分の閻浮檀金の觀音あらはれたまふ裸形
上人は有がたやこれ誠に末世の御本尊なり長く衆生を濟度ましませと衣の袖をひろげ請た
まへば觀世音は瀧つぼより飛うつり給ふ夫より其處に庵を結び觀音をまもり奉りおはしま
せども佛法なければ上人より外に誰あつて見向ものもなくされば上人たりといへどもかぎ
りある命なれば一生を守り奉りたまひぬれども往生のゝちは庵室も其まゝ朽すぎて觀音も
庵もあとかたなく埋もれ過て有しが其後五百年の餘も過て生佛上人と申せし尊き上人熊野
へ參詣ありしに權現御告に汝よくこそ來りたりむかし此所に靈佛ありて裸形上人といふ僧
ありて守奉るといへども今は守るべき僧もなくうづもめまします其方は此佛に深き緣あ
るものなれども今まで來らざるがゆゑ空しく年月を過しゝなり早々此御佛を守り奉れとの

御告ありければ生佛上人はありがたき御告かなと夫より大願心を興し權現の御告にて此地
に靈佛のまします事をしるとはいへど何れのところに埋れまします事やらん其地のしれざ
れば我が信心をもつて此靈佛を祈出し奉よとの御事と覺たりとてさもすさまじき那智の
瀧に飛入り靈佛出させ給へとて一心をこめ靈佛を出させ給ふまでは此たきを出まじきぞた
とへ五體は粉となり死するともいとふべきにあらずと三日三夜瀧にうたれて祈りたまふ頃
しも寒天の事なればぞくこん冷通り氷のごとくひゑかたまり覺ゑず川下へ流れ給ふを童子
一人天くだり上人を引上て頭より足のうらまでなでぶろし給へば自然と五體あたゝまり人
心地付たり彼天童にいかなる御方ぞと尋給へば汝餘りにはげしき行法なるがゆゑいま瀧に
命をはるところなるを梵天帝釋あはれみ給ひて我々に天降りて助よと梵天よりの御使なり
左程にあらずして祈るべしとあれば上人有がたしやさては帝釋天王の御惠みにより命を助
り申たるかと手を合て天童をふがみ奉りそれよりして一の岩上に座して靈佛を待奉るま
では此處を立さるまじと心をきはめたとへこのまゝ死するとも生かはり死かはり祈出すま
ではと又七日七夜岩上に祈給ふ事の前後十日なり然るに七日に滿る夜しん〳〵れき〳〵と
闇きに忽ち光明かゝやき出る處あり扨はと其處に印をおき夜の明を待て近き土民等をか

たらひ岩を穿ち土を掘けるに七尺ばかり下より有難や一寸八歩の黄金佛如意輪觀世音の光りかゞやきおはします少も穢れ損じもし給ふことわらずまことに日の本に佛法わたらざる前に出させたまふ觀世音にてましませば人作にてはわらず正眞の觀世音をおがみ奉る事のありがたさよ若も末世に紛失し給ふことはかりがたしと小佛なればと御丈一丈の觀世音を造立し挙り御むねに御本尊の小像を納めたてまつりしなり　則生佛上人の開基なり

御詠歌

普陀落やきしうつなみは三くま野の
なちの御山にひゞく瀧津瀬

普陀落とは世界の南に觀世音の淨土ありて其處をふだらく山といふ西方極樂の左座に觀世音ましませば南の普陀落山とは救世の淨土にして角形水精のはへぬきの御山ありて觀世音歴然としてまします所なりすき通る水精の御山にて峯には黄金の御殿觀音二十八部衆の書躍まします此御山にうち寄る浪の甚々微妙の音ありてこれぞふしぎの觀音妙智力といふ經文の音なり岸うつ浪はみくまの〻那智の御山にひゞくたきつせとは那智の瀧の音凡夫の耳には只どう〻くとばかり聞ねぬれど普陀落山にうつ波は妙智力のさとりの耳には能聞わけ

ちるゝ事なり鳥類啼るゐのなく聲にも皆わかちがたし唐土の公冶張といふ人はよく鳥の聲を皆々聞わけしといふ不思議の事多し

○ふたらくとは本文のごとく觀音居給ふ山なり岸うつ波とは衆生歩みをはこびねがふ音聲なり三熊野とは本宮新宮那智山これをひゝくとは何國いかなる遠國にても觀世音と御名をとなへたてまつれば補陀落山へひゝくがゆゑに解脫を得させたまふとなり

○那智の瀧にて花山院の御前へ龍神あらはれ給ひ如意寶珠と水精と兩穴の法螺貝をさし上る

○文覺上人は此瀧に三七日打れて正眞の不動明王をおがみ�をさづかり給ふ

○文中にある年老ぬれば親にても野山へ捨たる事觀音經和讃抄圖會といふ本にくはしく出たり見るべし

道とはし年もやうく老ぬればおもひをかけよ我も忘れじ

○權現の御神詠

うろよりもひろに入ぬる道なればこれぞ佛の御くになるべし

○又和泉式部熊野へ參詣しけるとき月のさはり出きにければ　御神詠

もとよりもちりにまじはる神なれば月のさはりはいかくるしき

○花山院御下向のみぎり田邊の浦にて御詠

旅のそら夜半のけぶりとのぼりなばあまのもしほや火焼かとや見ん

○二番　同國紀三井寺

紀州名草郡普陀落山金剛寶寺と號す人王四十九代光仁天皇の御宇寶龜元年の御建立いま紀三井寺といへるはいか成事ぞといふに此處に不思議の井三ッあり清淨水吉祥水養老水とて三ッの井ありこれによつて紀三井寺といふなり龍宮より觀世音へ此井より龍燈のぼり松の大木にかゝり觀音の御前へ上る此松を龍燈の松といふ爰に道光上人とて攝津國天王寺に住し給ふ名僧あり紀州熊野山に參詣ありて天王寺へ下向のとき今の紀三井寺の地にて日の暮ければ家居とてもなき山中ゆゑ大木のもとに一夜を明し給ふに夜半の頃數千疋の馬の足音おびたゞしく聞ければ怪しき事に思ひて見給ふにさらに目に見ゆるものなし然ども馬の足音して人聲ちかく聞ける不思議に思ひ給ふに其中に大音にて親父〳〵とよぶ父うしろの方よりおうと答ふこれもまた聲ばかりにて形見ゑず化物にやあらんと思ひ給ふに又親

父今よひは行申さるかとあるに老人の事ゆゑ足たゝず頼みと思ふ馬は足そんじたるゆゑに今よひも得參らぬなり此段御頭へよろしく御申上たのみ入といふなる程御斷は申べきなれども四五日も斷にては其方の御ため惡かるべし何とぞして來られよといふ左はおもへども足たゝず馬も足をそんじて詮方なしよろしく賴申といふ然らばとて又大勢の足音して馳行ぬ上人はこれを聞てさて〳〵ふしぎの事かな宵より見しに此邊に一軒の家居もなし又馬の居べき處もなかりしが何にもせよ夜明て見るべしと思ひ給ふに程なく東もしらみ横雲たなびしら〳〵と明渡るさらばとて其邊を見給ふにしげりたる森のうちに小き社あるばかりなりさては此内に居ます御神にてもあらんやと近く寄て見れば馬の繪かきたる繪馬の前足のところ板われてぶら〳〵と放れかゝりてありさては此繪馬の事なるべしと心づき我療治して直し置て試るべしとそれより上人は人家ある方へ出て托鉢し暮方に又森の大木のもとへ歸り繪馬の損じたるをつくろひ直し今宵はいかゞあらんとまち給ふに又前夜のごとく馬の足音おびたゞしく出來りしが小社の前に立どまり親父々々と呼たつれば後ろの方より馬の足音して立出て旅僧のめぐみにて馬の足直しもらひし故今宵は參り申べしと打つれたちて行音のすぎて七ツ頃とも思はるゝ頃戻りたりと見なして馬一疋の足音し誠に駿足にぞ聞なけ

る道光上人こゝろをかけ馬の足を直したる旅僧なり御身いかに成るのぞ姿をあらはし給へとあれば翁申ていはく御言葉かゝらずとも是よりすがたを見せ申御料面の上御禮申上ると存る所なりとて八十ばかりの白髮の老人あらはれたり道光上人見たまひ何さま其老體にて馬なくては難儀なるべしいか成神にてましますぞと有ければ翁のいはく成程神なれども尤いやしき神にて候と申しかれば大勢の足音したるも神にてありけるか翁のいはくいかにも神々にて候我々いづれも疫病の神なりといふしからば其頭といふはいか成神ぞ答へて御頭とは祇園牛頭天王にてまします疫病神をすべて司り給ふなり我々は流疫神と申て十六萬八千座あり然ばその十六萬八千の神々は何方へ行給ふ事ぞ答て御頭のさしづにより三千世界を見めぐり邪見放逸の者に取付なりしかれども念佛の行者には取付事あたはず彌陀觀音勢至北外諸ぼさつ念佛の行者を守護し給ふが故たとへ一村中疫病をやみ伏居ども又は其中に交りねるとも疫病をやむ事なし又たとへ鐵の箱土藏のおくにかくるゝ共用捨なく邪見の者は神通力をもつていか成處へもわけ行て疫病を惱しむるなり元より祇園牛頭天王の人をやましめ給ふにはあらず慈悲の深き御神なれども今人皇のありがたき御代にも萬民の御政道のため公にそれ〴〵の役々の御方をおかせられ惡事をなせるものはいかやうの邊土遠國にに

げ隠るゝとも捕へ出して夫々罪の次第によつて罰し給ふは必にくみ給ふにあらず萬民の見せしめとして後人の惡事を止させ給ふは同じく御慈悲の深きとしり給ふべしさて又道光上人にたのみ申度子細候すでにこの身にも晝夜三度づゝ眞黑にくすぼる苦みあり是を助け給ひて又一切衆生成佛の道しるべを願申なり上人曰諸人成佛は我も願ふところなり翁の思ふこともあらんや翁こたへて能こそ尋給ふものかな別て十一面觀音こそ有がたき事にて候此森の大木をきつて觀世音の像を作り餘木をもつて觀音經普門品をきざみ末世の衆生に弘く說せ給はゞ是に越たる成佛の道枝折あるべからず又普門品をとなふる聲を聞ならば我その人の護身にそひ守護すべしとて翁は見えず成にけり上人此おもむきを所の里人にかたり大木をきり其木をもつて十一面觀世音の御像をつくり給ひ餘木をもつて普門品の御經を彫刻なし給ふ事これ流沒神の爲め末世の衆生を成佛なさしめ給ふ事うたがひなしとて村民尊む事かぎりなく欲て御堂建立なりしとなり道光上人ある夜の夢に彼翁の來りて御陰にて晝夜三度のくるしみをのがれ其うへ觀世音のけんぞくと成たり此事うたがはしく思ひ給はゞ小祉のうちに我像あるを草船に乘させ給へ南方へ行べしとありしかば小祉のうちを見るにいかにも小さき神像のありしかば是を敎のごとく草船を作り乘せて海上に浮め給へば風も

なきに三つの矢の如く南方普陀洛山の方へ眞一文字に飛去り給ふとなり是によつて紀三井寺の觀音は別て疫病厄難をすくひまぬがらせたまふ御本尊なりよつて御守を受て懷中のともがらは疫病のうれひなし

○觀音經普門品をよみ覺ねんとならば觀音經和讃抄圓會といふ本ありこれは平がなにてよみ安くし又講釋をもしるし又むかしより御經をよみ信心の輩は前生の業因により病苦あるひは危難にあふべきをもすみやかにまぬかれ却て福壽を得又子なき人は善男をもふけ子孫さかへしためしなどあらゆる觀世音の利益にあつかりしをあま汜柴てしんぐしたまふ人々の大に力となるべき本なりよみて見給ふべし

御詠歌

ふるさとをはるぐ〻こゝに紀三井寺
花のみやこもちかく成らん

此詠歌は唱るとふりのこゝろと思へども左にあらず此ふる里といふは皆人間佛性のたねありて佛の御傍に居たりといへども一心の隨緣にひかされいさゝか迷ひを生せしより此方今の人間と成たるまでは生かはり死かはり幾度といふ數をしらずはるぐゝと故郷をまよひ出

今生へ出來り西國順禮して紀三井寺まで參りたりといふ心なりたとへば子供の太神樂などに不斗見とれ迷ひ出て本へかへる道をしらずまよふがごとくとつと昔まよひ出たるに有がたや觀世音の御陰によつて最早この紀三井寺に來れば花の都も近く成しとなり今の都にてはなくかりの都なりやはり夢のうき世なれば夢見て居るが如くなり詠歌のみやこは極樂をさして花の都といふなり極樂のちかく成て九品淨土に成佛し無明の酒のゑひをさましさとりの身と成と示し給ふなり

○神といふに二つ有權者の神と實者の神とあり伊勢大神宮を初たてまつり八百萬の神はみな〳〵權者の神といふなり本地阿彌陀如來觀音勢至地藏藥師如來なんど氣によつて法を說き未來の事ばかりにては合點せずして濟度のならざるがゆゑ神とならせ商賣繁昌家内安全をいのりそれより緣と成して濟度を示給ふ緣なき衆生は度しがたければ慈悲の上の神ともなり又實者の神といふは厄病の神道祖神あるひは恨によつて世の人を惱ましし神にいはひしなどこれらを實者の神といふ此神には身にくるしみあり此紀三井寺の緣起の神も淺はかなる女のいふやうに思ふもあるべけれども尊き知識には神佛姿をあらはし御對面あつて佛法奥義を聞ませたはさづけ給ふ事あまた有なり椙尾の妙惠上人には住吉春日の兩神さい

にち彫向あつて御物がたりあり是によつて畫師のたくみ法眼上人に願て兩神を拜み度おもへども何程信心を成けれどもたくみ凡夫の事なれば位にまけて死する間無用なりと兩神のたまへども夫こそわが望處なり少しもくるしからずと願ひしゆる濕衣を織しごとくに見付させ給ふたくみは有がたく拜みしまゝ兩神の御すがたを寫し取奉りしが歸る道の鳴瀧といふ所にて落馬して命終りける此兩神の御すがた栂尾に納れり空也上人は松尾大明神御對面ありて鰐口半分つかはされて念佛のやしなひに拍子とるべしと仰らるゝこれたゝき鉦の初なり又玄濱僧都には三輪明神まみえさせたまふ數多神々に對面ありし事あれば厄病の神など尊き僧とふもひすがたをあらはし未來の事を賴む營の事なり繪馬の事も不思議なるやうなれども昔も繪にたましひの入し事あるひは聲を出し畑麥を喰しなど數多あり古法眼が繪飛驒の進五郎が彫たるもの働きたる事などさまゝ多き事なり

○金剛寶寺は名草山の半ふくにあり本尊千手觀音往古の靈佛なりならび立る處の十一面觀音は威光上人の自上り給ふ所の尊像なり本堂は南向に建給へり○龍燈の松袋谷の松これなり又上人あら行のとき美女こつぜんとあらはれ出瀧つぼへ飛入うせぬ是龍女なり其のち三年を經て又現ち出上人を拜し法螺貝如意瑠璃の香爐迦陵の錫杖横道木七本の櫻等を上人へ献じ又とび去るこれ今に當寺の寶物とするところの什物なり横道木といへるは昔は大木十圍ばかりもありけるよし中頃枯けるが其木のもとより彦ばへ生じ枝葉しげりはんもす此木夏冬ともに色變せず春にいたり新葉生じて舊葉落ち十月に花なくして菓をむすぶ大さ彈丸の如し此實よく諸病に用ひて妙なりことに心痛を治す近頃御所御參詣ありてかの木に雪のふりかゝりたるを御覽じて御歌に

横道の木ぞと思へば左はなくて雪の色をばぬすまざりけり

あんずるに寛永の頃肥前長崎より無花菓といへる種來れりこれ舶來のものなり世人唐柿といふ菓は桐の菓に似たり是花なくして實を生ず龍眼肉に似て味あまし心痛の病をよく治するとあり

○三番 同國粉河寺

那賀郡風市村にあり

本尊千手觀世音なり來由を尋るに人皇四十九代光仁天皇元年に建立なり開山は大伴氏孔子古なりこの孔子古といふは獵師にて日々山に入て鹿を射る是を代なして渡世とするとき例の通り弓矢を持て山に行にいか成事やらん其日は兎一疋も手に入らずこれはいか成事ぞ

や猿の類なりとも打取たしとおもひうかゝと山深く二里ばかりも奥に入しが日もはや西にかたぶきければ早歸らんと思ひ谷に下り峯に登りて歸る處最早日は西に入けるにより空くらくなり木の下をつたひ水を飛こゑ心ならざる折しも廿三日の宵やみにて道のあやめも見ゑ分ず夜半には月の出るを待て里まで下りぬべしと木蔭により月の出しほを待うちいつとなく居ねぶりゐたるに何となく其邊りさつと光のさしければ驚き目を覺すに月にはあらで傘ほどの圓き火の玉孔子古がまへに來る體に合點行ぬひかり物かなこの年月山中に臥たること數度ありといへども如此を見ず何さま是れは狐たぬきの仕業ならんと思ひ弓に矢をつがひきりゝと引しぼり爰ぞとねらひ丸き火の玉もくだけよと眞中と覺しき所へ切て放つあやまたずはつしと當るに忽火の玉ふたつに分れ火光は次第ゝに燈火のごとくなる怪しく立よりてみれば觀世音の像あり〳〵と見ゑ給ふ孔子古が射かけし矢を御手に持せたまひしを拜みたてまつりあら勿體なや佛體にてましませしを左は知らずして射かけ奉し事御ゆるし被下べしと大地にひれふし禮拜し奉る觀音いかなる因緣かましましけん光明をてらし給ひ汝今より殺生を止るべし世の中に罪科のうちに物の命をとる事これより重き罪あらじ所のごとくを汝が母常々我を信仰して子の身の上を守りくれよとぬがゝ事大方なら

すゆゑにこれ迄汝に付そひ守りつかはす所なり然るに汝も程なく死すべし其まゝ死すならば地獄に墮て未來永々浮瀨さらく無し其ゆゑに未來を助得させんがため母が子を思ふ事のせつなるを感じ今是を示すなりと有ければ孔子古は佛勅の有がたさに涙を流し此のち殺生ふつく止り申べし罪業をゆるしたまへと弓矢をも折くだき誓の色を現じければ觀世音微妙の御聲にてしからば汝此處に庵をむすび出家と成べし常に名號をとなへて未來の惡業まぬがるべし信心おこたりなくば我その罪をゆるし淨土へふくり得させんと仰ありて光明をはなち西をさして飛去給ふ孔子古はなみだを流しわら有がたやかたじけなやと御跡をふし拜みて元より我が身の上は今は親死去り給ひこれまでの罪ふかくして妻子も無れば此まゝ出家と成何卒して此處に庵をむすび明暮觀世音を念じ奉んと思ひけるがさしも觀世音の御助にや近き里人ども孔子古が發心したるを聞つたへ殊勝成事に思ひ日々食物をあたへければ獵師をなせし時とは心もはがらかになり雲霧の晴たるごとく安樂になりけるゆゑいよ〳〵信心おこたりなく勤けるあるとき日の暮に十四五歳ばかりなる童子來り旅のものなるが今宵一夜いはりにとめて明させ給はれかしといふに御覽ずる通り不自由此上もなく殊に夜のものとてもなければたゞねるのみの事なり夫にても苦しからずば御宿申べしといふ童子よろこび夜とゝもに咄し明さんとて爐邊によりくつろぎけるが孔子古は我身の上をかたり佛を安置すること成がたければ只西にむかひて觀世音の名號を敷千遍となへてとぢにねろりの邊により四方山のはなしをなす童子は主の顏をつくづくとながめ我そなたの體を見るに何か心に懇望の事ありと見たり苦しからずばかたり聞され上答へて曰外に望事なく只千手觀音の尊像をはしく願ふ處なり童子うち笑ひ其望こそいと安きことなれわれ幸ひ佛體をきざむ事の得たればきざみまゐらすべし孔子古大によろこびしかれば此木をもつて刻たまはれ木は前方よりこしらへ置たりとて取出す左あらば御身は今日より里へ下り三七日を過て歸られよわれ其間に刻み置べしと又食もつの事はわが思ふ子細のあれば心を用ゆる事なかれとあれば孔子古はそのよしを心得それより草の庵をあけて里に下る童子は庵を戸ざしてたちこもりけるが戸さしければ神ならで誰か是をしるものなし孔子古は里に下りてゆびを折りかぞへて明れば三七日といふ夜半孔子古が宿りへ外よりかの童子が聲にていかに孔子古かねて望みし千手觀音今ぞ出來させ玉ふぞといふ聲きゝて孔子古はふどろき取物もとりあへずいまだ夜もあけざれども庵へ走り登り見れば庵室のうち光りかゞやくがごとくさうかう圓滿なる千手觀音の尊像生るが如き御有さまこれぞ

誠に此處の御本尊となし末世の衆生濟度なし給ふ觀世音とて拜伏なしさても童子は何方に
ふはすぞと尋れど見にされば行衛のしれざるこそこれ則觀世音の變化にてふはせしならん
凡夫の目にてそれと見しり奉らざることのもつたいなや觀世音と知り奉りなば御供養の仕
方もあるべき物をと驚きふそれ誠や先達ての御告に本尊の出來させ給ふ時節も有べしとの
御事をおもひ合せ正眞觀音の御作この上はいかなる伽藍堂舎の御本尊ともなしたてまつり
度御事やと尊信し奉りけるこのよし近村近郷より聞つたへ參詣しける事いふばかりなしこ
れ粉河寺の御本尊なりこのときはいまだ粉河といふ號もなかりしとかやさて本堂の由緒は
河内の國澁川郡に左太夫といふ大百姓ありけるが一子左太郎といふて至て父母とも寵愛
ふかく大切にそだてしに左太郎十七歳のとし大病をうけて二親のあんじ大方ならず都より
歴々の名醫をまねきさまゞと療養手を盡し祈念祈禱のこる處なく金にあかし寶を拋て
快方を求といへども更に其しるしなく今は早死をまつばかりにて父母のなげきいはんかた
なし此左太郎をさき立なば我々は何となすべき何のたのしみやあらんもしもの事もあるな
らば我々も諸共に同じ道にやおもむきなんなど歎き沈みゐたる折から十三四歳計なる童子
きたりて門にたち申けるは遠にはぐれしものなり報謝をなし下されよといふに家内のもの

耳にも入らず何か歎にしづみし有さま成けるを見て童子は内に入何事を歎給ふやと尋ける
ゆゑ事の子細をつぶさに主人かたりければさやうならば我にまじなひを覺へし事あれば藥
はうたがひの事もあるべし左にあらざれば害にはならずまじなひ進ずべし只觀世音を信じ
給へといふに今は早誰をか賴むべき手だてもなき折からなればまじなひ給はれといふに病
人のふし床にたちより顔色をながめ手を差延し病る處をなでおろし申けるはおの〳〵氣づ
かひ有な本服いたさせ申べし是決て死する定命にはあらざれども業因のなす處にやとて懷
より千手觀音陀羅尼の卷物をとり出し〳〵返し〳〵かへし幾度となく唱へつゝ病人をなで
さすり給ふに今まで病苦にたへかねしが心よげにすや〳〵と寐入けるぞ不思議なれ今しば
しありて目覺れば食を乞ことのあるべきとて童子はたゞちに歸らんとて既に臺所の庭に下
りければ主人おどろきせめて兩三日も此家に宿り給ひて病人のはども見といけ給はるべし
といふに答ていや〳〵最早突ずる事なかれ我も連にはぐれ尋るものあれば先に用事ありと
てなはたち出んとすしからばいさゝかながら白銀を報せんといふに童子頭をふり謝物にす
こしも望なしとて受ず住所を聞せ給へといへどもいはず左程報ずる心の濟たまはずは何に
てもあれもらひ歸るべし今庭にあり合ところのあの子の箸づゝを下されよといふ如何しき

品と思へども望とあれば進じ申なり何とぞ御住所を聞せられよといへば國は紀州那賀郡かざし村川粉寺に住ものなり御名はいかにと問ばいづれ又逢事あらんさらばぐといふまゝに出て行いぶかしくてあと見送らんとする間もなく門口より早見失ひ影もかたちも見ねざりける扨々不思議の童子ぞと思ふ折から左太郎は目を覺しあら心よや何にてもあれ食したきよしをいふ家内はおどろき急ぎ持行ば食の味はひ今ぞ覺ねしといふ顔色を見て兩親はいふに及ばずみなく打より初めより合點行ざる童子とおもひしがもしや神か佛にてもあらんかと思ふがうち日數半月にしてすこやかに全快なしける事の不思議なり兩親は左太郎をまねき其方は病苦にて覺ねまじ數多の名醫をたのみさまざまに手を盡しぬれども其甲斐なく祈念祈禱のこる處なく金銀にいとひなくあらゆる助命の術一つとして驗しなく今ぞ臨終をまつのみにて有し折からかやうくのふしぎにて忽ち全快いたしたり今より親子三人共に紀州へ下り粉河寺へ尋行て一禮を申べしと夫婦左太郎をつれ紀州那賀郡かざし村へたづね行粉川寺は何方そと問へども左やうの寺はあらずといふ所々方々にてたづねたれどもあへて粉川寺といふ寺はあらず知らずといふたとへ知れざるとて空く歸るべきにもあらずとて山際をさまよひけるに谷水のながれ白き水の來るありさては此山上にも人里のあらんと分

行に次第〳〵に日も早暮におよぶころひとつの柴の庵ありさらば此庵をたのみ今夜は一宿すべしと案内をこねども答る音もせず明き寺かと見れば持佛堂に本尊と覺しきもあり何れにもせよ夜を明すべき人家外にあらねばこゝに入て夜をあかすにしかじと少の食物用意あればこれにてつかれを休め居る處へ孔子古は里よりたちかへり是を見て留守中に内に入たることをとがめしかば某は云々の者にて當國かさし村にて尋べき人ありて態々下りしに道に踏迷ひこれまで登り日に行くれたよるべき家もなく據なく當庵に入て勞れをやすめしなりあはれ今宵一夜を明させ給へといふに此澁川左太夫といふは五畿内にてかくれなき大百姓の富家にておそらく大名といふともくるしからぬほどの豪家なれば孔子古も兼て其名を聞居たる人の事故面をやはらげ扨は承り及びし左太夫どのにや御見受のとはりあさましき不自由の庵なれどもくるしからずば一夜御あかし候べし先々燈火をともし候はんとて火をたき打寄て旅のつかれを休め給へさて御尋とはいか成方をたづね給ふや左太夫御尋なくとも申べき事なり當國那賀の郡風市村にて粉川寺と申を尋ね申なりといへばすなはち風市村と申はこれへ御出ありし道にて候が粉河寺と申は是なしといひつゝまづ我等はかんきんをいたし緩々御はなし承り申すべしとて觀世音の御前へ燈明を上げまゐらせ御名號を

唱へつとめ申されしに左太夫夫婦も觀世音とき〻孔子古が後に居直り本尊をおがみ拳に不思議や本尊の御手に何やらん異なるもの持給ふをよく〳〵見るに正しく見覺なある我子が箸筒なれば大に驚き左太夫夫婦等はこはそもいか成事やらんとおどろきあへるに孔子古は後をふりかへり何事をかいひ給ふと云に左太夫申けるは今觀世音の持せ給ふ箸筒こそ正しくまがふ方なきこの左太郎が箸づゝにて候とて左太郎が病中のありし次第を物がたりなし扨は過しとき童子と見なさせ給ふは此觀世音にてましませしにうたがひなしあら有がたやと一同に伏おがみ有がた涙にくれければ孔子古は成程それに付我も思ひ合せし事あり當春の頃いつものごとく看經をなし翌朝見るにこの箸筒を御手にもたせ給ふは不思議の事とぞんじつれども元此觀世音と申は人作にあらず十四五歳なる童子と現じ給ひ此處にて彫刻なし給ふ正眞の御自作の觀世音にてましませば容易に愚僧が手をさす事も恐れあり去によつてもしや不思議の事もあるやらんと其まゝになし置しがさては貴殿の家の箸筒にて有しかや此御本尊を造り給ふときも童子にて御出なり又そなたへ御出ありしも童子にておはせしとあればまさしく此御本尊の變化にまがふ事なしとていよ〳〵有難さ身にあまり皆々感涙をながしける左太夫がいはくかゝる尊き御本尊をわづかなる庵に安置したてまつる事いと勿體なしそれがし願恩のため本堂建立したてまつらんと河内國へ歸り材木竹石を運送なし大工番匠に命じ金銀を抛て大伽藍造營なし扨寺號は則觀世音の御あらし粉河寺と號し奉ぬいつれにても本尊におろかはなけれども御佛は御自作の觀世音と申寺號までも佛勅ましく〻て大伽藍建立なりしもみな觀音薩埵の御自力なるは別て尊き御寺なりけり

御詠歌　父母のめぐみも深き粉河寺

佛のちかひたのもしきかな

此父母とあるは釋迦如來阿彌陀如來をさしていへる父母なり兩親はどに他人が思ひくれるものあらず若も片輪かあはうなれば猶さら不便におもふ親心なりといふとも人間の淺間しきには間々には見放す親もありて勘當の義絶のとあらぬ事もあれども二尊の御惠みは左にあらず釋迦如來はけがれたる娑婆にましまして衆生を濟度なされ阿彌陀如來は九品の淨土にましましいかなる惡人のものにても助け給へば只名號をとなへて一當に賴奉れば御見捨なきなりまして況んや臨終正念極樂往生どねがふ信心念佛の行者御惠みにもるべきや父母のめぐみと讃かけて粉河寺のこの字を子といふ心より佛のちかひとは則觀世音の御事を

いひたる者なり觀音の教によつて極樂淨土へ往生をする佛のちかひ願母子きかなとはよみたまふ御歌なり現世の事は猶更いふに及ばず子なき者には善男子をあたへて子孫長久をなさしめ給ふ是二世現當の神とも佛とも信ずべき事なり

○或古書にいはく長和寛仁のころ紀州那賀郡粉尾田といふところに紀四郎奉成といふものあり身の貧なるものなれば朝夕のいとなみにかゝりて後世の事はおろそかなる者なりしがいかなる前世の結縁にや常に粉河寺觀世音を信じ名號おこたる事なく寶前へ歩をはこび信じ奉りしが其身五十六歳にして眼滿といふ病をうけ腹大にはりてくるしむ事かぎりなし奉成がおもひけるには我常に大悲の尊像を尊む事普門品に生老病死苦以漸悉令滅とときし給ひし病苦をもすくひ給ふと聞しものを夫ゆゑ人身は何どきいかなる病をうけまじき物にあらず我觀音の御ちかひをたのみて粉河寺へ月まうでし信ずるなる定業は是非なしかゝる病苦をすくひたまはんものをと深く心中にたのみ病中にも御名號おこたる事なくて獨言なせしがある夜の夢にくらゐ高き御僧來らせ給ひて汝多年われを願ゆゑに此たび汝が病をいやす藥をあたふるなり早くのむべしとてちいさき丸きもの三つぱたまはるいたゞき其まゝ二りうをのむ今一りうをおとし求めさがすと思ひて夢さめぬ大にはれたる腹にはかに減じて身かるゞとなり心よき事かぎりなしかたはらに臥たる妻子をよびおこしし かゞとかたるに皆々大によろこび取おとしたる一りうのくすりをさがし求め見るにかたく小さき蓮の實なりかうばしきことかぎりなし是を錦の袋に入守となしはだをはなさずもちゐたりしがあるときいかゞならせ給ふやらんと袋をひらき見ればなるほど小き青蓮花のつぼみ蓮肉ふのれとひらき芽出たりふしぎといふも餘りあり諸人これをきゝつたへて其沙汰高かりしかば宇治どの聞しめし奉成を召して尋たまふに始終をくはしく申上げれば殿下聞しめし隨喜の御涙をながさせたまひ御結緣のためおがみ奉らせよとて御簾のうちへ召入られておがみ給ふてこれをわれに得させよとて奉成には彼處にて一期安穩にくらすべき田地を下されかの蓮花は宇治平等院の寶藏にをさめさせ給ひける奉成は大病たちまちにいゆるのみならず一生安穩の田地をたまはりけるはこれ觀世音の佛力にあらずや

○又もろこしに廣孝といへる人ありいたつて孝心の深き人なりけるが六月朔日といへるころ其母常に梅花を愛し望まれければときならざる庭の樹木に梅花一枝今をさかりと開き得たる事あり是孝心なると天地感應のゆゑなり世の人是を稱して孝感梅といひけ

るとかやこれをもつてこれを視ればいはんや信じなば觀世音の妙智力の御ちかひ病苦をまぬがる事うたがひなし弘法大師も枯骨あふらづく事を得たりとをしへ玉ふも此事なるべし

昔見し春のひかりのかはらねば今も御法の花ぞ咲らん

源有長朝臣

○四番　和泉國卷尾山施福寺

此山は往古より尊き御山にて弘法大師も此山にて權僧正の御弟子となりて落髮ありし處なり元は彌勒菩薩の御山にて觀世音にて非ず然れば今觀世音ばさつの御山と思ひ彌勒菩薩をしる人少しこれ觀世音有緣の地なり往古は此寺に知行も多くありみな福僧なりかるがゆゑに寺中の僧ども出家の心あらず平生盤上あるひは歌俳諧などにて日夜なぐさみくらしかつて後生の事をつとめず法義にうとく凡俗にひとしき僧多かりけるこれは身に不自由なきゆゑなり又叡山法師は木曾義仲より惡しく恐はれしも世家の身として佛法にうとく凡俗同然の所爲は是寺領多不自由にあらざるがゆゑなり又在家俗室のものゝ有德人は金銀多くて何ひとつ不足なくてくらすがゆゑに佛法のこゝろうとく信心おこたりて念佛は身にくつたくあるか又はうれひに逢ふか心に不足の時ならでは念佛申ものなく心おもしろきときはかつて佛心もおもひ出さるものなり卷尾寺の寺中の僧もかくの如にて出家にてありながら邪見にて出家の行狀にてあらざりしがあるとき下司法師きたりて申けるは我は靈場の寺々に夏九旬が間本堂の掃除いたし御出家方につかはれたく願ふ者なるが此御山は尊き處なれば一夏の間御つかひ被下たくとねがふにいかにも左ある事ならば勝手にいたすべしと有ゆゑそれより本堂のさうぢあるひは阿伽のみづをくみ又は寺中の柴木をかり荷なひ來る事二三人前にも增たりける年は六十餘りにて見ゆるが中々若きものゝはたらきよりもはげしくて寺中の僧にもよろこびいつまでも留ふきたくおもひしが夏九旬みちければ彼下司坊主いとまを乞て罷歸るとて寺々へ行はや明日は歸るべし夫につき御ねがひあり是非と申にはなく候へどもこれより遠國へ歸り候事ゆゑ路錢すこし被下候はゞ忝からんといふ何か慳貪邪見なる寺中の坊主ども最初よりものやらうといふ約束せざりし事なれば今以左やうの事もいたしがたく寺々をたのみ見よといふ西より東の寺々へあちこちと行て賴めども誰あつてやるべしといふものなしつかふ事は我さきをあらそひつかひながら今いさゝかの草鞋錢をもつかはす寺もなければ下司法師もせん方なく左あらば托鉢にて歸るべしとて夫より本堂

の様にあがりて大音上てのゝしりけるはあら笑止やかくのごとく尊き山なるにはどなく野
飼の牛馬悪魔外道の住家とならんかゝる靈場に誠の世家ひとりもなく形は僧なれ共身の行
ひは出家ならず見よ〳〵今に魔所と成べしとて南をさして出行けり其聲力丈の住持法海上
人の御耳にひゞきのゝしる聲のきこえければこれたゞ人の所爲に非ずあと追かけて速かへ
れよと寺中の若僧ととゞと〳〵走り出追かくるにかの下司法師はしるとも見えず半町ばかり
先に見えながらいづれも追付事かなはず追々人多く出て紀州街道大津といふ所のうみぎは
まで追かけしが彼下司法師は海上を真一文字に平地を歩むがごとくにゆくはどにあと追た
るあまたの僧徒あきれにあきれて只忙然としあれよ〳〵といふばかりなり終に其かげだに
見えず行ければ皆々立歸り子細をかたるに法海上人扨てそ凡人にてはあらず初めのゝしり
し聲のひゞきといひ今海上を歩み玉ふはまさしく御佛の化身なるべし是まゝにては叶ふま
じ衆僧一同御わびを申べしと今の海上に向ひ一山の僧衆一心に御わびを申上何卒われ〳〵
が罪をゆるし今一度御すがたを現じ玉へと信心渇仰なしければ其時空中に觀世音あらはれ
玉ひ微妙の御聲にてわれ誠は普陀洛山の本主千手觀音なり一山の衆僧ども佛道法儀を守ら
ず邪見放逸なるがゆゑ出家たる行狀を示さんためにかりに下司坊主となり一夏中凡僧の業

をなし身に働きの勞をいとはず貧きものゝ苦みある事を見さしむるは出家となる身の金銀をむさぼり福あるにおかされ法義を忘れ出家たる身の本體をうしない凡俗にも落ち地獄にもおとすべき奴原の目を覺さんが爲に化身と成て示したりとて又南をさして飛去り玉ふ上人を初とし一山の出家誠や大俗にひとしき淺間しきふるまひ成しが勿體なくも觀世音菩薩の御方便の御化身とは夢にもしらず一夏九旬が間いやしき法師とおもひ澤山につかひ奉りし大罪のはどゆるさせ玉ひ候へと皆々涙をながしひれ伏ておがみ奉るこれ觀世音の御方便による一山の出家今より後は心を改め法義を大切にはげみて邪見放逸の所行をゆめ〳〵いたすまじゆるし給へと猶もなみだを流してわび奉る法海上人は一山の僧にむかひともに涙をながし永く法義を勤め御本尊を守り奉るべしとて低頭平身して則現じ玉ふ御姿の千手觀世音を彫刻造立したてまつりけるとなり其ときゝ卷尾の山より光明赫々として和泉の國中かゝやきければさてもふしぎの御事なりとて一國の者ども見るも見ざるも聞程のもの夜のうちより立出て卷尾山に登りおがみ奉るに此の觀世音の御身より光明を放ち給へば誠に正眞の觀世音にてましますとて尊信せざるものの無かりけり今西國四番の槇尾寺觀世音これなり此御すがたは地獄道を濟度し給ふ御像なり極樂へ行ものは少く地獄に落る者の多きを御なげきあつてそれを濟度なし給ふなるゆゑに千手の御身をもつてたすけ給はんところの御像なりけり

御詠歌

深山路やひばら松ばらわけゆけば
まきのを寺にこまぞいさめる

此深山路とあるは高き山路をいふ衆生ぼんなふ大なる山路を越されば極樂にはゆかれず檜原松ばらわけ行とは銘々あく業のぼんなふ邪魔するを檜ばら松原といふあるひは腹をたて嗔恚愚痴と三つの山ひばら松原と成り袖にまとひかゝりかりそめにも嗔恚をもやし其火すなはち火の車となり地獄のせめをうくる苦み又腹をたて通しにもあらず其間は機嫌のよい日も有ば愚痴といふもの起る其愚痴は止がたくしてわづかなるものわけなき物にても大切にもなでさすりし死る今迄も夫に念をかけ迷ふもの多し或は妻子にまよひ財寶に心を殘し往生をとげずこれ皆檜原まつばらに同じ貪欲といふやつも朝おきるより夜ねる迄間なく欲心といふもの有なり是をわが胸に槇尾ほどの大なる深山あつて檜原松ばらにかゝり行かぬるなればなり行れぬとて行すゝ往生する時節あらずいづれ其野山にかゝる貪欲愚痴の煩惱

三毒の悪業を切はらひ行ねばならぬ其道しるべは六字の名號なり劔にても拂かぬる悪業ばんなふなる中よりも名號をとなへ極樂に往生せんと一すぢに觀音彌陀にすがるべし然き人の中には悪業のまじりし念佛役に立すと安心を定し人も有りともそれは大ひなるあやまりなりたとへていはゞ加茂川の水たゝて渡るべしといふごとくせんぐりにながれ來てたゆる事なくばんなふの趣も其如く盡るを待て其とき念佛申さんといふがごとく煩惱は盡る事あらずばんなふの中より申す念佛にて罪もきゑ信心も出る信心出て後申さんとならば信心先に出るものにあらず念佛唱るうちに信心起るなり參り下向する中に信心ふて、るぞ劔にても拂越されぬ檜原松ばらにても卷尾寺へ參るうちには駒ぞいさめるとなり此駒は心の駒にてわき道へ行かぬやうに西方極樂の東門を心ざし眞直に駒の頭を向け九品淨土に往生せんと心の駒にむちうちていさみ〳〵て往生をとげよとの御詠歌なり

○既に京都東山岡崎といふところに娘を京に奉公に出しふきしに母病氣につきむすめに逢たし〳〵と云せめて死目にはといひつゝ思ひつめて死たるに早く走り歸へりしにはやこと切れ死目にあはず歎かなしめども其甲斐なくて今は詮方なくむすめも氣を取のばせて人々大になんぎなりける夜明て沐浴させん其ときいとまごひなせと無理に納戸

に入て寐させけるところへ連行母のかはの見ふさめと髮のあるうちに見せけるに榜にむすめも逢たきと思ひじをかこちつゝなみだにむせび居るに母はむすめに逢たしとふもふ魂魄いへのむねにとゞまりしか死したるからだにもどりむつくとふきしかばむすめは母のよみがへりしかとうれしくたがひにいだき合ながらきやつといひて兩人ともに死たりこれは最期の一念なり

○近頃是によく似たることあり寛政年中の事なり山城のくに淀の近村に五助といへる貧民あり日毎に魚荷を持て京都へ通ふを世渡りとせしが至て正直のものなりける日毎に通ふ道に柳といふところに畫食の茶店あり日々堤にて行かへりに休みけるにあるとき止事得ずして其家にて鳥目百文かりて明日來るときかへすべしと約束して歸けるが其夜より不圖風のこゝちとて打ふしけるが其まゝ枕あがらず鳥目かへすべき約束たがへりとくやみけれども妻子氣もつかずつひに三日をまたずして死さりたり其友よく日かの茶屋に休み五助も急病にて死ける事をかたるに茶店の家内一切に受あはずうちわらひねるゆゑかの者我友だちなればちがふ事なし何しにいつはりをいふべきやといふに茶店のものいやく夜前五つとき頃我等が方へ參られたりといふかの者それは人たが

ひなるべし實に死たるに相違なきものをといふいや決して人違ひにてはなし其前々日鳥目をかしたるを約束の日限ちがひたるを念頃に斷はり鳥目百文をかへして歸られたりといふ其時刻をきゝたるに丁度死たる時刻也さては常々正直の者なればその靈の約せし事をたがへざりしならん誠に佛となるべきは此人なりけりとて感せぬ人もなかりしなりむかしも今も一心のなす所は善惡ともたがふ事なし

○五番　河内國藤井寺

人皇四十五代聖武天皇の御建立なり初瀬の觀世音と同木にして佛師も同じ賢問子けし國の同作なり此藤井寺はもと剛林寺といひしなり然るを藤井寺といふは大和の國かまといふ所に藤井安元といふ大惡無道の者あり佛とも法ともしらざりしが或ひは猪熊のるゐを煮て常に食ふあるとき狩に出てうち得たる猪を急に喰たゝ思ひ山寺にいたりてむさと料理せんとす堂寺の坊主見付こはいか成事ぞ在家にてもある事か寺のうちにて左樣にけがれたるものをやく體もなき仕業かな外へ持行よと叱ければ句をやかましくいふとてはやく堂守を柱にくゝり付て此うへやかましくぬかすならば是を振舞とて山刀をふりまはし白眼つけてそれより佛檀にかゝり花瓶香爐なんどうち散して前卓を取いだしよき眞魚板なりと彼猪を料理し佛具をうちわり燒ものとなし炙て食ひなんぢもくらへと坊主の口へおし込あと其まゝにふみちらし立歸るかゝる大惡無道の者なりけり恐ろしやそれ人間のさゝやき言をも天の聞たまふ事は雷のごとく其ものゝ心には人はしらず聞ものゝあらずと思へども天しる地しるとてさゝやき言をも天地へひゞき聞ゆ焔魔王の御傍にある十王具生神それ〴〵の役人あり て日々に作る世界の人々の惡逆善根とも一々帳面に記しあつて善根なく罪ふかきもの死すれば冥途におもむき焔魔王の前にて一生作る處の罪科又は善根とも糺さるゝなりしかるに安元あるとき不圖目をさまし頓死の如く息は絶れど胸のあたりは火のごとくあつければ廿四時はまつべしと其儘に置たる所に三日めに息を吹かへしければ女房子どもは大によろこび心もちはいかゞそといへば安元はあら有がたや我今まで佛法をさみし人の信心までもさまたげなせしが此度思ひしりたりさて死たるときはうつゝのごとく目くらみ死生二途の道におもむきしに牛頭馬頭の鬼等きたりて兩の腕を引さげて中を飛でつれ行しが恐ろしやむかふを見れば鐵の大門あり大王の前にて鐵がねの鎖をもちて我をしばりあげ十王倶生神居ならび給ひし前に引すへ牛頭馬頭ら申は大日本の國大和の里に住る藤井安元と申罪人なり

と申上るに焔魔大王のたまはく己六道よりさまゝ受がたき人身をうけて善根はなさ一て十悪五逆の罪を作りたる罪人なりすこしも善根あらずとて彼帳面をくり返し讀きかせ責給ふに一々おぼえある悪事のみなり如斯の罪科あれば地獄にやるべしと御裁判きはまりそれ引立よと仰あれば牛頭馬頭すでに連ゆかんとする所に老僧一人きたり給ひ藤井安元はいかにも善根とては少もなきものなれども我に縁あるものなりたすけて給はれ大慈大悲なれば今一度娑婆へ歸してしばしの命を我にあづけ給はれと仰ければ焔魔王あらありがたやうれしや今に初めぬ大慈の御心しからば暫の間御あづけ申なりとあれば牛頭馬頭はさつと引老僧と思ひし御身より光明をはなち給ふにしばられしくさりの縄目ばらゝととけ苦みをたすけて此方へ來よと仰によつて御跡をしたひ門の外へ出ければ必これをわするべからず娑婆へかへりて念佛をとなへよと仰ける故御僧様にはいかなる御力にて候やと尋ければ我は長谷寺の觀音なり汝は長谷寺を建立のとき人歩にさゝれ材木を持きたりたる縁あり汝はかつて信心の心にて運しにあらず腹立不足の心ながらはこびつれども其勞をなせしを縁とし此度はすくひ得さするぞかならず忘るゝ事なかれと仰られ此道を眞直に行べしとをしへ給ふあら有がたやとをしへの道をたどると思へば忽によみがへれり今より殺生かつふつ止

り心を改め念佛を申後生をねがふべし初瀬寺の材木を運ばずばたちまち地獄におつべきに少しの善根にてさへ觀音の慈悲心により助る事の御恩を報せざらんやと夫よりは女房子にいとまを乞して髪をきりすゞに諸國修行し國々をめぐり所々にて我ごとき邪見惡業のものわれば異見をなし共に我身のざんげをなし惡逆殺生をとゞめ我今かくのごとき身となりしは是みな觀世音のすくひ給へるなりといひて佛法をすゝめ廻り長谷寺の觀音へ御禮の參詣なし猶また未來成佛なさしめ給へと拜み奉りそれより段々と順禮し河内の國剛林寺に參りて觀世音を拜するに本堂もつての外に損じ御佛の容貌も雨露にうたれさせたまふはどなればしきりにもつたいなく覺ていかに末代なればとてかくまで破損なし玉ふにやと堂守にたづぬるに本尊は賢門子けしこくの作にて人王四十五代聖武天皇の御建立にてすなはち長谷寺の觀世音と同木同作にして開基は行基ぼさつむかしは七堂伽藍の所にしてありしが隱仁の亂により燒拂はれ其後本堂出來させ玉へども又今破損して雨にうたれ玉ふ程なれども中々大そう成ことゆゑ世話いたすべきといふ人とてもなくと物がたりあるにあらもつたいなや上もなき有がたき御本尊なれば此上は我諸所をかけめぐりても人々をすゝめ奉加をもつて本堂建立なさばやと發願し我は長谷寺觀世音の御利生にてよみがへり今は世をのがれてかくの姿となりて諸國を修行するも邪見の人あらば佛道へすゝめ入れ又かやうの勸化は身の相應なりことさら長谷寺觀音と同木同作と聞ば此御本堂再建なし玉は全く長谷觀音へ御禮の奉公なりとそれよりして安元は諸所方々を勸化なし我身のうへをはなし剛林寺の本尊雨露にうたせ奉る事のもつたいなきをのべて諸國を勸化し一心のなす處にや三年餘を經て終に本堂再建成就せしめけりよつて世人藤井寺といひけるも全く安元ほどの惡逆の者なりしも觀音の御たすけによつて斯のごとく大望成就なせしを末世の衆生にしらしめんがために剛林寺といへるもおのづから藤井寺といひ習らひしもこれ又觀世音の大悲の因緣とするべし

御詠歌

まゐるよりたのみをかける藤井寺
花のうてなにむらさきのくも

此御歌のこゝろは藤といふ物は高木に登り紫の雲にまがへるごときの花はさけども我自力にては高きに立て花さくことならず大木にまとひ付てそれを力にして登るなり人も他力にて成佛はするなり我々ごとき自力にて成佛は成がたしそれゆゑに大木の觀世音を力として

往生せよとなりいで人間界へうまれ來るといへども他力本願にあづかり拳らずしては成佛はなしがたし觀音の他力をもつて紫の雲のごとく極樂淨土の臺にいたらんとの御詠歌なり又藤井安元の住ける所長谷寺藤井坊これなり

○是は近き頃なるが雲因伯の國さかひに漁を同ふする海崎ありけるが雲州の漁人いかなる事にか九歳におよびたる男子を捨けりこれを因州の漁人年五十にふよびて子なかりければひろひておのが子とし養ひ程なく十六歳になりしとき隣家に十七歳になる子と二人をつれ父と三人乘りにて漁に出たりすでに城下をはなれ十里ばかり乘出しその海崎にいたり漁をなしゐたるが老父のいへる事より言葉あらそひしてかの十六歳になるものいかりにや絶ざりけん十七歳のものと心を合せその老人を引すへ舟綱にてぐるぐ巻にしばり舟のさきへさし出すを心得たりと十六歳の子出刀庖丁にて水もたまらず老父の首うちおとし死がいもうみへ流しふねにかゝりし血汐をよくあらひてたゝ父はあやまつて水に溺れし體にして二人ともよくくゝ示し合わが住かたへ漕かへるにすでに舟番所のまへを過んとせしに其舟まてと聲かけるとひとしく小舟にふな役人うちのりひしくゝとこぎ付て兩人の若ものを有無の問答にも及ばず取て引すへ高手小手

にいましめたり兩人おどろきわれくゝ何のあやまりあつてかくのごとくいましめ玉ふぞ尤わが父海上にてあやまつて溺死せしをかなしみ急に我家にかへり人々につげんといそぐ處なりゆるさせ玉へといつはるにかの役人大にいかりなんぢら兩人今朝親子三人乘にて十里ばかりこぎ出海崎にをいて父を殺せし大罪人猶もわれくゝをいつはらんとするや兩人言葉をそろへ老人はあやまりて溺死いたせし處にて我々が仕わざにはあらずといふにかの舟役人大にいかりおのれは繩をもつて老父をいましめおのれは出刀をもつて首をうち落し兩人して舟をよくあらひたる事明白なり此上猶も陳せんとするやとありしかば兩人一言の返答もなく其罪に伏せしかばきびしく禁獄せられつひに重き刑罰に行れけるこれはいかなる事にて明白にしられたるといふにすべて海濱には外國船手あてのため遠目鏡を以て日夜海上を遠見するありはからずもこの目鏡のさきにかゝりてかく明白にしられたりとぞこれいはゆる天しる地しる人しるの所にて天の照覽恐るべき事なり尤惡事をなし法をおかしたる者いづれか天網のがるゝはなしといへども斯ばかり速に天誅をうけたるは恐るとも恐るべきなり

古歌に

紫の雲のおりゐる山里に心の月やへだて成らん　基俊

へだてなき心の月と紫の雲とゝもにぞ西へ行けり　二品親王覺性

何事も心のごとくめぐる國の法の初にめぐり逢ぬる　前中納言爲家

何方も殘りくまなく照すなり時まち得たる花の光に　兼好法師

いく度か又世に出し秋の月あまねき影は人も洩さず　花山院太政大臣

○六番　和州高市郡壺坂寺

人王五十代桓武天皇の御建立なり壺坂山に弘法大師の御作也といふ山の岩とゝく〳〵五百羅漢の像あり梵字あり南都の都を今の平安城にうつさせ玉ふ桓武天皇奈良にて御眼病の御事ありしがば典藥頭その外さまゞゝと御藥をさし上まゐらせ貴僧高僧御祈禱あれども少も御驗なく甚御眼いたませられければ少も御開き遊される事成がたく帝思し召げるは最早醫師の藥力には及がたかるべし此上は神佛の力ならではなはるまじきぞとて先佛法をこゝろ見るべしと仰出されけるは朕が眼病七日のうちに祈りて直すべしもし七日の内になはらずば佛法あつて益なしさらば佛法を亡し寺々をことゝ〳〵くはゑし出家は還俗いたさすべし何

の法にても能出て御祈禱いたすべしときびし〳〵御ふれ有けれども誰あつて我出んといふ僧なしさもあるべき御事にて七日のうち御祈禱なして御心よくならせ玉へば其身はいふに及ばず佛法の力なれどもし自然仕そんじたる時には其身ばかりの罪にあらず佛法を滅する事ゆゑ誰あつて出る人なし其ころ吉野の山奥に法恩沙彌といふ尊き僧まし〳〵て岩窟に行ひすまして居玉ふ此窟の片わきに柴かる老夫二人荷をおろし休み居て咄しするは帝さまの御眼病を七日のうちに御祈禱申て直しぬる出家を御たづねあるに御祈禱申上てゝ七日のうちにしるしなくば佛法あつても益なきものなれば破滅して坊主どもはことゝ〳〵く還俗させて我等と同やうに山かつにせんとの御觸帝さまも御無理なる御事今どきそんな尊き御出家はあるまじもし何方よりも出る人なくば何宗によらず何と成やらんと物がたりて過るを法恩沙彌聞たまひそれは廣き世界に貴僧も有べきに何ゆゑ御祈禱をいたさぬ事ぞ我は世のまじはりをきらひ山奥に住ければ聞流しにもすべきなれども日の本に佛法の滅すると聞ては其儘にも捨られじさらば我行て御祈禱申上奉らんとそれより岩窟を出て内裏をさしてのぼり玉ひ御門をつかく〳〵通り玉へば御門番見付て何ものなるぞと咎げる法恩沙彌は岩窟に長くすみ居て湯水をもつかはざれば身體眞黑にふすぼり髮ひげ長く衣といふも見ぐるしく

て見分がたく妖物のやうなる體なれば咎むるも道理なり法恩沙彌の仰けるには成程不審最もなり御帝の御眼病御加持いたせよとの御ふれありしよし我は吉野の山奥なる洞穴に住ける法恩沙彌といふものなり佛法の滅せん事の悲しさに帝を安んじ奉らん此よし仰上られよとのぶるに其趣を次第〳〵に取次申上げれば時の關白より帝へ奏聞有ければ、それ召せよとありける故やがて内裏へ上られけるが御側には女官更衣の上臈がたなみ居給ひて沙彌の體いやしげなるを見て皆々笑をふくみ給ふ法恩沙彌仰けるには御いたはしや辱くも天子の御身なれども疾病の御なやみ御心に任せ玉はずいで〳〵揭僧祈奉らんと申上るに帝のたまはく佛法の奇特法力を以て直るものならば七日のうち奇特を見すべしと仰ありけるに法恩沙彌かしこまり奉り佛法のかたじけさなはいかやうの病人にても又は地獄におちゐたる罪人にても驗ある事うたがひなしまして御目の御病なればいと易し七日と申ばほど久し只今即座に御平癒なし奉るべしとて千手陀羅尼を唱へ給ひ珠數をもつて御眼をなで給へばふしぎやつよ〳〵痛給ふ御目次第にやはらぎ給ふ故いよ〳〵だらにを〳〵かへし念誦し給ひ御目をなで給ふごとに御いたみ去て陀羅尼百篇となへ給ふうちすみやかに御平癒あれば恐多も御帝も手を合せたまふ誠に佛法の有がたく貴きこと法恩沙彌の功德のいちじるきよと

仰げる沙彌もよろこび奉り御眼病御平癒の上は外に御用もあるまじ見ぐるしき此さま内裏に恐れありと御いとまを願ひ給へば何なりとも望あらば申べしと仰げるに世のまじはりをいとひ山奥にある身に候へば何事にも望なし只佛法の滅せん事を聞にしのびざるが故とありたるなりと申上げれば帝のたまはくまことに佛法を斷絶すべき朕が心にあらずかく嚴しくふれ流さば世にかくれたる貴僧がごとき出家の出まはしく思ふがゆゑなり今より法恩長老とよぶべしと長老の法號をたまはりけりこれ長老の初なり法恩は有がたさ身にあまりしばし滯留すべしと止め給へど袖をはらふて吉野の洞へと歸りたまふ其後帝おぼしめすには何卒いま一度法恩長老に御對面あそばされ度おぼしめされ佛法のとくにて御目も直り給へば靈塔をも御建立あそばされたき御心にて長老をふたたび召れて佛恩報謝のため堂塔を始られ度間何國にても靈場を見たて貴僧これを開基せよと命じ給ふ長老はふたゝび世には出まじと行ひすまし給へども勅命辭しがたく一つには一ケ寺御建立有べきとの事の有がたさ末代功德となるべき事量なしとて法恩長老御うけ申され直さま内裏より墨の衣に草鞋をめし諸國靈場をたづねさせ給ふこれも千手陀羅尼をとなへつゝめぐりたまふに大和の國つば坂の地にて日暮たれば其處に野宿し給ひ夜もすがらたゝにを唱へ給ふに何國ともなく微妙

の御聲にて同じく陀羅尼をとなふる聲のきこゆさても凡人の音聲にあらずと心をすましてきゝたまふに地の下に聞ゆるふしぎの事と思ひ夜とゝもに聽聞ありけるに地中にたがふ事なしさては此處にふしぎの靈佛ましますにやと夜明て里人をかたらひ堀せ見るに七尺ばかり土中より瑠璃の壺を堀出したりふたを開き見れば一寸八歩の千手觀音にておはしますこれ全く御帝の御望に達しかゝる靈佛出させ給ふといひ一つには佛法榮の吉瑞我身の冥加ありがたきと申も恐ありとてそのまゝ内裡へ持登りつゝ帝へ叡覽にそなへ奉れば帝の御悦なゝめならず則出現の地に御堂を建べしと被仰付小佛なれば御鞘佛に納よとの勅命によつて一丈六尺の大佛をつくり其胸へ納奉る法恩長老を則ち開基とし給ふ壺坂の地より出給ふ故につぼ坂寺と名付たまへり

○つぼ坂寺のほとりに土佐町といふあり此町に澤一といふ座頭わりしがある人澤一にいふにはつぼ坂の觀世音は其むかし桓武天皇御目をわづらはせ給ふとき御利生によつて建立なし給ふ御寺なりよつて其方も此觀世音を一心に祈願なし奉らば目の明ざる事やあるまじといふに澤一これをきゝてそれは耳よりなる事さあらばいやしき我等なりとも七日の百日といふてはかなふまじこれより降ても照ても暑寒いとひなく參りていの

らんといかなる雨雪をもかくる事なく九百九十九日に成ければ今宵は觀音堂に通夜して御夢想の事も蒙らんとこもりしかども何の御告もなく目もかはりし事なし澤一大に力をおとし扨もきこえざる觀世音かな帝の御目は七日をまたずして直し給へども澤一が目は一千日詣し御たのみ申せどもなにのしるしだになしさらば此程日々歩みをはこぶものならば餘の神佛ならば御利生もあるべきものを無益に千日まゐりしたる事よ口とはちがひてたのみがひなき御本尊哉と大にうらみ挙り見ねざる目をもむきいだし本堂をにらみすごく坂道をかへる處に後より誰やらん澤一〳〵とよぶ聲に誰ならんと返り見れば本堂あざやかに見えて兩眼淸々とあきらかなり澤一大におどろきこはありがたき御利生かな凡夫のあさましさに觀世音をうらみ奉るとのもつたいなさ其つみをゆるしたべと涙をながして御禮を申上なにがにはかに目のあきし事なれば見るほどのものゝめづらしゝいさみすゝんで我家にかへりしに女房は是を見て澤一どのが目がひらきしかとよろこべば澤一は御身はわが女房か隣の人かとたづねけるも尤なりこれをきゝ近隣の人々御本尊の御利生をおどろかぬ人もなかりけり其夜澤一が枕元に觀世音告させ給ふはなんぢ前生の業により今座頭となりたれども千日まゐりして願といへ

ども中〳〵罪業ふかく目を明けつかはすべきものに有らざれどもなんぢをまゝ〳〵と恨みたるによつておけつかはすなり其ゆゑはもしこのまゝならんには猶々心ざし惡くひがみて佛法にうとくなりなん事不便におもひ澤一〳〵とよびかけしはわれなり今までたび〳〵云聞せぬれどもこれまで汝が耳へは入ざりしなりしかれどもいまだ宿業つきざれば此上はいよ〳〵信心渴仰してかりにも惡をなさず善根をつまざればまたもや御佛の御罰をうくる事あらんもしらずたゞちに三十三所順禮なして佛恩報謝し奉れと告給へば澤一は感涙とゞめかねいそぎ旅の用意なし夫婦うちつれ順禮なし奉るとなり

御詠歌　岩をたて水をたゝへて壺さかの　にはのいさごも淨土なるらん

岩をたてとは岩はど高くしてかたく動かざるものなしたとへ大木にても家にても風にてうごかぬ事なし觀世音の御ちかひは岩のごとくすこしもうごかぬものぞ水をたゝへてとは觀世音の御ちかひの深きをいふさすれば壺さかの庭の砂子は淨土と見るなり

○此寺は元より靈驗あらたなる靈場なるによつて人皇五十四代仁明天皇承和四年己十二

月二日定額并に官長の檢校たるべしとの宣下ありしとなり續日本後紀に見ゑたり又鎮主龍藏權現は吉野川赤根が淵の龍神にて在ます

○又つぼ坂より八町ばかり東に高香山といふ處に五百羅漢あり兩界の曼陀羅をきざめる岩あり是今の奥の院といへる是なり

○花山院の時代に眞興阿闍梨といふ人居ますこれを世に子島の先德といへり密宗の秘事を傳ふ今に子島流と稱するは是なり

○大倭の國を改めて大養德の國とし又山跡の國とよびぬ又天平勝寶の御宇に大和と改め給ふこれ風土記に見ゑたり

古歌に

一聲を聞そめてよりはとゝぎすなくに夜深き夢覺にけり　前大僧正公澄

種しあれば佛の身にも成ぬべし岩にも松は生けるものを　後京極攝政

佛にはつひに成べき身にしあれば法の花をも我聞ときして　慈鎮和尚

西國三十三所　觀音靈場記圖會二

○七番　大和國高市郡岡寺

人皇三十五代舒明天皇の宮都岡本の宮なり依て岡本寺といふなり御本尊は一尺二寸六臂の小像なり其後弘法大師三國靈場の土をもつて丈六の大像を作り御胸に御本尊を納給ふ歌に

ゆきゝの岡とよみし處なるが故に岡寺と號せしなり人皇三十九代天智天皇の御宇此岡山に毒蛇すみて人を見れば鏡のごとき兩眼を開きほのふのごとくなる舌を卷立毒氣を吹かけ煙の如くなる息人の身にあたれば卽死す故に其邊荒野と成しなり是を田地となしなば何十万石ともなるべき物なればこれ末代までのたからなり何卒この毒蛇を退治せよと帝より命せらる然るに甲冑具足を帶したりともかの毒氣けふりの如きにあたれば武士の力に及ばずといへり其頃南都興福寺に義淵大僧正とて尊き僧正あり帝へ召され法力にて退治すべしとの仰有ればかしこまり奉り勅命を頭に戴き法力をもつて退治せん事いと易しと御請し奉りければ佛力といひ僧正の行法のつもる所かたゝく以て頼みあり用意の品何ぞと仰ればし

別に用意を致義にわらず此水晶珠數一連が用意にて候とて僧正は岩本山の岩窟さして行給ふ毒蛇は僧正を呑んと毒氣を吹こと大風のごとくなり大僧正すこしも恐れたまはず我勅命を蒙しと云ひ年來行法の心をこめし此珠數こそ佛法の利劍なり只今汝を退治するものなりとて祕文をとなへかの珠數にて大蛇をうち給へば不思議や大蛇の身體ちゝまり動事あたはず元より僧正大力にておはせしかば毒蛇の角をもつて一二しその所に池あるを幸と池の中へ大蛇を投こみ五十六億七千萬歳りうげさん會の曉まで出る事あるべからずと石に阿字の梵字をかきて大蛇を投込し跡を石にて蓋をして踏すへ給ふにより末代までかくの如き毒蛇出ざるやうと彌勒ぼさつを本尊として此處に寺をたてゝ龍の伏たる所に蓋するがゆゑ龍蓋寺とは名付しなり又觀世音の御事は夫より後ち弘法大師入唐ありしとき臺灣國といふ所にて頃は八月上旬にはかに風吹來り波すさまじく打立〳〵船は波にもまれて虚空に上るが如く又は水底に入がごとく迚も助りがたければ船頭申けるは此御船もはや術已に盡たり覺悟し給へといふ空海これを聞しめして三世三千の如來へ祈誓をかけ此船何ごとなく通し給へわれ全く命をしむにあらず入唐して佛法を聞得て日本へ歸る法を弘め末代までも法を殘さんと願ふがゆゑ命を助け神佛の力を合たび給へと眞言陀羅尼を唱へ給ふに不思議

や南に紫の雲出て矢を射が如に雲來て船の帆ばしらの上にたな引空海おそるゝ事なかれ殊勝なる空海が心ざし不便と思ふが故に此船を守り遣すなりと聞ゐしかば空海ありがたき事かぎりなく何とぞ御慈悲の御すがたを拜せ給へ御像を末世までものこし置申たしと願給へば雲かくれより我は如意輪觀世音なり此船をまもる事二十八部衆のけんぞく水底に入て船をとりまきぎるが故に怪我なしとのたまふ御すがたを空海は船板をもつて爪形にて御像を寫し取たまふよつて爪がたの觀音は讃岐國八島にをさめ有又其時の御すがたを三國靈場の土をもつて作り給ふ大像岡寺の本尊これなり故に船に乘人は信仰して御影を首にかけ居れば風波の難をまぬがる都て觀世音を信ずる輩は海川に入てもあさき處へつかはされ命をたすけ給ふ事御經普門品にのせ給ふ處なり

行來の岡の古歌

明日香川ゆきゝの岡の秋はぎはけふ降雨にさかり過けん

○又ふるき書物にも長門の國青野といふ處に身體よき大百姓の娘あり姉は十八歳妹は十三歳なるが姉はたしかなる連あつて西國順禮いたさせんと其こしらへするをいもうとうら山しく親にかくとも得いはず内證にて笈ずるをこしらへ何かと用意してのち親にかくといへばいやゝ其方が年にては早し姉はやがて嫁入もする事なれば順禮をもいたさせ京の内裏さまをも拜まさずしては罪所らずとて緣ゐそし其方は四五年もはやし其うへ百里の餘もある道中なれば子供づれは同行の衆もなんぎなりとて兩親合點せず姉はこしらへも出來たりとて旅だちいたさせはるゝ〻ゐくり出るを見て妹はいよ〻うら山しくたゑかねてこしらへ置しふひるをおひ西國の札を首にかけ此裏より抜出て山越にめぐり船の乘場にて追つかんと走り行しかども姉は本道いもうとはまはり道ゆゑ四五里もおくれ船に乘おくれもはや其ふねは出たりとて影もかたちも見ゐず折ふし次の出船をたのみのり出ぬ其船夜に入てにはかに風雨つよく山のごとくなる大涙うちきたり上つおろしつすさまじく人々生たるこゝちなく終に岩にうち付られ船やぶれて一人ものこらず海のもくづと成にけり此むすめは一つに觀世音へ參詣したく姉のあと追ふと一心に助給へと念じ居たりしが首にかけたる順禮札ひろがりうけとなりたいよひながら水ものまず浮居たるに風はつよく雨はしきりにふり眞黑になりて何の處ともしれざるに只たう〻とすさまじき海中にむすめは一心不亂に南無大慈大悲のくわんせ音たすけ給へと念ずるより外の心なし其時大なみどつと打きたりて娘は岩

の上に打あげられけるが身にけがもなく東西もわからざれば只なき居たるに風雨眞くらなるゆゑ里ある事も見ねざりしが獵師ある浦里ありて濱あちけるゆゑ宵より伏居たるに濱によき仕合あり早く獵に出よといふ獵師目をさまし心にかもふ事夢に見るは宵より濱のあれるを思ふゆゑに見たる夢ならんと又寢入たるにしばらくありて何とて行ざるや早く行べしと起すこと狐たぬきのわざならんと又枕をとりぬんとするに大にいかる聲にて早く行ずんば此里にはおくまじといふ聲に驚きみのかさを身にまとひ一村の獵師ら誰ふれるともなきに松明ともし我も〳〵と網うちかたげ出けるが雨はいよいよつよく濱はどう〳〵とあれてとても獵のきくべき體にもあらずいかなるやと海上をながめゐたるにかすかに女のなく聲きこゆふしぎや此はげしきけしきことに今時分いかなる事にや何方なるらん先いたり尋べしと我も〳〵と吟味するに濱ぎはの岩上に十二三歳のむすめうしはにしたり居けるゆゑ其仔細をとへばかやう〳〵といふにさては觀世音の御たすけなりいたはしの事なりまづ〳〵里へつれかへり庄家のうちへ入れ衣るいを着かへさせさま〴〵と介抱しておひづるを見るに十里ばかりへだてたる處なれば則親もとへ村方より人を付ておくらせしに親元にてもむすめの行方知ざればかへ

せもどせの太鼓かねにてさわぎゐる處へつれ行ければ兩親はすがり付いかなる事とゝふに獵師はありしまゝをかたりむすめは海上のことどもゝのがたるに二親はいふに及ばず見きくほどのもの手を合せなみだをながさずといふ者なし是は全くその村里へ觀世音の御つげありしはおの〳〵さまこそ則觀世音ならんと悦びけるさて獵師ども歸らんといふに先々しばらく留りくれといへ共村方に返事をまちゐればとゞまりがたしといふさらばとて金子五拾兩これはいさゝかなる御禮なりとも各々がたへ進じ申なりとさし出せば獵師ども大に驚き中々以てさやうの禮を受べき事にあらずと取あげざれども是非〳〵といひて止されば辭しがたくて然らば持歸り村方へ披露致べしこれも觀音の御めぐみなりとて受歸りけるむすめの親は御禮參りとてよく年妹をつれて西國順禮に出たりしとなり

御詠歌

けさ見ればつゆ岡寺のにはの苔
さながら瑠璃のひかり成ける

朝見ればとはぼんのふの夢さめてまよひのうき世の夢と見て世のありさまをさとりける佛

この御心になればにくきかわゆききたなきはしいをしいの事なくたとへば朝日のさせるときの心のごとく何の苦もなきさつばりとしたる本來無一物の佛の悟を開給ふ處の如くなり露岡寺の庭のこけさながら瑠璃の光なりとはさとりて見れば露苔草木牛馬の類までもむさき物にあらず何もかも瑠璃のひかりとみゆると解たまふ歌なり

○開山義淵僧正は化身の人なり和州高市郡の人その父子なきをかなしんで觀世音に祈けるある夜小兒のなく聲門外にきこゆ出てみれば柴がきの上に何やらん錦のつゝみ一つありたへなる香ひかんばしくひらき見れば内に小兒あり夫婦よろこんでこれすなはち觀世音よりたまはるところの子なりとてやしなふにはどなく成長せり此こと天智天皇きこしめされ皇子とおなじく岡本の宮に養育し給ふのち出家して智鳳にしたがひ入唐して智圓にしたがひ法相の奥義を極る龍藍寺龍門寺新福寺みなゝ義淵の建立なり

○八番　大和國城上郡長谷寺

元正天皇の御宇なりむかし近江の國大洪水の事あり何國より流れ來りけん楠木の長さ六間ばかりにめぐり三かゝへほどある結構なる材木大津の浦に來る濱邊の者ども是を見て我先に舟を出し取らんとするに此木にさはるもののさまゝの怪我をなすさるが故におそれて寄付ものなし風にしたがひ堅田竹生島の方へ行き又も大津浦へもどりける或ときは思ひ此材木より光明出て海をてらしければ人々いよゝふしぎにおもひ猶々おそれ近よる者ししかるに堅田大津の鯉鮒光明におそれて水底に沈み浮上らず獵師ども甚だ難儀しけるとなり風にたいよひ如此にて凡七十年ありしかるに大和の國八木の里に小井門子といふ女あり二親にも夫にもはなれかなしみにあふ金銀は多あれ其女の身なれば何ともすべきやうなくさきだち給ふ親夫のぼだいの爲末世にのこる程の結構なる佛を建立し一寺を立尾となり後世のぼだいを願ふべしと思しに人々のいへるを聞ば大津の浦に靈木あるよし是をもらひ佛を彫し奉べしと大和より地車を人歩にもたせ大津にいたり水海にある楠木を所望し費は何程にても出すべし御佛に作り度望ありといへば夫は此方よりも御禮申なり數年此里に持餘したる材木なれば何方へなりとも持行給へかしさりながらこの木にさはるものゝ怪我をなさゞるものなく其たゝりを恐れて近よる者なきがゆゑ此浦に數年うち捨たるなりいかゞして持かへらせ給ふぞ門子こたへて御尤の御事に候へども定て雜木となさんとおもふが故ならん我は靈木と聞て御佛を造り度なりさすれば祟り給ふこと有まじ見れば今は

矢走の方に有つれば門子御迎に參るべしとて船用意をいたし合掌し南無觀世音ぼさつわれにこの靈木を得させ給へ末世に殘し敬ひたてまつらんと大和の國より御むかひに參たり御心に叶ひなば御祟なく安々と上らせ給へと一心に念じければ不思議や風もなきに矢走の方より大津をさしてはしるがごとく材木は眞一文字によせきたるこれを見るもの大におどろき尊みかくのごとくならばなどか祟給ふべきと人々たちより繩を付大和の八木へかるゝと引行ける夫より哀れむべきは小井門子は三月をへて死たりける其後は又誰あつて心ざしをつくものもなく其まゝにうち捨ありて小兒にてもさわれば祟あるゆゑ垣を結まはししめを張り置たれば世の人うるさき材木を持來りし事として持餘しねけること三十四年の間なりしかるに其頃大洪水の事ありてかの楠木ながれ出て長谷川にながれこむ人々見てよき大木のながれ來るぞ引上よとたちよる程のもの祟りありければこゝにても又垣ゆひまはしてたれもさはるものなかりしが此處にても三十九年にいたり其頃しも德道上人とて尊き僧諸國をめぐり此處に來り給ふ折ふし此處の老人に此木の故を尋給ふに答ていかにも神木にて候はんと大津の浦よりの長物がたりをくはしくかたり甚祟多き靈木なるよしをいふ德道上人聞しめし有がたき御事かなしかれば此靈木をもらひたしとあればいかやうともしたまふ

べし去ながら御田家の事なれば祟りはあるまじきが凡人はあらふそろしや祟り候ぞやと
て近よるべき人もなし上人は繩どりよせて材木をくゝり付給へば所の者どもはいかさま祟
もあらん見物せんとたち集るに德道上人と申は六十餘の老人なりしが只一人にて繩を持て
楠にむかひ手を合て一佛成道くわん念はうかい草木國土悉皆成佛とのたまひて今の初瀬
山へ引上給ふにかるゝと彼楠は上りけるそれより上人日々この材木をおがみ奉りて
我力とぼしければ佛體に作り奉る事あたはず何卒方便をもつて早く佛とならせ給へと念
する事三年にあまれりその頃聖武天皇の御代なりしが房崎大臣初瀬の川邊へ御なぐさみに
出させ給ふに楠のにはひしてあるを御覽じて老僧のこの木にむかひ手を合せ居らるゝを
いかなる事哉と聞まはしくと仰あれば此木を拜することは靈木なるがゆゑにて大津以來の
とどもくはしき御物がたりあり我この木をもつて佛をつくり奉り度候へども力なく候
と涙をながし三年に及候へどもかくのごとく候と申上ければ房崎の大臣は靈木なる事
をきゝ當御帝は御信心あつく南都大佛殿廚舍那佛御こんりふおりし事なれば此義奏聞なし
佛師に仰付られあらん事もと都へ歸り此おもむきを帝へ奏聞ありければその初瀬山に於て
本堂建立あるべしとの勅命にて大和一國の小民にいたるまで人夫を仰付られて諸堂成就す

本尊觀世音はそのころ天下の佛師に賢問子げしてくといふ親子の名人あり平安城醍醐寺の本尊も同作なり兩人して觀世音を作り奉るに不思議なるかな山名の翁遠方より見けるに賢門子は觀世音けしてくは地藏尊とおがまれける難有やと近く寄て見れは常の人なりそれより人々見るに其通りなりようて親子の佛子なるものは觀音地藏の化身なりといひ傳へり出來させ給ふ觀世音ほさつは御長二丈六尺の御本尊なれば臺座はいかゞしたるものやらんと案じ居にある夜の夜半過より明まで此山へ黑雲まひ下り滔々と震動する事すさまじく近國までも聞へけるが里人おどろき何事の出來つらんとおそろしき事かぎりなし夜明て見れば不思議や八尺四方の上一面に切立しごとき石に觀世音の御足をふませ給ふ窪き所あり此石の根堀て見れども底しれず誠にありがたき靈佛なれば諸天善神地神の御力にて御臺座の石出る事觀音の御ちかひ末世萬劫まで此處うごき給はずして五十六億七千萬歳衆生を濟度なさしめんとの御事金剛寶石自然と涌出の石臺にいます眞にありがたき御本尊なり願人は德道上人建立は聖武天皇御心入は房崎大臣開眼は行基菩薩佛師は賢問子父子是程までも能く拙ひ給ふ御本尊なれば利生はなどかなからんや

○法道仙道道明これみな同人なり名を異にするのみといへり長谷寺の開山法道上人は播磨國揖保郡の人なり俗姓は辛矢田部米麿とそ是法華菩薩の應化第三仙人の再來なり母は敢子夢に明星口に入と見てはらめり十六ケ月を經て生る是齊明天皇即位二年丙辰九月十八日なり德道十一歳にして母におくるゝこれによつて忽生者必滅の理をさとり剃髮染衣となり其孝養の心ざし四海にあふぎつひに入唐して佛法奥義をきはめて歸朝の後此山にきたり給ふ天武天皇即位四年なり修法驗者行德兼備世に双なし神龜三年十二月に大僧都に任給ふとかや

○長谷寺をまた豐山といふ二ッの名あり一つには泊瀬寺といふむかし泊瀬の河上に瀧藏權現の社の道に天人の造たる多門天の像ありしを雷のおちて彼像を取のぼりし時其御手の寶珠おちて此山の麓三神の河の瀬に留まりしを武内宿禰といへる人ありて自ら取上て西北の角に納しより舊名をあらためて泊瀬の豐山といへり其後三百年をすぎて弘福寺の道明上人これを石室にうつし給へりしより里の名になぞらへて泊瀬寺といへり院號を神樂院といふ豐山といへる古き歌に

泊瀬山いはらに月はかたふきて豐山寺の鐘そふけゆく

雲かゝる梢いろづく初瀬山しぐれや秋のにしきなるらん

初瀬寺未來鐘の因緣

長谷の釣がねを未來鐘と名付世にまた因緣鐘といふ鐘四つあり尾上鐘小夜中山無間のかね南都十三かね長谷の未來がねなり人皇六十六代三條院の御宇山城の國木津といふところに彌惣治といふものもと歴々の武士なりしかども浪人となり尾羽うちからし近村の子供をあつめ手習を教て細き煙を立けるがいにしへは餘程の知行とる身にて武道一通り弓馬兵術あつばれなる侍なれども前生の因緣つたなきにや見るかげもなき身廻なりけり或とき思ふやう口をしき我身や今は町人百姓にあなどられかくまで勞して生耻をさらさんよりはと度度刀を腹におし當んと思ひしがいや死は安し生はかたし又もいかなる幸ひありて思はぬ武家のあり付も出來なば家名をあらはすべき時節も有まじきにもあらずと思ひ止り居に或人の云に出世をのぞまば和州長谷寺の觀音へねがひ給へ御利生あらたなればいかなる願にても叶はずといふ事なしとすゝめければ何を俗民の淺はかなる事をと一度はうち消たれども若や觀世音の人をもつていはさしめ玉ふ事もやと不圖心付さらば參詣して百日の間參籠すべしとて長谷寺へ參り武士のかたき正直心にて一心不亂に普門品をとなへて願奉りなばやはか何事たりとも叶はずといふことのしるしも有べしと思ひ込て信心ふかく祈誓をかけ奉り寺中の出家たち御堂に集りつどめ終て歸りがけに釣がねのもとに立どまり歌にもよみしほどの鐘なるにひゝきの入て鳴音わろし鑄直すことの大そうなる事誰あつて寄附するものなしといふを彼男きゝて我等願望かなひなば此鐘を寄進せんと思ひしが又或時寺中坊主一人かの鐘のまへにたちて涙ぬらるゝゆゑ浪人衣の袖を引て我は願望あつて觀世音に籠居候がかねの音悪きよし皆々仰あり何とぞ我等がねがひ叶なば鐘を鑄かへ寄進いたすべしといふに其體を見るに見るかげもなくおとろへはてし體なりそれは奇特なる事とあいさつすれど心のうちには氣のちがひしものにやあらん此かねかれら如きの寄進は思ひもよらぬ事と思ひあるとき寺僧たち集り居ける中にて此事を咄し笑けるに若僧たちの事なればそれは此世にての事にては有まじ死て生かはりて未來の事にてあるべしといふ夫より其浪人を未來と異名付て坊主ども笑けるゆゑ彼浪人合點ゆかず何ゆゑ我を未來と名付たるぞと不審はれず掃除する法師どもに是を問ふに坊主ども有のまゝに仔細をかたる夫より浪人はいよ〳〵觀世音に祈りさて貧窮は何成罪科あつてかはどまでに人にあなどられ口惜事にはあらずやと齒がみをなせしが去ながら此事聞しとて腹切死するものならば失見ていよ〳〵未來の事にてありしぞといはれんも猶更口をしとひたすら觀世音にねがひける九十九夜めの

御告に願ふ事さても不便と思ふがゆゑ叶へ遣すなり明日は在原寺の邊りへ行て待べし近江國の大名の通るべし是汝が前生より緣あるものなり此人の目に留りもせば知行に有つくべしとの御告あり目覺てさては今のは夢にてありしか正々しき御告なりをしへのごとく在原寺へ行かばやと坂をくだり坊中を見て追付鐘の寄進して見せんものをといさみ進んで在原寺に行て見れば御告のごとく大名の畫の御休と見なして幕うちまはして供人おびたゞしく集りゐる中を何卒殿に對面せばやとあちらこちらと伺ひまはれば侍どもうさんに思ひ叱りのくるに更にうろんなる者にては候はず少し用事あるものに候といひつゝ幕のうちに入らんとすいよ〳〵無禮なる者なりそれ捕へよと下部ども大勢たちかゝればがたちこそ見苦けれど其方どもの縄目をうくる者にあらずさはいへ多勢の事なれば一當あて參らせんと多勢の下部どもをことゝもせず取て投ること秋の木の葉の散ごとく家中の侍ども是を見かねて夫狼籍ものよのがすまじと早縄を持て手々に立かゝれば側なる大木の松をこだてにとり卒爾あるなかたゝ〳〵狼籍ものにあらず元よりうろんがましき者にてもなく下部のものゝ聞分なく我をとらへんと多勢なるがゆゑ是非なくかくの仕合なり我望あつて殿に見參せんと思ふのみなり御侍の衆中たりとも無體のはたらきあらば是非に及ばずわれ好まずといへども御相手になり申べしと彼是問答のさわがしきに殿このよしを聞給ひ物かげより見給ふに衣體はことに見苦しけれども其骨柄あつぱれに見なければいかさま仔細の有べしと面前に召出せとありしかば彼浪人はこれをきゝて難有御請なしいさゝか憶するけしきなく殿の御前に立出るに殿その仔細をたづね給ふに彼浪人長谷寺に心願をこめ百日の參籠せしに觀世音の事もとより浪人となりし次第などつぶさに言上なすに殿にも觀世音の靈告を尊び給ふが上に先刻よりの起居動靜天晴末たのもしく思召けるにや即座に召かゝへ給ふよし宣ひ主從の御盃を下され時服等下し給はり直に本國に連られける彌惣治はこれ偏に長谷の觀音の御惠みと心のうちに千手陀羅尼と普門品をとなへさる間はなかりけり初のはどは近習に仰付られしが心正直にして奉公に私なく夫より段々と出世して、知行等增下され何角につけ殿の御氣に入て相つとめ粟本祐貞と名を改めけるが其頃近江の代官私慾の事ありとて百姓の願ひによつて代官がはりにつき殿の御目がねをもつて後役を粟本へ仰付られける有がたくぞんじ今ははや十分に過たる身となりたりと思ひますゝ觀世音の御慈悲わするゝ事なくおごりを慎み身を謙り下をあはれみて百姓をそだつる事大方ならず麁衣麁食をいとはず儉約を專らとする事餘の義ならず初瀬寺の鐘舉加せんと思ふが故なり　抑代官といへる

は一郡をあづかる事なれば日夜に領民を撫育なし慈悲哀憐をはどこしけるより國中暫くの間に豊かになりて百姓どもおのづから國君のごとく敬ひけるかゝて三年もたちければ栗本一も餘はどの貯へも出來ければ殿へ願ひを立けるは私義已前も申上るごとく極貧窮の折から觀世音に無體の心願を込たるに如此大悲の御すくひに預り今かくの身となりし事殿の御陰とは申ながら則觀世音の御利生によつてなり何卒一度御禮をも申上たく且は觀世音に御約束申上たる釣鐘を御寄進仕度間しばしの御いとまを下されたくと願ひを上近江の國を立て初瀬寺へ參り觀世音に厚く御禮申上寺中へいたり釣鐘再興の事を申入らる依て寺中不殘集て近江國より大檀那參詣にてつりがね再建望なるよし披露して既に其支度にかゝり大和國の鑄物師をねらひ終に鐘を鑄立たり其入用おびたいしくことに近郷近在より拜殿櫛の齒を引がごとしさて鐘樓をも修覆なし三月十八日鐘つき初と定めたりよつて寺僧どもより高札をたつるに御名前いかゞ仕るべきやとうかゝふに祐貞さらばとて筆とり斯の如くしたゝめとどさし出す

寛仁三年三月十八日、、

施主　山城國木津里　　未來男

としるしたり坊中大に不審なしこれはいかなる事にやと尋るに祐貞がいはく各にも覺ねらるべし私浪人なりしほどは木津の里に住て百ケ日が間參詣し其ときの釣鐘の施主たらん事を申せしに私身の見苦きをもつてとても此世にてはなすべき事にあらずとてみなくうちわらひ未來男と異名を付られし者なりしかれどもかやう申せば各がたを恨申やうなれども全く左にあらず未來男と人々におなどられしほどの貧窮人にてありしも觀音の御慈悲にて現在にて鐘鑄せし事を末世までもしらしめんためなりとかたるに山僧ども大に感き先非を悔みて則望のごとく書付たりとぞ

年も經ぬ祈るちぎりは初瀬山尾上の鐘のみねの夕くれ

はつせ山ひはらのあらし鐘の聲夜ふかき月をすましてぞ聞

初瀬山あらしの道の遠ければいたりいたらぬ鐘の聲かな

爰に人皇六十八代後一條院の御宇に南都春日の社人に信清といふものあり其者の子に信親といふもの蛇眼病といふ異病をうくる此病は首筋ばんのくぼの邊にすさまじき袋に物を入たるごとくに腫れ首まはらず大にいたみ晝夜うつむき居其はれたる内に蛇の居るといふ病にて醫師の藥力にも及ばずせん方なき救父信清春日明神へ祈禱なし奉るに其夜半の頃明

神の御告あり初瀬寺へ參り觀音を祈るべしと有しかば夜の明るを待て長谷寺へ參り觀世音へ一七日こもりて我子の難病を念り奉るに七日に滿るあかつき烏一羽飛來り羽たゝきして立て行目さめてこれ御告なりとて有がたく思ひいそぎ我家に歸りいかゝと尋るに信親がいはく今朝明方にわれいたみに堪かねて俯伏いたるに烏一羽きたりて膿物をつゝき破るに其心よき事たとふるにものなしうひにてとゞくゝ破りて何やらん引出して去らんとするを見るに小き蛇をくはへ其まゝ飛去ると見しがこれ一夢にて膿物やぶれ濺血出るとおぼたゝしくして毒水これがために出盡し心よく悅おへる處なりこれ全く觀世音の御利生二つには父上の御慈悲のかげにて快氣いたせしと申に信滿も信心肝にめいじて有がたくすぐに長谷寺へ參詣して御禮申上いかなる御事なりとも觀音の御心に叶玉ふ品を寄進申たくわが子の一命にかへる寶なしとて又一七日の間參籠いたしけるが觀世音また告玉ふには石壇のうへに廊下をこしらへ參詣のものゝ風雨をしのがせよ年老たるもの杖笠にて石だんを登る事いと不便なりとのたまふ信滿なほ〳〵涙を流しさて〳〵觀世音の大慈大悲の御意かくまで諸人をあはれみ玉ふ御告のありがたさよと帝へ此事奏聞申上廊下を建立なしたりける神佛同一體なるが故に佛をとりやくにいたさせ問敷とて春日明神より壯人の信滿へ觀世音の利益あることを告させたまふ處を

御詠歌

いく度もまゐるこゝろはつせ寺
山もちかひもふかき谷川

此御詠歌のこゝろは見林院ようかく僧正の御歌に

問たびにめづらしければはゝとぎすいつも初音の心地こそすれ

とよめる歌と同じ心なり郭公の聲はきく度ごとにめづらしくおもふこの長谷寺もいくたびまゐりても不思議にいつにても初めて參りし心地して又もまゐり度おもふは則觀世音の御慈悲のふかきがゆゑなりもとより此御山へ一度にてもあゆみをはこび參り我をたのむものならば現世未來をまもり臨終におもむくときは觀世音來迎ありて眞の蓮臺に座せしめんとの誓ひなり大慈大悲の御心は長谷の山よりも高く御ちかひも流出る谷川よりも深きことなり

○爰に今はむかし都によしある者のむすめ二親一家一門けんぞくことぐく死たる身なし子となり女は身過は中々いたしがたく長谷の觀世音は利生ふかくましますと聞き大

和にくだり初瀬寺へ參籠して願ひるは我は兩親はじめ親類にいたる迄も死はなれみなし子となり何れを力とすべき人もなき身に候へば何とぞ觀世音の御利益をかうふり此身一生人にいやしめられずはづかしからぬ身となし玉るべしもし此ねがひ叶はせ玉はずんば命をめされ玉るべしと女心の一すじに一七日の間こもりしに七日めのあけがたに御堂のうちより老僧一人出たまひ汝孤となりてたよりとすべき方なきをかなしみ爰に歩行をはこび我をたのむ事の不便なりよつてこの小袖をあたふるなりこれを着て在原寺にまゐるべしよき縁をもとむべしと宣ふと見て夢さめけるにふしぎや小袖一重枕にのこれりさては大悲の御つげなりと在原寺をたづねいたりしに大勢をめし連られし武士馬上にて通り玉ふあり此女は道のかたへにたちやすらひ居たりしにかの武士馬をとゞめ近習につげて此女をめし玉ふに女はいぶかしながら馬前にかしこまる馬上の侍つら〳〵見てこれはどまでに似たるもふしぎなり其方はいかなるものぞつゝますまうすべしと尋らるゝに女はみなしごのよしを答るにかの侍いへるはわれに妻ありしが不幸にして死たるがいかなる事にや年恰好顔だちまで其方に似たるがゆゑ何となくなつかしく思ふ處なりくるしからざる身とならば我とともに國に來らんやとあるに女はこれ

れやく大悲の御導びきなりとて御請を申しすゞにともなはれて行に此士は美濃の國なる何某にて屋舗もことに廣く家來多くありしが終に此武士の奥方となりにけり其ころは京都へ諸國より禁裡守護のため三年づゝ都へつめける事なりしが此主人も其任にあたり玉ふがゆゑ女をも連行ん用意せよとありて定て都には親ぞくなど有べしとはれてさればたよるべき方なしとはさすがにいひかねけんいかにも伯母一人ありといふにさらばそれへも土産をつかはすべしとて綾錦其外いろ〳〵用意して旅立玉ふ程なく都も近づきけるが女は伯母ありといひし事いかゞせんとおもひしが主にむかひ自らは少し先へまゐりてよく案内をいたし殿へ御しらせ申さんとてわざと人を少なに供人をへらし先へ行けるがやがて京にいたり三條通りを西へさして心がくるに東洞院の邊に表の高塀をかけいやしからざる家居あれば こゝぞと思ひ下女に言付此うちにはいかなる人の住たまふときかせしにこれは上京邊に住玉ふ御方なれどひとりのむすめにはなれさせ玉ひ只今は此所へ來りて尼となり心すまして住玉ふよしといふ心のうちにこれさいはひとうれしくそれへ參り御目にかゝり申べしといひ入ければあるじいぶかしながら請じ入るゝに花のばうしにてあるじの尼公は出られしを伯母ぎみ入し〳〵御目にか

ゝちさりしといふに慢ゐなき事なればうろ〳〵と見ゐければ久しく御目にかゝらぬのみか便もいたさねば御見わすれは御尤ひそかに申上ぬば御覺ゐなさるまじとて召つれしものどもを用事あらばよぶべしとわざと退かせて申けるは扨わらはゝ元都のものに候へども兩親にはなれてよりしんぞくと申物もなし今は美濃の國へ參り何某といふものゝ妻となりしが此度主ば禁裡守護の御番にて登り給ふにわらはも一所に御つれありしたしきものはなきやと有により伯母ひとり殘りゐるよしを申せしかど當もなくて難義におよびたゝ今これへ參る道にて御家がらを見かけおして伯母君とは申せしなりわれ御なさけにおばと御名のり下さらば生々世々の御恩わすれはせじと餘儀なくたのまれければあるじの尼公はおもひもよらぬ事なれどもかの女のよぎなく思ひ入たる體いやしからざる人がらいと笑止なる事におもひ左もあらばいかにも伯母になりまゐらすべしといふ女大に悅び則わが夫に新とあんないすればやがて夫も入來りふしぎなる緣にてむかへとりし次第をかたりおびたゝしき土産ものを送り妻には久しぶりにて伯母公に對面の事なればゆる〳〵といたすべしとて出行ぬ女はあとに殘りわが生たちより長谷寺にて示現ありし事などものがたるにあるじの尼公はふしぎなし其參籠あ

りしはいつ頃にて小袖のもやうはかやう〳〵にて候はずやと〻ふに女も大におどろきいかゞしてさはどくはしく知り玉ふや尼公のいはくその小袖こそ我小袖なれわれ其頃一人むすめをうしなひ便りとすべき方なければ何卒老てのたよりとなるべきむすめをもはしくて長谷寺へわれも七日こもりあくれば滿願といふ夜に着たる上着をぬぎてかたへに置けるが夜明て見ればなしさては大勢の通夜ありし事ゆゑ取ちがへたる人のあるにやこれすなはちわが願望の叶ざるしるしにやと人にも語らで立歸り髪をおろし其のちは後生をねがふのみにて有けるが今おもへば御身をば姪となすべき因縁も大悲の深きめぐみならんかゝるふしぎのあるうへは眞の姪ともむすめとも思ふなりとありければ女も更によろこびつゝ其小袖こそ觀音のさづけ玉ひしものなれば片ときはなさずもちたるなりと荷物のうちより取いだせば尼公は一目見るよりこれなり〳〵とおしいたゞきいよ〳〵信心肝に銘じこれよりは眞の伯母姪となりいともむつまじかりけるがすでに三年の役はて〻歸國の折から年よつてひとり住玉はんはたよりなくや思しけんとて則美濃にともなひ一生を安樂にくらしけるとなり

吉歌に

はつ瀬川わたる瀬さへも濁らなん世に住がたき我身と思へば

ちぎりきなまたもわすれそ初瀬河ふる川のへのふたもとの杉

はつせ山峯のひはらも理もれて雪の下なる入相のかね

長谷寺觀世音は唐土までも聞たる事は飄にも出たる通りなり百濟國の帝の御時御后十八歳なり世にたぐひなき美人なりしが御髮いつとなく老女のごとくならせ玉ひければ御かなしみは申も中〳〵愚なり帝にもいたましく思めしさま〴〵と治療祈禱のとる方なけれどもそのしるしなく然るに后の思召には日の本の長谷寺觀世音は靈驗あらたにましますと聞つたへたり程は遠く國はかはるといへどもしんぐの眞あらばなどか御利生なからん願かけばやと思しめし日の本の方へむかはせ玉ひ一七日のあひだ祈り玉ふに觀世音唐土にいたり玉へるが后の夢中に告玉ふは汝が業病治しがたしといへども海山をへだてたる我を念する事の不便におもふがゆゑに是まで來りて其治を得せしむる所なりとて瑠璃の壺に水を入柳の枝にて其水をしたして后の頭上に三度そゝぎ玉ひもはや難病治したりと宣ふと見て后の夢は覺にけり后はおどろき早速鏡を取よせて御らんあるにいまゝで老女のごとく見えたるが元のごとく黑々しくしかもつや〳〵として見えければ后の御悦び大方ならずありがたや

これ日の本初瀬寺の本尊の御じひなりと御感悦のあまり名僧たちを召して初瀬寺の本尊の御姿を尋させ玉ふ御長二丈六尺十一面觀音のよし申上げれば后また佛師に命じ給ひ觀世音をかたいごとく彫刻なさしめ帝に奏して彼地に一寺をもうけ本堂伽藍を造立させかの初瀬寺の御本尊の新彫を安置し給ひ則初瀬觀世音とて御生涯御崇敬ましまし〳〵ける今に唐土に殘りて諸人渴仰なす處なりかゝる山川萬里をへだてたる外國すらかゝのごとしいはんや日本の國中に於をやたとへいづくの浦にかざらず又初瀬山にもかざらず信心いつはりならずんば誠佛其冥助あらざるはなしかならずしもゆるかせに思ふべからずとなり

○九番●南都興福寺南圓堂

抑南圓堂の觀世音は大織冠鎌足公の御苗裔長岡の右大臣藤原の高藤公弘法大師に御たづねありしは子孫はんじやうは先祖のなす所なればいかゞなして子孫はんじやうなすべきやと尋たまふに大師のたまはく不空羂索經に三日八臂の觀音を信じ奉れば子孫繁榮うたがひなしとあり三日八臂とはいかなる御像に候哉刻て見せ給へとありければ弘法大師たちまちに造り給ひ斯のごとくの御像にて候と御目三つ御手八本の觀世音を見せさせ給ふ所の御

尊像これなり則是を御本尊として御堂建立ありければ大師御開眼あり程なく高藤公薨じさせ給ひ御子開院左大臣藤原多嗣公本堂建立ありしに則南圓堂の地を極樂院となされ白銀をもつて觀世音を千體造り地の底に埋て地形をつき給ふ處なり然るに普請はじまるに及び日雇人足の中に七十歳ばかりの老人あり土を運ぶ事五人前にも增れり外の日雇ども歸れども後にのこりて掃除までしてかへる扨も年よりの身として達者なる事わかき者に越たる働きかなと人々の目に留りけるが本堂出來上りて左大臣御歡びあり大願成就の觀音堂八角形にして建給ひし御祝儀御褒美を大工日雇に下さるゝ何れも組々のさげ札あるに彼老人のみ下札なしされども人々の目に數日の働き留りあれば老人にも御はうび下さるゝなり有がたく思ふべしと有れば私は金銀のために働しにあらず身にかゝれる普請なればはたらき申せしなり皆々は此者は慮外なる事を申ものかな何者なるぞとのゝしりければ其とき老人すつ〳〵と立て我は是藤原の元祖春日明神なるが子孫繁昌のため觀音堂を建ゝがうれし〳〵和光同塵の光りをかゝしかゝるすがたとあらはれ働きしなり大慈大悲の光りは則わが守護する處なりとて

ふたら〳〵や南のきしに堂たてゝ今にさかゆを北の藤なみ

と一首の御歌をのこし給ひてかき消やうに失給ふ北のふぢ涙とは淡海公の御子四人あり南家北家式家京家と四人の公達あつて何れも藤氏にて今の世までも御子孫はんじやうありひとへにこの観世音の御利生なる事うたがひなし一度南圓堂へ参り順禮の札を納むるともがちは現世にては子孫はんじやう未來極樂往生すべき事三世の御めぐみ春日明神御同一體の観世音にましませしなり

○爰に南都の垂井といふ處に井筒屋何某といふ者あり一人のむすめを持てり容は十人なみにうまれ付たれども目の上にすこしのはつれありて見ぐるしくしかるに此むすめ十四五歳の頃よりいかなるゆゑともしらず毎日南圓堂に参る事おこたらず風雨雪霜もいとはずまゐりけるはじめの間は母も夫ともしらず今朝はむすめいづかたへ出けるやとたづねければ観世音へ参るとのみ言しまゝに後々は毎日の事なれば兩親もとがめもせずしかるに半年ばかり立彼むすめが目のうへのはつれいつの間にやら失ていにたり父母大におどろきいかゞして治したるぞとふにむすめのいへるは南圓堂の観音さまへ此はつれ直し下されよと頼み毎日まゐりたるより外なしといふさらば大慈大悲のむすめがねがふ心を不便と思めしての事にやと有がたく感嘆のあまりいそぎおや子三人と

も南圓堂へまゐりて百燈をさゝげ拳りける此事大和一國へ聞ひしらぬ人はなかりける爰におかしき事あり奈良にて女のすこししたゝるきものを見て南圓堂ぢやといへりいかなる事といふに南圓堂の下をたる井と申ゆゑなりとかや

○又爰にも奈良の町に富家あり一子なきを大になげき夫婦ともこゝろを合て南圓堂の觀世音こそ子孫はんじやうのために建立ありしと聞なればいのり拳るべしとて念ずる事淺からざりしが程なくにんしんして玉のごとき女の子を生りこれ一心に觀音の御利生なりとよろこび居たりしが十歳ばかりの頃二親ともはやり病にて死たりければ眞のみなし子となり誰あつてそだつる者もなく日々に黄金もなくなり後々には道具にいたる迄賣て其日をおくり居たりしが程なく十七歳になりければ嫁に我等がかたへ參らずやといへるもあれども元富家に生れし事なればいやしき方へ緣付ことも先祖のはぢなりとおもひ受あはず我は觀世音のもふし子なるよし常に兩親のものがたりもあれば南圓堂の觀世音を念じたとひ一生やもめにて死するとも此身はいとはじと信じたてまつりける其頃おなじ奈良の町にいたつて有德なる方に男子一人をもてる者あり此者いつめ頃にやかの娘のところへ心ありげに通しが娘もよき緣もあれかしと思ひ願ふ折からなれば互に心の行合しにや此男夜ごとにかよひけるが富家のめし遣のものゝ内に實意のものあり是にかの女をむかへたしとおもへども親御たちの思召いかゞはからひがたしひそかに折あらばうかゞひくれよとたのみ置たもある夜通ひ行しに夜半の頃より雷雨おびたゞしくしてあけがた近くなるといへどもやまず中々歸るべきときなくせんかたなく五ツの頃に及ぬればむすめは朝めし男に參らせ度おもへどもかなしき事には食なく米もあらざればすべき手だてのなき折から一人の下女膳具をそろへ飯器をそへて今朝は心ざしの事ありて御招申べけれども御客の御座候やうす見うけ候ゆゑもたせ遣上申なりとてさしおけばむすめはうれしく此はした女に何がなと思へども何一ッとちすべき物なければ常にあて居たる前だれを取出してやるに下女よろこびてかたにかけて歸りぬむすめはその御膳を男にすゝめ共に食して居たりしが彼男のうちより親御の御留主なるぞ今御歸りあれと意しりたる男のさし圖にて籠をもたせむかひに來りければ男は歸りぬあとにてむすめは隣家へ禮に行んと思ふ折から右の下女膳部を取に來り持かへるさらば禮に行んと南の家へ行ば此方にてはなしとあり北どなりへ行ていへどもこれも覺なしといふふしぎに思ひ重ねて下女に逢たらば其時たづねて禮に行べ

しと思ひまづ〳〵今朝は南圓堂へ參詣すべしとまゐり拜したてまつるにけさ下女にあたへし前だれ觀音のかたにかけてましますにふとろきさては今朝下されたる飲食は觀世音より下されたるにや其上げがれたる前だれを御かたにかけさせ給ふ事あらもつたいなの御事やと涙を上てありがた涙にくれにける此事追々奈良の町々へきこゆければ男の兩親の耳に入さてもありがたや觀世音の助にあふほどのむすめといひ筋目たゝしき親の子なれば何に不足なきはづかしからぬむすめ我方へ引とりよめとなすべしとてむかへて夫婦となしにけりこれ子孫はんじやうのためとて建立ありし御本尊なれば利生のほどおしてしるべし

御詠歌　はるの日は南圓堂にかゝやきて　みかさの山にはるゝうすぐも

此はるの日といふ五文字の心は惡日常暗の闇よりあきらかなる庭へ出る心なりはるの日の南圓堂にかゝやき給ふなり觀世音の大悲春日明神の和光なれば一度まゐるものあらば暗よりはれたる晝に出たるごとき大悲の御めぐみにあふべきなり彌陀の本願にて罪あるも次第にはるゝ事を三かさの山にはるゝ薄雲となり三笠の山とは見る所の山にはあらず面々の胸のうちに三毒ぼんなふの三つの山あり貪欲しんいぐちの三毒より八萬四千のぼんなふが迷ひの雲となるこれ彌陀觀音の名號をとなへて念ずるならば本願の風にてはるゝ薄雲といふ心なり今人間に生たれば佛となるべき光りは有ながら月に村雲の有がごとくぼんなふの雲におはれて光をさまたぐるなり一日の間にも三どくぼんなふは多くおこれども本願の風を起す慈悲善根心の導き風の薄きを觀世音歎給ふて名號をとなゆるならば他力の風を持てつみとが有もふきはらひ極樂往生をなさしめんとなり

○第十番　山城國宇治郡三室戸寺

御本尊閻浮檀金御出現は上醍醐山のふもと炭山の岩淵といふ池より出させ給ふ爰に宗休と云人いへる僧至て正直なりける者あり常々觀音を信ずる事淺からず慈悲深くして生を殺さず飢たる人をみては己が食をも分あたふ其厚德にめでさせ給ふにや或夜の夢にすみやまのふもと岩淵より光明かゝやき玉ふと見て則其所に行て池の中より負出し拜る所の靈佛なり其地を觀音が淵となづけ又は宗休が淵ともいふ御本佛御長八寸二分なり御前立御長一尺二

寸なり抑此由來をくはしく語に此宗休といふは至て下司坊主にて民家にやとはれ働などしてもんまうなる者にていろはのいの字もしらぬうへ我名さへ人にとはれて忘れ居るほどの坊主なれども也〻律義正直なるが故人みな不便がりけるある人觀世音の有がたきを云聞せしかばこれ計はよく覺にわすれずたゞ一心におもひ込み觀音ならでは助るまじきと觀音の名號を絶ずとなへ奉りける無二の信仰を感じ給ふにやある夜の夢に一人の老僧きたりたまふて醍醐岩淵に正眞の觀世音ましますぞ急ぎ迎返に參るべしとの御告あり宗休正直なるゆゑすこしも疑ふ心なく有がたやと其まゝ夜の八つ時にたゞひとり岩淵へ心ざし道すがら名號をとなへさもくらき夜に恐ろしとも思はず出來り程なく岩淵にいたり星のかげにてすかし見れば池は滑々とすみわたり瀧の音はどう〳〵として物すごき事いふばかりなしさすれば只一心に觀世音をたづね參らせんと池のそばなる岩に腰うちかけて正眞の觀世音はいづくにまします宗休御むかひにまゐりたり御出現ましませと名號をとなへ居る處に池の底より光明かゞやくとして拜まれさせ給ふいよ〳〵名號を一心に唱へて立より見れども水滿々としていかんともすべきやうなしさては信ずる所のたらざるにや納受あらばこれへ上ちせ給へとて衣の袖をひろげ名號高らかに唱へて待居たるにふしぎや池の水二つに分れ手

観世音宗休が衣の袖に飛うつらせ給ふ宗休は心魂にてつし聲を上なき居しがかくては過じと御尊像をいだき奉り宇治へ歸りても只さめ〳〵となきぬたりしが宇治中へ此こと聞ゑ宗休が黄金佛の観世音をいのり出したりとて參詣のものおびだゝし〳〵奇異の思ひをなしける夫より京都丹波近江の國々よりも拜みたしとて參詣の人ます〳〵多く然るに三井寺智證大師の御弟子に隆明阿闍梨聞しめし及ばれ乘物に召されつゝあまたの弟子僧を召連て此觀世音へ御參詣あれば宗休なみだを流し此觀世音へ御參詣あれば宗休なみだを流し此觀世音のましませばこそ阿闍梨さまの御越被下たりと彌なみだをながし有がたがり何事に付ても觀世音の御かげなりとさめ〳〵となき居たり隆明も共になみだを流し給ひ是正眞の觀世音自然と涌出の御本尊なりとて宗休が脊中をなで〻かされたり乘物にのりて緋の衣を着たるよりもそなたの破衣がはるかに有がたし三井寺僧中僧正にいたる身あれどもかやうの事の有まじきぞ貴と申もおそれある御尊像にましますぞやしかるにいやしき藪家に安置し奉るも又恐すくなからず阿闍梨に給れよ帝へ奏して堂宇を建立して此隆明開基となり汝を觀音守護となすべしと仰ければ夫こそ願ふところなれ宗休ごとき身として何とて建立なし申べきといふ則阿闍梨は帝へ奏聞ありて建立す三室戸觀音これなり夫より代々の帝御尊敬あそばされ勅封となる石山寺と此三室戸兩觀音は三十三年目に御開帳なり御本佛の八寸二歩なるは勅封となりし故常に拜み奉るは一尺二寸の御前佛なり誠や賢愚によらずたい心正直ならんものには神佛の靈驗ふしぎにあるものなり

御詠歌

夜もすがら月をみむろどわけゆけば
うぢの川瀬にたつはしらなみ

此よもすがらといふ意は煩惱の闇にて胸の月の光見ゑず何卒ぼんなふの雲はれ極樂世界にいたりて月を見むろどなり月を見んと戸をひらき見れば宇治の川瀬にたつは白浪とはぼんなふのまよひの罪川瀬に白浪の立がごとくを何とぞ三十三所をめぐりて其罪をはらひ歌觀音の名號をとなへて此世にては子孫はんじやう病苦危難無失のなんどまぬがれ後生極樂淨土へ導給へと願なばなどか御利益のなからんや佛の御意に叶ひなば祈らずとても神も守り給ふべし

○又靈驗のあまたある中に近き頃の事なるが山城の國長池村といふところに百姓つねに此觀音を信仰して月々參詣いたしけるがあるときいつものごと〳〵三室戸へ參詣いたせ

し跡にて隣家より出火ありて折ふし風つよく一村大半やけゝるに此もの〻家に火かゝらんとする折ふしにはかに風ふきかはりかの家一軒のこりたりふしぎといふもあまりありかの者は感涙をながし則金燈籠を寄進なし今に其家さかふる事よく人のしる處なればこゝにしるす

玉のみと三むろと山のさねかづらさねは何れに有と見ましや

○十一番　山城國宇治郡上醍醐寺

人皇四十五代光仁天皇の御孫葛原王の檀主にして開山は聖寶僧正なり此僧正は則觀世音の化身にして奈良の東大寺にましませし時吉野大峯山に大蛇すみて參詣といまりければ其由を聞召大峯山といふは彌勒ぼさつ五十六億萬歳三惠のあかつき御説法まします靈地なれば役行者のふみ分給ふ御山なるに大蛇さまたげをなしふたゝび草木しげりて荒廢なんは口をしき次第かなさらば大蛇を退治なさんともとより此僧正大力にましましければ大なるまさかりを持て山にわけ入給に大蛇は日月のごとき南眼にて頭をふりたて口をひらき僧正をのまんとす其ときに僧正大音聲にて汝わが、いふことを聞け悉くも此御山は佛法守護

役行者の守給ふ御山をさまたげなす事心得がたし故にわれ今汝を誅伐す死を快せば未來はたすけ得さするぞと聲の下より大鉞にて大蛇の頭を打わり給ふにさしもの大蛇總身をちゞめて仆れ伏す僧正つゞけさまに七たんに切はなし給ふ夫よりして山上を安々とふみわけ登り吉野よりして熊野へ御參詣ありしなりこれ順の參詣の初といへり熊野より吉野へ參るを逆の參詣といふなりふたゝび大峯を開き給ふは聖寶僧正なり則今修驗御本山の御兩室の御宗祖と尊み給ひ御峯入の御とき先達のさかりを持給ふも惡魔をはらふ御例なりと開り時に大僧正は東大寺にましゝけるとき觀音の御告に山城國上醍醐山といふ處に藥水あり此水を一度のむものは三惡道の苦をまぬがれ未來成佛水にして廣大無邊の靈山なりと告給ふ夫より僧正は山城の國にいたり醍醐水をたづね給ふて清水の涌出する處に行あたり御手にすくひ呑給ふに其味常ならず眞に觀世音慈悲の法水三惡ぼんなふの消すべきとうたがひなしとてだいご水と名付給ひあゝ有がたしとて觀音の像を造立ある醍醐寺これなり女人禁制のことは女をにくみ給ふにはあらず谷深高山なるがゆゑに後難を恐るゝがゆゑなり女人參詣は女人堂まで登りて拜すれば則觀世音其處へ來影ありて其願望をうけ給ふといふよつて光明杉といふありてゝに來向し給ふ杉なり誠に諸天善神閻魔王二十八部

衆冥官守護の靈山なり

御詠歌

逆緣ももらさですくふ願なれば
じゆんれい道はたのもしきかな

逆緣は順禮の事じゆんといふは參らんと深く心ざして參るは順なりしんぐもなく次手にても參るものならば助得さすべしと觀音大悲の御心にて逆緣ももらさですくふとの御惠なりまして順禮するとて參る者は氣づかひすな未來極樂往生さして取らすべしとの御詠歌なりだいごより三十七町登りたるを上のだいごといひ三十七町下に御里坊をたて給ふ是を下のだいごといへり三寶寺醍醐水といふ藥水出るによつて醍醐寺ともいへり觀世音の堂の前に札のたちたる井ありこれをいふなり

○開山聖寶僧正は則葛聲王の御子にして讃州の生なり弘法大師の上足眞雅僧正の嫡弟なり聖觀音の化身にて聖德太子と生れ給ふて佛法を興隆し聖武帝と生ては東大寺を建立あり今聖寶僧正に生てこの醍醐寺を建立ある三生の本地の聖の字あるも不思議の御事なり御慈悲の御惠ふかきがゆゑ諸山の道なき所をひらきよしの川には舟を浮べ往來の人を

たすけ當山修驗者の元祖となり給ふ昇に觀音の御化身とあふぎ奉るべき御方なり

○此餘靈驗利益を蒙りし事數多といへども此頃準提觀世音靈驗圖會といふ本を出すこれに御本尊の御畫像をはじめ當山の勝景御靈驗等くはしく出すがゆゑに爰に略す則當山の準提觀世音と申奉りしが日本最初の準提尊なり其書にくはしく出たりよみ給ふべしよつてこゝに略す

○十二番　近江國志賀郡岩間寺　正法寺といふ

持統天皇六年に道昭和尚北國に遊行し給ふて淳熊の國三神氏の家にいたつて小童を見給ふに圓光を現じ後に小兒ありて寶蓋を捧おはしかるを道昭ひとり是を見て驚き父母に告て此童子は神童なり尊みて養育あれよといへり果して成長のゝち出家す泰澄これなり父は安澄母は伊野氏なり天より白玉下り口に入と見て懐姙ありて此の泰澄誕生せり白鳳十一年六月十一日なり泰澄の兄安方といふ人あり泰澄は常人とちがひ生し時より泣事なく唯にこにこと笑ひ居給ひ二三歳の頃より唯手を合て拜み居給へば唯人にあらずと兩親のいとをしみ分て厚かりしが八歳の頃より皆々嫁しづまりしをうかゝひ夜毎にぬけ出朝は人起ざるに歸

りてふして居らるゝ初の程はおどろき尋ねさはぎし事もありしが毎夜の事になりて常のやうに覺ゆるに父公兄の安方をめして其由をかたる兄聞て思ふにはあの者は母の懐胎のときよりも不思議あり唯人とは見ねず幼少のもの夜毎にぬけ出いづこへ行やらん見屆んとかねて心得居けるに例の如く拔出ぬ跡をしたひ行に越路白峯といふ大山にのぼる猶したひ行に其山は岩をたてたる如なるはげしき岩石の上をとび越て登る事誠に飛鳥のごとくなれば兄安方もそれ迄はおとらじものをと跡をしたひ行けれども爰にいたりて登る事あたはず是非なくながめて見上ければ上の方は平らかなる處あつて四方を拜み給ふ事數千返にして南無十一面觀世音神變不思議と高らかに唱へ夫よりして歸り給ふ其趣を見て兩親に語れば左こそ有なんと夫より夜ごとに出るといへども父母これを案じたゞはずいつものごとくなしけるが十五歳のとき今宵かぎりと家を出られけれども兩親は何の心も付ざりける夫より歸らざるゆゑ大におどろき諸方へ人をはせて尋るといへどもさらに其行衛しれざりけるしかるに書殘されし文あり是まで御恩のほど計なしといへども今よりしては子ありとな思し給ふまじ佛道修行の志あれば全く御歎あるべきにもあらざる事と記したりかくて泰澄は白峯の岩屋に籠りて木實落葉を食し木食となり十年の間岩屋を出させ給はざるにふしぎや何

國より來りけん眞黑なる猿の如き法師きたりて泰澄にしたがひ給仕す泰澄思ひ給ふ事をこの法師よくさとり知り望に應じて其用を辨ず常にはたゝ仰向伏居る泰澄も何國より來るとも尋もせず置れし也後白峯の靈地ひらけて人の通ひも出來しに諸人かの法師に御僧は平日は何事をなし居るゝとふしんをなし問ひければ大德の用聞行者なりといひて泰澄の用の外は唯寐てばかり居たるゆゑ臥行者と付たり又泰澄和尚とは後に付給ふ御名なり其頃はいまだ名も付けたまはず故に越路の大德と申せしなり六根清淨の身となり岩屋に住居し給ふが時の帝を　元正天皇と　申　奉る養老六年に御腦もつての外にて御祈禱さまゞなれども御心よからずときに越路の大德といふ名僧ありと奏聞に達しければ急ぎ御使を遣され內裏へ召れける普天の下卒土のうち何れ王地にあらざれば大德御使とゝもに都に登り內裏の總門にて岩屋に忘れたるものありとのたまへば御供せし臥行者其顏を見るより實といふてかけ行人々はふしぎに思ひ何の事ともしらざるに大德二三町歩み給ふ間に臥行者は越前の岩屋より取りきたりてとつこを出す大德これを取てあがり給ふ皆々ふしぎなるものと思ひたり扨大德は帝の御側に上り獨鈷をふり千手陀羅尼を唱へ一へんゝにとつこを以て帝の御身をなで給ふに次第〳〵に御心よゝ成らせ給ふ千べんに滿ければ玉體御安全になりぬ給

ふ御悦なゝめならず臥行者は内裡なりといふ遠慮もなく眞仰向になり臥たりしが公卿殿上人たち見給ひてあの者は人とは見ねず岩屋に住る猿ならんか猿年を歴れば人のごとく大になるものときけりとそしるを臥行者きゝより大にいかり大德の御そばに仕へる行者を畜生といふてそ安からぬいでもの見せんといふまゝに御殿の柱をとらへて引うごかすにさも嚴重結構の殿々一同にゆらめきわたりて地震のごとく震動せしかば諸卿こはいかにと慄き給ふに大德微笑しこれ無骨なる行者のふるまひなりとて獨鈷をもつて柱をおさへ給へば忽ち震動といまりけりさて大德御次へ立て行者をまねき何事ぞと問給へば行者云云と答ふそは人々の座興なりかまへて猿なりとのたまふにはあらじといひ給へば行者いかりをしつめ又うち返して臥たりけり斯て　天皇の御惱平癒の御悦びに何にても望を叶へ得させんとあるに大德答て岩屋に住る身はさらに望申べき儀これなししかしながらわれ堂宇を建立なし申度とあるにさらば其堂塔をたつべき地を見立べしとありければ大德有がたく御請を申上それより諸所を見めぐり近江の國勢多の郷にいたり大木の松のもとに一夜臥給ふに千手陀羅尼を唱ふる聲あり大德あやしみ其聲をよく〳〵聞に傍なる大木のもとなり夜あけて二人をかたらひ此木をきりけづり見給ふに此木の内に千手觀音の御像あり〳〵と顯れたり則大

德一刀三禮して其御形のごと〳〵彫刻し給ふこれ則今の岩間寺本尊なり則ち帝へ奏聞なし七堂伽藍を建立したまふ抑此御本尊世にあせかき觀音と申奉るは朝々御身あせにぬれたまふ其ゆゑは毎夜〳〵一百三十六地獄をめぐり諸の罪人をたすけ給ふゆゑなりとぞ又雷除の觀音とも申奉るは泰澄大德此觀音大悲を安置まし〳〵てのちに越前國上山といふ處に國上の長者といふものあり五重の塔を此山中に建立せしが日數を經て成就せし日に一天かきくもり雷鳴すさまじくして終に一雷塔の上におち雷火のため此塔片時の間に燒失す長者は大に望みを失ひしがいや〳〵是は全く諸佛の場所をきらひ給ふならんと同じく山中を吟味なし清淨の地に又普請をいとなみ日數を歴て漸成就せしときにあたつて又一天曇り雷鳴す長者いたく歎きて又もや雷鳴するは我心に邪ありて佛の御受なき事こそ悲しけれと大に哭き居たる折から大德飄々と來り給ひ長者いたく歎きそわれ咒して參らすべしと其塔のもとにいたり衆人を退かしめ唯一人心に千手陀羅尼を唱へて待給ふに忽ち大地をもさくるが如き音して塔のもとに雷落る處を大德不動の縛印をむすびたまへばやがて黑雲晴わたりたるを見て大德いかゝならせ給ふと人々集り見るに大德少しも亂れ給はず悠然として居給ふかたはらに總身朱の如き髮ながく異形のもの輒々として居たりしかば大德たちあが

りいかに雷鬼長者が志願によつて造立せし五重の塔を何が故にかく焦土とするや汝外道の邪術ありしとも正法の縛印にはいかで其身を自由にする事を得ん哉と大に喝し給へば雷神答へて是は全く私の仕業にあらず此國上山にすめる山神のかく五重の塔の出來しては三世三千の諸佛影向あつて此一山靈地となる左ある時は山神ごとき位なきもの此處に住がたし依て塔を破却なさん事を私に賴むがゆゑに斯の如し願くは大德己をゆるして登天なさしめ給へと願ふに大德左もありなんしからば今より山中に一所をゑらび山神の祠をたてゝ永々住所を定めていはひ込べししかる上は唯今よりして當山四方四十里のあひだ天地陰陽けきばつの外雷のおつる事あるべからずとて縛印を解給へば雷神は頓首して其儀は永々背べからず其證には當山は水とぼしくて人民困苦す我を免し給ふ御禮にこれを救ひ申べしと雷神爪をもつて傍なる岩をかき破ればふしぎや岩石ふたつに破れ忽清泉涌出せしかば雷神は則雲をとびて登天せりこの清流今にたえず國上山の雷水とて炎天にも水かるゝ事なく又かの山神も大德の仁慈により此山の守護神となり給ふ白山大權現これなり是全く岩間寺千手觀音の應護による處なりとて常觀世音を雷除と崇むる處なり元來觀世音は雷をも消除し給ふ則普門品に雲雷鼓掣電降雹澍大雨念彼觀世音應時得消散ととき給へり故に雷

聲を恐るゝには觀世音の名號となふべし其聲あらん處へは雷おつまじと御誓願なりかくて越路大德に和尚號を帝より下さるゝこれ和尚號のはじめといふ泰澄とは父安澄の安の字を泰と書かへ父の名を其身に付給ふ處にして孝行の道を守り給ふ有がたき御志とかや

○雷鳴は天地陰陽の恋劇にして水火のたゝかふといへりされど雷獸の事諸説さまゞにしてたゞ形ちを畫るもそれ〳〵のたがひありて一とさだめがたしかるに一奇話あり聞るまゝをしるす京都寺町通何がし寺に古き猫を畜たる住持ありこの猫折々あやしき事ありと專ら人のいひつたふといへども住持寵愛する心よりはさまで心も付ざりしが或夜ふけて猫いづかたよりか一疋來りてよぶありさま和尚ふと目さむれど寐たるふりしてやうすを見るにかの畜猫ひそかに椽先へ出て何やらんかたる事人間のものいふがごとしいよ〳〵ふしぎにおもひひそかに起てうかゞひ居るにやがて一疋のねこは立かへり畜ねこ内にはいる處を引とらへねぢ伏ておのれかねぐ〳〵人のあやしみを聞といへども跡かたなき事とおもひしに今のありさま心得がたしといふに其ときかの猫人のものいふごとく私は當寺に久しく年を積みことに和尚には別て御寵愛をかうふるしかるに私程なく通力を得て惡魔の眷族と成申なりこゝに人間どうまるゝに心正直

にしてわたくしなく佛法を尊む人も諸天これを守護し給ふがゆゑ我々手ざす事を得ず
たまくけんどん邪見にして佛法をも尊まずまして未來の後生をもねがはざる人は佛
神見はなし給ふがゆゑ其人死すれば其死骸をつかみ取候事なりしかるに今日より三日
をすぐれば一人引つかみ申べき老人あり私其役にあたりたるがゆゑたい今其事を申
來りたるなりしかれ共其老人といふは當寺の旦那ゆゑだんくゝ斷りを申せども聞入申
さず據なく承知いたしたりしかれども御恩ふかき和尚さまに候得ば御身にはけがなき
やういたし申べし尤水晶の御珠數をもたせたまふべしと申けるに和尚大にいかりそ
れを己になちふべきか又禪門のいかに生前邪けんなりとも我引導をなすに於ていかで
かなんぢに引とらるべきならば手がらに引取見よ養育も寵愛もたい今かぎりいづかた
へも立さるべしと庭の飛石へなげ付れば身をひるがへしてすつくと立ちいづくともな
く失にけりしかるに翌朝檀家の禪門死したるよしといけ來りかたのごとく葬式をいと
なみしに茶毘處にいたらんとする道にてにわかに一天かきくもり大雨しきりにふつて
雷鳴はなはだしく鳴はためくにさすがの眷屬もたまりかね輿を大道にすてゝ人家の軒
にこぞるに和尚はさてこそかの障碍なりとかねて期したる事なれば棺をはなれすして

千手陀羅尼を咒しゐたるが一聲堂とひゞくとひとしく棺のうへに落たる處を和尚持た
る水晶の珠數にて一打うちければやがて空はれわたるに棺のうへにかの養猫じゆずに
うたれて死ゐたりける誠に和尚の法德尊むにあまりありと人を尊敬なしたりける江戸
猿寺和尚もこれに似たる猫の變化をしづめられし事あり斯れば猫も雷獸のうちならん
か

御詠歌　水上はいづくなるらん岩間でら

きしうつなみはまつかぜのおと

水上はいづくなるらんとは身のまよひ初めし其むかしのもとはいづくなるぞ岩間寺はいへ
きかまはしきといふ心なり今人間となつてもそのさきの世にては牛にてありしか馬にてあ
りしかしらぬ昔のまよひ初し水上はいづくなるぞといふ心なり今もまだ迷ひゐて無明の酒
のゑひさめず始終ひとりと一心てんどうするなり岸うつなみは松かぜの音とは涙風雨の音
さまくゝ品かはれども唯さめくゝとして聞分がたし是まよひの耳に聞ゆゑなり瑠舍那の說
法を聞眞如寶相の御法を開く時は此まよひわらずことくゝ聞分るなり一心てんどうとは

淨樂我常の四ッのてんどうしてひとつには淨のてんどうこのしやば世界淸くきれいなること〻思ひ居る是大なる違なりこのしやば世界は甚けがれ不淨の世界なり僧が衣裳を著俗は髮油にて結び女は紅白粉にて化粧よつて色じやの情じやのとまよひに迷ひをかさぬるよつて此せかいは穢の地なり人間身體のくさきにはひは四十八萬空の天へ登てまたくさく不淨なればこそ四十八萬里の上に天人はあそび給へども下の穢たる世界には下らず人間とはちがひ淸淨にして神通ありすでに經文にある通り婆婆世界のありさまは佛の御目よりは糞中の虫の穢たる中に居ながら穢れたる事をしらずして樂み居がごとく奇麗なるよき處と思ふべけれども人たるの目からはむさく目もあてられず 則如來の御目よりはこの婆婆世界は眞そのごとく穢てあれば早く成佛なして淸淨の身心となし極樂淨土へ出たる淸淨の心になさしめたくと思しめすなり二ッには樂轉倒といふ此しやば世界をたのしき世かいと思ふべけれども苦の世界なりうまるゝときは初聲が則苦のはじめなり目出たしと悅べども產る者は身をさくの苦みなり八萬世界は皆三界火宅たり八苦とは一生涯ののぞみ盡ることなく目に見耳に聞鼻に匂ひをかぎ一々くるしむ世界なり又極樂世界には何ひとつ苦む事なく見る事聞こと樂みばかりなり此しやばは暑うなり又寒うなり雨風地震火難などゝ騷動すみなみな八苦のうちなり三ッには我轉動我はわれといふ事わが身に迷ふなりからだは有てなきものなり燒ば灰となり埋ば土となる有と見し骸は跡なく消へてのこれるものは名ばかりにて我身ある物とおもふゆゑに他人ともいひ分をなすまたはよろづの事に付て望ごともたゝさるなり此からだをば無き物とみれば何事にも屈たくはせずもの事にわきまへ有ば命はをしきとも思はず世に生あるもの死なずといふことなし恐多き御事ながら上々さまにても御命にかぎりありて死の道はのがれ給はず御位といひ御幸ひと申何に付ても御不足なる事はなき御身といへども婆婆のありさまにて死の道ばかりには御心にまかせ給はず醫療祈禱といへども壽命のかぎりには生ひ奉る事あたはず是非もなき御事ぞかしいはんや其外下主下郎の身に於をや何とて命ををしむべき念佛の行者といさみいさんで往生するはいとありがたき事なり死とむなしと思ひては何とて極樂往生なるべきや四つには常轉動此しやば世界は常にかはらぬものと思へども無常の世界にて定たる事なく一つとして常ならず萬物草木國土いづれも生あるものにて初あれば終あらずといふ事なく是萬物みな定なきものとしるべし大切に取扱ひたる衣類道具といへども古くなれば朽そんじ後々は跡方もなくなる物ぞかし唐土咸陽宮とて金銀をちりばめ珠玉をもつてかざりし宮殿樓閣のけつかう數百里に建つ

らぬしも只一時の煙となりて瞬々たる荒野の原となり鐵の柱石の根つぎしたりとも有べきにもあらざればなに事も無常の世なる事を觀じはや〳〵九品の淨土に成佛往生をとげんとの願をふこしさとりを開きまよひを辨へ岸うつ浪風の音を聞わけよとの御詠歌なり皆人何事をいふにも阿うんの二字あり阿吽は眞言秘密陀羅尼經に功德のことをあらはせり三つ子の物言ふにもあうんにもるゝ事なく六字の名號をとなふるは陀羅尼三べんとなふる功德ありとなり阿は口をひらくうんは口をふさぐなり南無の內にあうん籠れり阿彌つぎに陀佛とみな口を開き口をふさぐがゆゑなり南無阿彌陀佛と六字のうちに三べんの功德ありとは申すなり阿は胎藏界吽は金剛界にして金胎兩部眞言秘密の陀羅尼を六字の名號につゞめてとなへ申なり左すれば三べんの功德にあたるなり增て日課念佛を勤めなば功德はかりがたし

古歌に

法の身の月はわが身を照せども無明の雲の見せぬなりけり　千觀法師

一とせを幾たび夢にみくまのゝうらの濱ゆふかさね來ぬらん　慈鎭和尙

かりそめの宿ともしらで尋こしまよひぞ道のしるべなりける　圓世法師

西國三十三所　觀音靈場記圖會三

○十三番　近江國志賀郡石山寺

石山寺往昔聖武帝東大寺の金銅十六丈の大佛を造立し給ふに御像鑄をはりて金箔をぬらんとするに其頃は日本に黃金少くしていかにも使がたく帝良辨に語りてのたまはく傳聞金峰山は皆黃金なりといふ汝金剛藏王に祈て金を得て銅像の箔をたすけんやと良辨勅命を受いそぎ芳野にいたり持念し給ふに藏王は夢中に告給ふに此山の黃金は我はしいまゝにする事あたはず彌勒尊の出世の地に敷べき金なり今汝に別に金を得る事を敎ん江州勢田郷に一つの山あり如意輪觀世音の靈地なり汝かしこに至り持念せば黃金をうる事あるべしとの御告あり良辨夢さめて敎にまかせ急ぎ勢田に行く時に老翁石上に座して釣をたれ居るものあり良辨問ふて公は何人ぞや翁こたへて我は此山の主比良の神なり此地は觀音の靈地なりと敎へて形は見ゑず失給ふ良辨其老翁の座し給ふ石のほとりに庵をたて如意輪の像を安置して持念し給ふに程なくして奥州より黃金一萬三千六百兩を貢ものとなしければ是ひとへに觀世音の佛力とて帝御よろこびなゝめならず箔となして大佛の像にふかせ給ふ其とき

大伴家持この事を祝して

すべらぎの御代さかへんとあづまなる陸奥山に黄金花さく

今の伽藍の地を開くとき地中より五尺計の寶鐸を堀出すいよ〳〵靈地なりとて堂を建立あり今の丈六の大悲の像は興正菩薩の造立なり良辨所持の小像の如意輪觀世音を腹内に納たてまつる開山良辨僧正は近江國志賀の里人なり其母子なきを歎て觀世音に祈りて此良辨を生り其子二歳のとき母桑の葉を取とて木蔭に子を置けるに山鷲飛來りて子をつかみ去ける母のなげきたとふるに物なく其頃南都に義淵僧正といふあり春日の社へ詣給ふに大なる杉の木の枝に鷲小兒をつかみ來り喰はんとするにふしぎや恐るゝ氣色あつてしば〳〵見ねけるを僧正御らんじて誰かいそぎあの鷲を追はらへとあるに若き僧ども銘々竹をもつて一同に追立れば鷲は小兒をすてゝ飛去るに小兒は衣のひも木の枝に引かゝりてぶら〳〵として危ふかりしが若僧どもつか〳〵と木をのぼりていだきとりて僧正に見せ奉るに玉のごときの男子なり僧正怪び給ひて養育あるに五六歳の頃より學問するに其智惠つねの人にすぐれり花嚴法相の奥義を知り後は良辨僧正となり南都第一の頭學となりて聖武帝の歸依僧となり玉ひける爰に皆人傳へ聞だにもかなしかりぬるは彼小兒の母なり獨子をわしにとられかなたこなたと子ゆゑの闇にまよひあるき知らぬ國までもしも我子に似たる人もやと津々浦々にいたるまで凡三十年もたづねさまよひけるがもはや古里へ歸らんとおもひ定て山城國淀川のふねに乘けるに乘合あまたのものがたりするを聞ば世に珍らしき事こそ侍れ奈良の京に良辨僧正といへる今は南都一の大德なるが彼僧正はもと二歳の頃鷲がつかみ來りしを義淵あはれみこれを助けて弟子と仕給ふなるよしを聞て彼老女は飛たつばかりにおもひ急ぎ南都にいたり東大寺に行てある僧に尋ぬるにいかにも彼僧正こそ鷲につかまれ來り給ふ御方なりときゝ若や其僧正こそわが子にてはあらざるか聞けばきくはどなつかしく良辨僧正の御寺にいたり見れば流石に當時帝の歸依僧にてましませば四つあし御門きらびやかに内を見れば玄關には數多の士居ならびて門前に諸家よりの使者の供ぞはり乘馬のり物すき間もなく中々近よる事もならずといへどもさりとて其實否をも聞かで此儘に歸りがたければとて門前に三日の間飢つかれておはせしが親子の奇緣盡せざるにや僧正はかゝる事とは夢にも知給はず御乘物にて出たまへば近習伴僧前後をかこひ春日の社へ參詣なし給ふ老女ははるかに乘物のうちを見入るゝに三十歳餘と見にてげにも尊き御有さまなが ら幼顔に見覺にあるやうに見にけれども何と尋ねん便もなく茫然とたいずひ折から門内よ

り僧一人たち出るを見てかの僧の前にいたりかく見苦しき姿にて申上るも恐れあれど御たづね申上度事の候なり妾ことは近江の國志賀の里にすむものなるが二歳になりし男子を鷲に取られ夫より暑さ寒さも身に覺えず三十年の間諸國をたづねまよひ候ひしが淀のわたりにて計らずも僧正の御身のうへを聞きもしや我がたづぬる御方ならんかとたづね參りしかど御覽のごとき見ぐるしき乞食同やうのすがたなれば御門を越ることさへ憚あり何とぞ御僧さまの御取なしにて此事御耳に入給へかしと涙と共に物がたれば彼僧うち驚きいかさま其姿にては御寺へは入がたかるべしさあらばよき便あり御身の國里より二歳の男子を鷲にとられてこのかた三十年餘諸國をたづねさまよふよしを書て二月堂の前に大木の杉あり世人良辨杉と稱す此木は僧正鷲に掴まれ來り給ひし杉なれば僧正父母のおもひをなして御社參の節は立よりて拜し給ふよつて其書付をかの杉に貼おくべし今幸ひ御社參なればはやくなすべしとかの僧これかれと差圖して書付をなさせ密に此僧のおしへを受て良辨杉にはりて側に潜みゐるかくて僧正は二月堂に參詣なし給ひ彼杉を拜し給ひ不圖書付を御覽じ其貼紙これへと仰て取上見給ふに近江國志賀の里なるもの二歳の男子を鷲に取られしより諸國に行衛をたづねる事已に三十年あはれ佛神の冥助を得て一度母子の對面をなさせ給へと

の願文なり僧正の御心にや徹しけん傍にさめ〳〵と泣ゐる老女に此貼紙の主はと人を以てとはせ給へば老女は恐るゝそる私なるよしを答ふ僧正老女が傍へ立よらせ二歳の男子を鷲にとられたる母とは御身よな我も師の坊の仰には鷲に掴まれ此木の梢にといまりしを師の情にて助られしとの事にて何國何人の子なる事をいまだ知らず故に常に當社明神を願奉り兩親此世にましまさば何卒一度對面なさせ給へ凡人の子たるもの一日も父母に孝養なさいるは不孝此うへあるべからずたゞ此杉を父母として現世未來の報恩謝德のため拜し奉る處なりもし良辨が母ならんには全く明神の御引合なり何ぞ是ぞといへる證もあらぬかと懇にのたまへば母はとにかく涙にくれて居たりしが有がたき御仰なり三十年餘の事なれども鷲にとられし時はかやうくの衣にて守袋は一寸八歩の觀世音はいにしへより家につたへたるを其子生さき幸あれかしと入置たるより外に覺えたる事なしと答るに僧正御懷中より觀世音を取出し給ひこれにやと見せ給ふに紛方なき尊像なれば老女は聲を上て哭きければ僧正も老母に取すがり有がたき親の恩に引かへ良辨が不德によつて三十年來身心を苦め奉る不孝の罪ゆるさせ給へと欺かせ給へば近習屈從のめいくも袖をぬらさぬなかりける僧正母の手をとり我乘物に乘給はんとす母はおどろきいなみまゐらすればいや

とよ親の恩は海山にもたとへがたし三世兩達の釋迦如來の御身にさへ御父淨飯大王の御捉をかきたまひしに此良辨は御乘物をそりかくべきはずなりとて母御をのりものに乘せ參らせ僧正は御歩行にて跡より御供なされ御寺に歸らせ給ふ其のち御弟子達を付おかれ朝な夕な、の御介はう御自身にも日々三度づゝの御きげんをうかゝひ烏のなかざる日はありとも一日も御見まひをかゝせ給ふ事なく御孝養なし給ふ母公八十歳にてけつかうの往生をとげ給ひしを其のち尊靈を大佛殿の戌亥の角に一社をたて子安明神といはひ込給ふ今に子供の願を叶へ給ふ御神とならせ給ひぬ

○世の諷ものに紫式部といへるは此石山の觀世音かりに此世に現じてなんと諷へり案に源氏物がたりを此山に籠り居て湖水にうつる月かげを見て須磨明石の卷より書はじめ給ふにより凡源氏物がたり五十四帖を作れり皆莊子が寓言になぞらへり尤奇妙の和筆なりその内若紫の卷殊に絶妙なりゆゑに紫式部と名をたまふともいへり實は越前守爲時の女なり上東門院の官女なり

○爰に良辨僧正の御身に同じき咄しありある時賀茂の社司に侍從といへる女あり形ち美にして發明なり歌をよみ詩を作りけるが神主寵愛ずる事なゝめならず其頃の社司は

當代の如くにはあらず甚おもく〳〵しくありしなり此侍從懷胎して男子一人生り本妻のねたみはなはだしければ詮方なく思ひ居たりしに男子出來てよりいよ〳〵ねたみ深くさまぐ〳〵のろはれけるにより今は一向に親子ともに毒がいして殺さんとたくみしを侍從是を聞さて〳〵是非もなきことかなゝる處に一日も居る事心安からず我身の上は兎もかくも口惜しき次第なりたとひ今の難をのがるとも此御子の始終の爲ならずと思ひ定め其子をかゝへ館を忍び出御子を桐の紋付たる手箱に入錦の袋に入下加茂のみたらし明神にもふで我は本妻のねたみによりてかく技出候得ども此子は當社の神職某の種なれば明神の御氏の子御見捨なく救ひ玉り何方へ成とも遣されあはれみ給ひて成生を守らせ給へと伏拜み袋に包みしをみづ垣の上はらにかけ置て我は都の方へたち去んと思ふに箱の内になく聲のすれば又も引戻され親子恩愛の名殘おしく取上て乳ぶさをふくませれば心よげに寐入しを母は我子の顔を見いつもの如くそへ乳と思ひすやすやとね給ふは果報つたなくいとをしや今母にさへ別るゝとは知らざるか是今生の別ぞと思へば涙のむねに滿ちて聲さへ出す心に思ひ返すにはいかなる緣ありて又も逢ふことの計りがたしと手箱のかけこを取て是を印となすべしとなく〳〵見捨都のかたを

さして行其後は大原の奥にて髪をおろして尼となり三十三所の靈場を順禮せばやと出にけり然るに土御門大納言殿加茂へ御心願ありて御參詣ありしにみづからの所に幼き子のなく聲しけるを聞たまひ御慈悲ふかき御方にて不便なる事に思しめされそれ見よとて御覽あるに菊桐の紋付たる手箱に入れ錦のふくさにつゝみあれば是賤しきものゝ子にあらず何故捨つらん不便なる事なりとてつれかへらせ給ひ夫より乳母を付て育られしにその才發明にして年月つもりはや廿三歳に成ければ大納言どの仰けるは其方事產家のうちに此手箱に入れみたらし川の社にすてありし子よしあるものゝたねならんとつれ歸り養育せしはわが子無んば世つぎともなすべけれども左にもあらざればよく〳〵聞給へ兩親をもしらざる身なれば今より出家となりて父母の現當二世を祈りまた親々この世にましまさば佛神の力によつてふたゝびめぐり逢事もあるべし出家に過たることあらじいかゝ思はるゝやとのたまへば初てしりたるわが身のうへ誠の父母にもましまさりたる御厚恩いかでか仰をそむくべしかねて我心にも出家をねがふ心も候へば御仰といひかたく〳〵もつてたゝ今より出家となりて是まで御養育くだされし御恩を返り申たてまつらんとおとなしやかに申ければ實でかされたりとて比叡山良根院惠心僧都の御弟子となり給ふに惠心僧都もよき弟子なりとよろこび尊辨と名づけたまひ經卷陀羅尼をよみはじめ學問を習はせ給ふに一を聞て十をしり爰といへばかしこをさとるその智惠比類なき事山内に於て若僧たち尊辨につゝくものなしともてはやしぬ說法あれば辯舌あざやかにて五音の開合まことに佛在世のふるなの辯も及ぶまじと人々いひはやしぬ其頃御年いまだ二十五歳なり惠心僧都は名高說法の御名人なりあるとき手治にて說法あらせ給ふに御年もたけさせ給へば御くらうに思しめし尊辨を每々つれさせられ僧都の御名代として御說法ありしに其ころ嵯峨の釋迦堂供養の御說法とて淸涼寺にて二七日これあり聽聞の人々は御庭にみちく〳〵たり尊辨僧都の說法のたびごとに菊桐の手箱とにしきの袋を高座におかれ御ものがたりありけるは愚僧が身は產家のうちより此手箱に入れ加茂のみたらしの社に捨られしを去御方のなさけにて人となり今かゝる身となりしかども兩親の御かほだにもしらざれば明くれこれをなげきかなしむなりとて此手箱と袋見覺へたる人あらばしらせ下されよとなみだをながし日々に諸人へたのみ給へばきく人袖をしぼりけり今說法の席へ手箱をもち給ふ事は此尊辨より初れりときに母なるもの西國順禮して第十三番近江石山寺までめぐり來て御堂にこもり

て何卒大悲の御ちかひにてわが子にめぐり合せ給へつたへ聞る辨僧正は二歳のとき鷲につかまれ三十餘歳を經て母御に逢給ひしも此觀世音の御慈悲と聞くわれも子に分れてより廿五年のとし月を經たればひとつにあはれみおぼし召と一心に觀世音を念じ給ふに夢ともなく白髮の翁來たりて嵯峨に行べし〳〵とのたまひ又

玉手箱なかにかけごのなかりせばふたゝびいかでめぐり逢べき

とはがちかにうたひて行かたしらず老女は大におどろきいそぎ京にのぼりさが野にいたり釋尊に念誦して說法を聽聞するに尊辨はいつものごとく此手箱を覺し給ふ人はあらずやと流涕し給ふを聞かの手箱を見れども數萬人にへだてられ手箱もしかと見ねわかずされども心に徹したる手箱袋の合紋ぞ疑ひなくこれぞ乞食のやうなるを恥て說法のをはるをまち勝手へ廻り和尚さまの見せ給ふ御手箱の事につき御めにかゝりたしと申上げれば尊辨大によろこび給ひさつそく御居間にせねき給ひ子細を尋ね給ふに老女は先だつ涙をおさへ申もはづかしき御事ながら我若かりし時加茂の神職何某どのにつかへまゐらせ假初ならぬ緣にて殿の御たねをやどし男子ひとりをまうけしに本妻のねたみつよく父子とも毒害なさんとの工みをきゝて夜に

まぎれ出けるがいたはしやいまだ七夜もたゝざる水子をいづくまでいたきいでたればとてかよはき女の身にて末にうきめを見せまゐらせんよりはとおもひさだめて御氏神の瑞垣に菊桐のまきゑしたる手箱に入まゐらせ錦の袋につゝみまためぐりあふしるしにと箱のかけ子を我身にのこし心つよくもすてまゐらせ我は北山大原の奥にて髪をおろし尼となりたとへ此世は罪深き身なれどもせめては後世を助け給へと觀世音の靈場をめぐりこのごろ石山寺へめぐり來てわが子いまだ世にあらばふたいひ逢せたて給へと御堂にこもりねがひたてまつりしに嵯峨にいたれと御告ありことに一首のうたを吟じ給ふゆゑいそぎこゝにまゐりて御高座よりの物語聞に飛たつうれしさもかゝる淺間しきすがたにてそれと申さんもはづかしくてさてこそひそかに申上るなりこれ見て給れと懷中より箱のかけごを取出せば尊辨も聞に涙をながし則手箱を取出しかけごを合せばひとつの箱しつくりと合しかば尊辨は母を上座にふきわが身は下座にへりくだり母子はじめての禮義をのべともに涙をながしつゝよろこび給ふぞことはりなりこれより尊辨僧正は土御門殿へも申上全く君の御情にて養育なしくださればこそふたゝび母子めぐり合ひ父の姓名をも覺たり其高恩今さら又も有がたしと涙と共に御禮なし老母とゝもに石山に參籠し大悲の冥助を仰ぎそれより坂本に庵室をかまへ母の年涯安往なし奉るに母樣はたゞ念佛三昧にてめでたく終りたまひしとなり尊辨僧正が孝養あつきことあまたなれども畧す

御詠歌　後のよを願ふこゝろはかろくとも　ほとけのちかひおもき石山

後の世をねがふ心はかろくともといふは小因大因といふて願ふ人のこゝろはかろくとも佛の思しめしはおもきぞたとへば少しの善根をなすとも大なる功德となる佛はめいくの子を愛し給ふごとし凡親の子をおもふことは物にたとへんかたもなき深きにや子が親を思ふともおよぶべからず世にわが子にはなれ又はうしなひて狂氣せしもの昔より今にいたるまで數多なれどもいまだ親をうしなひ離れて物ぐるひとなりし子をきかずこゝを以て親の子思ふ事のふかきをしるべしされば御佛もそのごとく念佛の行者毎日三度三尊彌陀如來御來迎あつて守らせ給ふとなり眞如堂の如來の御夢想にもあり願ふものは子の如し後世をねがふ心はかろくともおもき誓ひにて極樂往生をいたすべしとの大慈大悲の有がたき御うたな

り然らば重しねがふはいかにとあるに白川の法然上人は晝夜念佛にたゆみなく頭よりあせをながし給ふ是は佛の御心にましませば是を重き石山と申ごときなり佛のちかひのおもき事は唯一ぺんの念佛をとなふにも千卷の經文にもまさりしとなり黑谷法然上人を人々尊みけるにより南都大佛殿の供養に法然上人を御願ありしとき南都七大寺の衆徒をはじめ數萬人の參詣ありけるに法然上人は高々と念佛十ぺんとなへて歸り給ふを見て七大寺の衆徒大に驚き上人にむかひ實の堂供養を被下よと申ければ唯今の念佛にて供養は相すみたり一ぺんにても宜しかるべきなれどもあまり參詣の多きゆゑ十ぺん申たりとて其儘御歸りありける僧衆をはじめ數萬の參詣さすが大佛殿の堂供養なればいかにも六ヶ敷勤もあらんとおもひの外たゞ念佛十ぺんとなふるとはなまゝしき下司法師にても勤る事なり引留供養の仕直し致さすべしとて衆徒かまた追かけしに奈良坂といふ所にて追付上人を引とめいかにしてもわの儘御歸りにては心すみがたく去重にてもとなゆる念佛十返にて大佛供養とはいはれまじ今一度仕直し給へかしと申ければ上人仰けるはみなゝ念佛の重き尊き事をしらざるなり一返の念佛は此石よりもおもきものゝと傍なる大石をゆびさしのたまふ衆徒等うちわらひさらば重きか輕かを見せ給へと申せしかば上人易き事なりとて紙に六字の名號

を書給ひ榜に生たる松の大木に丸太をかけ天秤のごとくなしかの大石に繩をかけ丸太の一方にくゝり一方へかの名號をかけ給へばふしぎやかの大石むらくゝと土をはなれて一尺ばかり宙に上るに名號のかたは重く下へさがりける衆僧等大に忙れ忽ち大地に平頭して誤り入しかば上人かさねて名號の尊き事斯のごとしと示してしづくゝ都へのぼり給ふ今にその石奈良坂の道の右方に兩覆し辻堂のごとくして念佛石と札をたてたり尤此石高さ五尺ばかりまはり二間半ばかりもある大石にて二十人三十人の力にて動しがたき大石なり念佛の功力のおもき事をしり給ふべし

○爰に惠心僧都はいたつて能辯なりしがあるとき宇治にて說法ありしとき高座の上へ山風につれて木の葉一まいひらくゝとちり來ておちたるを僧都何心なく取て見給ふに虫のくひたるあと文字のごとくにて「極樂へ行舟のたよりに」とありくゝとよめけるより僧都とりあへず「法の道しる人あらばわたすべし」とつげ給ひてたからかによみあげ給へば聽衆同音にありがたやと感稱せしに聽衆をおしわけ一人の老女高座のもとへきたりさめくゝとなげくに僧都のたまふは御身は說法をありがたく思ひてなげくにやとふに老女こたへていやくゝさるはさふらはず此ほどよりの說法に何事をもしらざる凡

夫たりとも念佛さへ申さば極樂往生うたがひなしとのべ玉ふゆゑ有がたく存じたるに今の御歌に法の道しる人あらばわたすべしとよませ玉へばわれらがやうなるものは極樂へはまいりがたくと存候ゆゑ歎き申なりと申せしかば僧都大にめいわくし玉ひいかさま今のうたは卽席の事にて大なるあやまりなりゆゑすべしさて御身は其身には似合ず此上の句をとがむるには歌道に心よせたる人と見ゆさらば御身が心のすめるやうよふ直すべしとのたまへばかの女取あへず「法の道しるもしらぬもわたすべし」とあらばありがたく存候と申ければ其時僧都かの老女をふしをがみ有がたき詠吟かな御身は凡夫にはあらざりけり願くは名のり玉へと尊み玉へば老女すくとたちて斯あればこそわきまへなきものも極樂へ往生すべけれかくいふは西方淨土の主なるぞ汝能辯なるにまかせて法をとくにとき誤る事まゝある歟じつゝしめやくと朝日山へ飛さり玉ひしなり

この法をたゞ一言もとく人は四方のはとけの使ならずや　傳教大師

くさ木まで佛のたねと聞つればこのみとなちん事のたのもし　大僧正源親

つゆふかき人のこゝろをたねとしてさまくしげるおもひ卿哉　後京極攝政

さまくに千々の草木のたねあれば一つ雨にぞ悉そめぬる　崇德院御製

岩だにも生ぬる物をたねとして千世のかげ見ぬ庭の松かな　道遙院

○十四番　近江國三井寺

三井寺の開山は比叡山慈覺大師の御弟子智證大師なり觀世音も御自作なり御開眼のときに五十六億七千萬歲龍華三會の曉まで濟度ましまさんとの智證大師と御ちかひありし御本尊なり其のち三井寺に敎待和尙といふ御僧ありしが此和尙は彌勒ぼさつの化身なりといふ御年百六十歲にて遷化ある常に此和尙は湖の鯉鮒を自ら網にて取給ひはねまはるを串さして燒て食し給ふ諸人これを見てあれはどの名僧知識といはれながらかゝる狂がる事こそあれ然れども雨をいのれば降り晴を祈れば天氣となり飛鳥もおち立浪もしづまるはどの名僧なれば心のひらきはあるべきなれと魚肉を好み食し給ふ買求めて參るべきに手づから網をもつてすくひ取はねまはるものを火にあぶり食するとは俗にても心あるものはせざるなるに不審なりとそしる者も多かりしかば弟子ども此事をありのまゝに敎待和尙へ申上てもし御好みある事ならばいかにしても買とゝのへて參るべし凡俗のものども兎角そしり申ゆゑ開

すてがたく斯は申上るなりと申ければ和尚笑せたまひ鯉ふなを食ふ事何ぞと申ものあらばうたがひ晴し見すべし明朝つれ來るべしと仰けるさて明日あさになれば彼うたがひ居ものども三十人ばかりつれ來れば和尚は早朝より網をもち鯉鮒を數多とり來りうたがふ人々を待せおき其前にてはねまはる魚を串にさし火にあぶり袈裟衣をかけながら頭より尾までも骨も殘らず食盡し給ふを見て皆々興をさましあきれ居けるが敎待和尚は左あらば皆こちらへ來るべしとて湖水の方へ行手を合せ普門品を唱へくわつとはき出したまへば水の面に少き蓮華はらくと生じける是如此く人間は經文念佛を唱へ佛法を知り成佛すれども虫けらあるひは水に住む魚類は佛法をしらざれば成佛する事ふもひもよらず是を不便と思ふがゆゑなり味ひにかゝはり食するにはあらず我等が胸のうちには一代諸經を納め有なれば經藏に入て佛果の緣を求め助得させんがためなり則今食たる魚骨蓮華とは成しぞと仰けるみなく是を見てうたがひ申せしは我々が凡俗ゆゑなり眞に和尚は佛にてましますと手を合して拜み奉れば蓮華は消失ける此敎待和尚は常に三井寺より都の清水へ日參して行叡居士と御念頃なり三井寺より通ひ給ひし路をくつめぢといふ今の小關越なり是は敎待和尚道すがら踏給ふ下は修羅めつとふ迄浮み助かるとあるを苦集滅路といひしなりあるとき和尚今の觀世音の山に上りて湖水の波のたつをながめ生象觀を觀じ居たまふ後の山はそ道より年の頃八十歳ともおぼしき老翁柴を荷ひこゝに來り杖をたて敎待和尚にむかひ老僧は何をながめ給ふぞといふ敎待その人を見給ふに賤き老人なれば汝等がしる事にあらずとのたまふ翁からくとわらひ汝うかくと東方をながめ居て我足の下に佛の臺ある事をしらざるがをかしさに尋なりとありければ敎待只人ならずとおもひわが足下に靈場ありといふ御身はいかなる人ぞ名のり給へとありければ我は此靈地をしること久し奥の院の如意輪觀世音は利生有緣の本尊なりしかるに此山は五十六億七千萬歳三會の曉まで穢ことなりがたきゆゑに女人結界として奥の院へは女人參詣する事ならずかるがゆゑ有緣の衆生も濟度ならざるがゆゑ觀世音の御心に叶はず大慈大悲の利生も埋れ此靈場も又人しらざる事の歎かはし汝願くは此處に堂舍を建立し觀世音を本尊とせば女人をも參詣なさしめ濟度有緣の靈地となるべしかゝいふ我こそ當山鎮守新羅明神なり智證大師と約束せしも我なり必ずうたがふ事なかれとて老翁は見えずなりたまふ

此新羅明神と申は智證大師いたつて信じ給ふ所なり智證大師入唐あつて歸朝のとき天安二年六月八日酉の刻商人季延が舟にのり歸帆ありしとき同月十八日なり白髪老翁海

上に現給ふてわれは新羅明神なり和尚の教法を守り慈尊の出世にいたらんといひをはつて見えず御歸朝あつて入洛のとき又も神現し給ふ敕使鴻臚館にをさむ後三井寺の北の野にうつす

敕待和尚はまさ〳〵御信仰ありて御告にまかせて今の所に堂を建立し觀世音をうつし奉り有緣の衆生を濟度し給ふ事とはなりぬ開眼の御とき三度御習ひを申約し給ふ正眞の觀世音今に奥の院にましまさば女人は拜たてまつる事あるまじきに新羅明神と敕待和尚との御誓にて女人まで參詣なしぬる靈場とはなりぬ

御詠歌

いづ入や波間の月は三井寺の
かれのひゞきにあくるみづうみ

いづ入やといふは人間生死無常をいひたるなりいづとは出るといふ事入るとははいる事なり百人一首のうち蟬丸のうたにも。是やこの行も歸るもわかれてはしるもしらぬも逢坂のせきとあるこれも行は死してゆく歸るは生るゝなり死するものあれば生けるものあり知るもしらぬも同じ道にてあふといふをあふさかの關とよみしなり百八ぼんなうのねむりの夢をさまし極樂淨土にいたるところは夜の明たるが如しといふ心にて鐘のひゞきにあくるうみとの御歌なり

三井寺鐘の由來

此鐘の由來をたづぬるにむかし俵藤太秀郷といふ武士あり藤原房前公より六代の孫村雄公の子なり和州田原の郷を領すよつて俵を苗字とす朱雀院の朝に平將門を討はらぼし鎮守府將軍に任せらる其先延喜八年の頃江州勢多の橋に恐しき物出て往來の人を失ふかるがゆえ是を恐れて貴七つを過れば通ふものなし藤太此由を聞て往來のさまたげなすものは差置べきにあらずとて弓矢をたづさへ勢多のはしにうち向ふこの勢多のはしといへるは江州琵琶の湖の流わたり二町のところに中島あつて橋を二つに切て掛わたしたるなり秀郷は此所にいたり橋のこなたにむかふをきつと見やりけるにあやしの物見ゆとて小橋をわたりよく〳〵見れば尾先は海にあつて胴は橋のうへにわだかまる頭は欄干の上にあつてさも山の如なる大蛇なり扨も是にてあるべし諸人恐るゝ事道理なり去ながら何程の事か有べし爰に來て歸るべきにあらずと大蛇の脊中をしたゝかに蹈ちらし飛越ゆき給へば色青ざめたる男一人跡より來り聲をかくる者あり秀郷ふりかへり何事ぞと問ふに彼男近より天晴たのもしき御

人かな大蛇と見せしは則我なり此ごろかたちを大蛇と見せ往來の人をためし見るためなり其元はどの大丈夫の人を見ず去によつて折入て御願申度事の候我は此橋の下海底にすむ龍神なり我に威をあらそふ敵あり其敵といふはるか向なる三上山七巻半まとひし程の大百足なり我が龍宮城を切りとらんとときく龍宮城におし寄る我等が眷屬これがために命をうしなふ事かずしらず良もすれば身方負色をあらはす是に苦しめらるゝ事多年なれば何卒よき方人をまうけ此敵を退治せんと思ゆゑ斯のごとく計りしなり君に増たる武勇の人なし身方となつて此敵を亡してたまへとありければ秀郷はいと安き事なりと諾合ければさあらば我が住城へ案内申さんと勢多の橋詰より海底へ入り龍宮城へ案内ありて龍神さまゝゝと饗應しさて夜に入ければすはや敵來りたりとて城中大にさはゞ秀郷いかなる者にやと見やり玉へば數萬の松明ともして押よする體なり秀郷心中に八幡宮を念じつゝ弓矢をもちて打つかひねらひすまし是を見るに松明と見なしはむかでの足のひかりにて眞先なるは頭なり得たりかしこしと頭上目當に切て放つ矢ねらひたがはず頭上に丁とひゞくと見なしが矢竹ははるかに飛散たり秀郷うちうなづきさては年ふる百足なれば鐵石の如く矢を請ざるも理はりなり實心付たる事こそあれ人間の唾はかれが爲には熱湯同然ときけりかのれ秀郷

が矢先をのがれたること奇怪なりとて二の矢尻をよく〳〵ねぶりてきり〳〵と引しぼり岩をも通れと切て放せばあやまたず百足の頭上をすぱと射ぬきたりさすが年経し百足といへども何かはもつてたまるべき數萬の松明と見ゐし足のひかりもみなことぐ〳〵消はて〻百足は終に亡びにけり龍神大によろこび百味の饗應をそなへて厚く悦びをのべ現當二世を謝せずんばあるべからずとて米を入たる俵一つと卷絹一疋又天竺の祇園精舎のつりがね一口秀郷へ送ける此卷絹はつかふに盡ることなく米もまた其ごとく盡ることなしこれを現世の謝禮とし又釣鐘は釋迦如來の天竺にて說法ありしとき說法の初めに羅漢たちをあつめ給ふ鐘にして此鐘の音をきくものは百八ぼんなふのねむりを覺し極樂往生を得る鐘なれば是を後世の爲にとて送るとて脊屬をしてもたせ瀬多の橋詰まで送らせらる去程に秀郷はかの米と絹とを家に納め釣鐘は三井寺へ送り給ふ此鐘の音は諸行無常とひゝきて眞に有がたき鐘なりよつて御詠歌にも鐘をはめてよみ給ふしかるに治承の頃高倉の宮御叛逆ありて源の頼政を御頼みあり比叡山三井寺衆徒ども御味方に加はり平家の一門を亡ぼさんと御企ありしに此比叡山の衆徒らうらがへりて平家に組しける故に奈良法師を御頼あるべしとて御幸ありしに宮五六度まで御落馬ありしゆゑ宇治にしばらく御座を居られしに流矢にて隱させ

玉ふよつて頼政も自害してうせぬ三井寺法師はひゑい山の坊主等平家に組せし故高倉の宮かくならせ給ふゆゑ其意趣をはらさん爲にゑい山に攻登らんと企つを山法師ら早くも聞付にくき三井寺坊主どもの申條かな其儀ならば此方より攻落せよと一山三千坊の法師ら牒し合せ押よせしが三井寺は小勢といひ不意を討れてうちまけゝれば比叡法師等火をかけて三井一山を燒はらひ此つり鐘は祇園精舍のかねなればとて法師等奪ひ歸て叡山の大講堂前に釣おき永く一山の物とせんとて衆徒等綱を付て叡山へ引ずり登る其とき鐘のいぼことぐくすれ落けるが難なく引上て大講堂につりて是きけがしにつき鳴すに只土をつかねしごとくにて鐘のおとさらになし衆徒等大に腹をたて鳴ぬとてならさでやはと大木をつぎ木として數十人力をきはめて撞見るに鐘の音はいでずたゝうなる計にて其音三井寺へ行かふくと人耳に聞ければ衆徒なはさら腹たてゝさあらば三井寺へ戻せよとて無動坂よりつきかとせば凡百丈計の谷へ落て其とき破鐘となりたりける三井寺の法師等名鐘をすてん事を歎き拾ひ歸りて臺にのせ置しがそれより夜ごとに小蛇來りてかねのぐるりをまはり破たる處を頭もてすり付〳〵たりしが年をへて破目ことぐ〳〵癒合て元のごとくに成たるこそふしぎなり今に破たる跡はのこりたり

いにしへにかはらざりけり山さくら花はわれをばいかに見るらむ

すみなれしわがふるさとはこのごろやあさちがはらに鶉鳴らん

ながむれば心の底ぞすみまさる三井の清水にうつる月かげ

○十五番　山城國洛東今熊野

人皇七十五代白河院の勅願所なり御白河院法皇御持病に御頭痛まし〳〵殊に常體の御惱にあらず御后方かはるゞに御頂を撫さすり奉り兼て諸寺諸社へ御祈禱仰付られ且は典藥の頭らさまゞに御療治成たてまつるといへども更に驗なし是によつて法皇おぼしめし給ふには今朕一天萬乘の位にあつて尊きこと又類ひなしといへども此頭痛はこれ前生の業病ならんさらば熊野權現に立願すべしと思召たてられ紀州熊野三所權現へ御參詣あり朕今王位に生るといへども癒がたき頭痛の病ありこれ全く前生の業因ならんと思ふ三世兩違の釋迦如來も持病ありときけば朕にも業病あるまじきにもあらず三所權現の御力にて持病平癒なさしめ給へと深くも念願なし給ひければ權現の御夢に今主上頭痛　御惱はまつたく業病にてはましまさず前生に障あるが御故なり君御前生にては蓮花坊と申す修行者にて諸國

をめぐり給ひしその功力によつて今かゝ王位をふみ給ふしかれども蓮花坊にてましゝけるとき紀州岩田河にて死す所の者どもあはれみ川邊に埋葬なしたるが年月を經て其骸を川岸にあらはせしに其髑髏より柳生出て今は大木となる其根かのどゝろを貫く風吹たびに木動き根にひゝくことゝ今の肉身の頭にこたへ御頭痛となる今此柳を伐て十一面觀音を刻み根を掘せ給はゝたちまち御平癒あるべしとの御告なりこれによつて紀州岩田川の柳を伐て根を掘らせ給へば頭あり 則 法皇へ御覽にそなへ 奉 りければふしぎの前生の我頭を朕見ることよ今かゝ王位にそなはるも則 前 生の恩なり然れば頭痛の有べき道理なりとて前生の頭を錦の袋へ入て院の御所に置給ひ大木の柳をもつて觀世音の御像を三千三百三體を御刻みあり御本尊の胎內に彼頭を納め給へば御頭痛平癒ましゝける此故に大佛三十三間堂を建立ありて頭痛山平癒寺蓮華王院と名付給ふそれより法皇は熊野權現に御願わつて都のうちに靈場あらば三所權現をいはひ込たてまつり熊野へ參る心にて參詣申たし何とぞ都にて靈場をしらせ給はれと御願有ければ都の東南に弘法大師の刻みたまふ十一面觀世音あり是靈場なり此觀音へ詣玉はゝ熊野へ御參詣も同じ御事なり三所權現の社も建させ玉はゝ我影向なして守り 奉 らんとの御告なり御歌に

道遠くとしもやうゝ老ぬれば思ひおこせよ我もわすれじ

と詠じさせ給ふ法皇夫より都の東南を御吟味ありしに今の今熊野の觀世音は弘法大師の御作にて是を權現の御告にてわたらせ給ふ尊像なりと御よろこび淺からず權現の御社も御建立なりていはひ込給ふ紀州熊野の土をはこばしめ地形六尺つき上させ給ひぬこれ熊野同然なればむかしの熊野にかはる事なきの御詠歌なり

御詠歌　むかしよりたつともしらぬ今熊野

ほとけのちかひあらたなりけり

昔よりとは生々世々のむかしの事にてたつともしらぬは觀世音のこれはどまでありがたき御ちかひある事をしらずして居たる事よまた知りたりとも大六天の魔王にさまたげられ迷ひゐて參詣も得せざりしがむかしより大慈大悲の尊き事ありとも今まで心付ず今ぞ御惠みの深き事をしりて見れば御佛の御ちかひあらたなるといふ御歌なり信心出るとも魔王のさまたげにて信心の道ゝらゝなり成佛せず其魔王にさまたげられんとするとき急ぎ心を取直し踏留るべしこれは常に觀世音を信ずれば自然と其とき心付なり是が 則 觀世音の御利生

にあづかるといふなり

○爰に三條の齋藤左衛門尉諸高が子に齋藤瀧口とて内裡の武士たりしが東宮の帶刀に補せられ又院の御所へも參りぬその頃建禮門院と申は平相國清盛公の姫君にて高倉院の后なり此后の御内に横笛といひて十六才になる仕女あり瀧口といつしか馴そめ人しらずかたらひけるを父左衛門きゝ付これを制しければ瀧口世をあじきなく思ひ親にちかひをたてゝ嵯峨野の奥に行出家をとげて籠ける横笛この事を聞てあるにもあられで尋行けるに瀧口入道相見たれば飛立思ひなれども親と仏にちかひし事もあれば心づよくも出合ざりしかば横笛はこれをうらみ桂川に身をしづめ死たりける入道これをあはれみその亡骸を荼毘し骨をひろひて高野山へ登りて骨ををさめ出離のさまたげとかもひて

何事もしらで登りし高野山戀も無常のたねとなりけり

○また加藤左衛門重氏入道してかるかや道心と號す法然上人の弟子となり心をすまし居たまひしが妻子これをきゝ都へたづねのぼりしかば高野山にあとをかくす石堂丸あとをしたふて高野へ分のぼりたづね合といへども名乘りあひ給はずこれ等みな妻子のせ

よひに引もどされんとせしも觀世音の御利生にてまよふ心の出ざるはありがたかりし事なりけり

○十六番　山城國洛東清水寺　音羽山と號す

檀主は右大將坂上田村麻呂なり沙門延鎮はもと大和國小島寺に居給ひてふかく觀世音を信仰し給ふしかるに觀世音御夢想に正眞の觀音をかがまんと思はゝ山城國愛宕郡へ行べしとの御告により木津川にいたり見るに金色の光明流にあらはるゝをしるべに尋ね上りたる（是今の音羽の瀧也）それより山によぢのぼり給ひしに山ふかきに柴の庵あり見れば白髮の翁居給ふ延鎮を見てめづらしや延鎮汝をまつ事年久しと見も知らぬ翁の我名をしるは唯人にあらじといかなる翁にてわたせら給ふ御名乘下されかしと問ふ翁こたへて我は行叡居士なり此山に住て汝を待こと既に三百年におよび今逢ふ事のうれしさよ此所こそ觀音薩埵の靈場なり又こゝにある此柳は七佛出世のいにしへより繁茂する處の楊柳なり汝此木をもつて千手觀世音を彫刻し堂宇建立あるならば末世廣大の靈場たるべし且今日より汝にこの庵をあたへ我は猶東國を濟度せんと早立去んとし給ふに延鎮しばしと留め給へどもいやとよ只獨生獨

死獨去獨來皆同とふり切て音羽山の上に行給ふ延鎮はいづくまでもと御跡をしたひ行んと追かけ奉るに今の牛尾山にて居士跡を見かへり給ひ汝これより歸るべし堂塔建立は時きたつて大旦那あるべしと宣ふとおもへば白雲おこり居士を引まとひて東をさして飛去し其御あとに沓かたしのこりたりこれ今に牛尾山の寶物たり延鎮庵にかへり朝暮千手だらに観音の尊像を作りたまふ三年三月にして観音の御像成就し堂建立の施主もがなと待たまふ所に其頃都に坂上田村丸とて帝をい設しおはします是を田村將軍と申なりある時ゑぞが島より都へせめ來る事あり田村將軍に征伐の勅諚ありければ常に觀世音を信じ給ふがゆゑ勝利を得て歸朝し給ふときに將軍の奥方懐妊ありしに十月もすぎ十五ヶ月に及べども出生なければ將軍ふかく案じ給ひ唐土より來りし醫師に見せ給ひければ是は懐腹といふ病なり女鹿の生膽をとり藥に加へ呑せ給はゝ平癒あるべしといふ故に將軍自から鹿を射んと音羽山に入て狩し給ふに女鹿一疋もあらず猶奥深くもとめ給ふに延鎮が庵を見給ひ怪み給ふに延鎮も將軍の狩装束のいでたちを不審なしてこはいかなる御方にて此處へは來り給ふぞと尋給へば我は坂上田村丸といふものなるが今此山に狩して思はずもこゝに來れりもとより我狩を好み無益の殺生を樂にはあらず我妻懐胎して十五ヶ月に及ぶとい

へども出産なし唐醫のいへるは女鹿の生膽を取て用ひよとをしへにまかせ狩する處なりとかたり給ふに扨は田村將軍にてましますかやしかし君の御言葉とも覺ぬ仰かなたとへいかなる名醫の申たりとも出産の御爲に生を殺し給はん事佛神の冥加はかりがたし願はくは死を助けて觀音大悲を仰ぎ給はざるや將軍うちうなづき我も其事を思はざるにはあらざれども いかんせん其人なきを貴僧もし法力にて此事なし得たまはゝわれ又法恩のため此處に堂宇を建立すべしとのたまへば延鎮は居士が大旦那を待と宣ひしは此將軍の事なるべしと心中に肇くおぼし安き御事なり觀音大慈大悲の誓願いかでか空しかるべき一七日が間に御平産あるべしと夫より延鎮大悲大士に祈念し奉るは何卒將軍の妻室安々出産なさしめ給へと祈願をこめ給ひしかば大悲の瑞驗あらたにして第三日といふに安々と平産なし給ひとさら男子出生なし給ふ將軍御夫婦の御悦びなゝめならず早々音羽山延鎮の御元へ注進すべし我もつゝいて參詣し大悲に御禮なすべしとやがて延鎮が庵にいたり有がたき觀音の御ちかひと申且は貴僧の法力にて安産ありし事の 柔 さよさらば御禮のため七堂伽藍早々建立すべしさて御堂は何れに建べきや延鎮御坊御さしづ有べしとなれば峨々たる岩石のみの山中なればわづかなる堂だにも立べき地なければいかゝせん行叡居士も爰と仰もあれば是

觀音のさし給ふ地も同じければ替なば御心に叶まじ此上は觀音の御さしづを請べしと延鎮田村麿諸とも大悲の御前に通夜なして堂宇の地をうかゞひしに其夜も深更に及び俄に黒雲一山を覆ひ震動する事おびたゞしくこはそもいかにと思ふうち一天晴わたり夜もほのゞと明ゆけばふしぎなるかな岩石こと〴〵くいづ國へか拔出けん忽ち平地となりしは全く天神地神のなさしめ給ふ處なり田村麿信心肝にめいじ本堂伽藍善美を盡して造立なさしめ本尊千手觀世音脇士に勝敵毘沙門天と將軍地藏尊を安置し奉る今の奥院の地は則延鎮が庵室のあとなりまた脇士に毘沙門地藏を安置する事は蝦夷の千島高丸といふもの軍勢を催して日本を切しながへんとせし頃勸請ありしなりこの千島といふはえぞ松前の外八百八島ありて禮義もなく親子兄弟の分ちもなき國なりかるがゆえたゞ力量武勇のもの大將となりいづれも島人大男にして力も又つよし其内にて大將となる高丸なれば脊の高さ一丈二尺力は千斤のかなへを自由にしいかれるとき頭髪甲の鉢をつらぬきける程の者ゆえ八百八島の大將と成たるなりこれまでえぞより度々日本をしたがへんとせしかども神國佛智に叶はずして敗北におよびしが此度高丸うつてのぼるに帝驚き給ひ田村將軍に高丸征伐を勅せられ蒙古の賊黨一人も日本へ入べからずとの勅命ある田村丸は武士名き其中にえらまれ節

刀をたまはりければ面目かぎりなくたとへ高丸强將なりとも勅命を頭にいたゞき麓にせんと勇み給ひ則延鎮僧都のもとへ行給ひ此度征伐せんとする處の賊將中々剛敵なれば一方ならざる相手なり何卒大慈大悲の御惠をかうふらずんば叶ふまじひとへに貴僧の丹誠を願ふ處とありければ延鎮はいかにも心安かれすこしも憶し給ふべからず大慈大悲の觀世音を念たてまつる者ならば剛敵の奴原何萬人せめ來るとも亡さんことくびすを廻らすべからずとありければ田村丸大に悦び頓てうちたち東へさして進發ある延鎮は此度田村丸勅命を蒙り高丸を征伐の爲に發向あるに依て大悲の御ちかひ佛法應護の力をそへ怨敵退散なさしめたまへと黑き汗をながして火水と成て祈られける高丸は奥州南部仙臺白河をうち越てはや駿河國富士のすそ野清見が關までよせ來り百萬餘騎とぞ聞えけり賊徒のいきはひ西にむかふ田村丸が軍勢三十萬餘騎すでに清見が關にて兩勢出合たがひに陣をかため翌日にいたれば高丸陣より熊のごとき髮髭ながきものをどり出これは高丸が軍勢の内に名を得たる者なり都よりの官軍の大將は何といふ人なるぞ名乘申べしと呼るにぞ田村將軍これを見てそれうち取よと下知あれば敵味方入亂せめたゝかふに高丸は四方八面にきつて廻る其いきはひ魔けい修羅王のごとくあるひは夜叉のあれたる如く官軍すこしまけ色になり戰けるに

田村將軍都清水のかたに向ひ觀世音を伏をがみ田村が勢を應護ましまして勝利得させたび給へと心中に念じ給へばふしぎや都の方より紫の雲矢を射るごとく〳〵に來て將軍の旗のうへに留り觀世音光明を照し給へば蒙古の夷この光りにて毒氣に當りたる如く今迄勢ひきつて戰ひしに忽ち暉勢みだれつゝすでに負色に見ゆけるにぞ官軍は機に乘じ戰けるが旗の上には觀世音大悲の弓に智惠の矢をつがひ蒙古をめがけ射給ひぬ又毘沙門天に地藏尊はこゝに瓢はれかしこにかくれ敵の射かくる矢尖をうち拂ひ〳〵し給へば味方一人も手負ものだになし田村丸は佛神の應護と見るより猶もはげし〳〵下知なして敵陣に討てかゝればさしも名を得しあらゑぞの者どもゝ神佛の威力かなひがたく逃足出して逃れんとするを田村丸は大音聲にてゑぞ人一人も入れまじとの勅命なれば一人も助け歸すべからずとのたまへば我も〳〵と進んで討すて蒙古の軍兵百萬といへどもことゞく打取給ふこれ神佛應護の戰ひ勝利を得夷敵退治し御歸陣あり此たゝかひの有さまをゝはしゝ帝へ奏聞ありければ延鐘を召れかゝる奇特も有べきにやと勅問あらせ給へば是は全く田村將軍の信心深きが故觀世音又は脇士の二尊應護による處と申上られしこれより毘沙門天地藏尊を兩脇士に安置し奉る處にして今も其驗あらたかなる事よく人のしる處なり

○謠曲に田村將軍勢州鈴鹿山にて鬼神を退治ありしといへるはつくり物がたりにして則ゑぞの高丸を退治ありし事を符會せしなり又すゝか山に鬼のすみたる岩窟ありてれも後人の作りたるものなり尤田村丸のときより六百年ばかり後に伊勢國に長野伊勢守といふ大ありしが其家妻に狐つきてさゆゝくともちあつかひけれどもとかくに狐のかず其ころ都の紫野に一休和尚のおはしますを聞つたへてこの事をねがひけるに元來氣のかるき御出家なれば其まゝその使者と同道にて伊勢にくだり妻女のやうすを御覽じ是は今まで加持の仕やうあしきゆゑなりいで〳〵われら祈禱して狐をのけやらんとて妻女が黑髮を手にまきて己れにくきやつかなちく生の身として佛體を得たる人間をくるしむる事甚もつてふとゝきなりたゝ今たち所にたちさるべしいよ〳〵のかざるに於ては天福地神冥官に申付ながくなんぢがけんぞくにいたるまで畜生道を免がれざるやうにすべしいかに〳〵とせめ給ひける此一休和尚と申すは後小松院の皇子にて名僧にておはしませばいかなる惡狐も恐れをなしたゝ今たち去るべしとて一間のうちをかけまはりてそのまゝ僵とたふれければ狐はたちまちのきにけり斯て妻室は正氣になりければ和尚は外に用事もなしすぐに歸るべしと申されければ伊勢守よろこびに

たゞす御禮として金銀卷物などゝびたゞし〳〵取揃へ奉るに一休のたまふはわれ出家のことなればかやうのもの入用はなし又人につかはすこともめんどうなりとて一品もうけずして返し給ふに伊勢守いや〳〵さにては我が心もすまずさらば都へ送りて御弟子がたへ成とも遂り申さんとて長持に入て和尚を送りかへし家來鬼丸といふ力量あるものを宰領に付て登されけるすゝか山まできたりて鬼丸ふと思ふにはいらぬといふ出家に無理にやる事もいらざる事なりさらば是をわがものとなして遣んと思ひ一休和尚に向ひ和尚を今殺し申すかくごあれといふ一休ばすこしもおどろき給はずそれは何ゆゑぞされば御身いらずといふものをわざ〳〵京都へおくらんよりわれうばひ取んとすしかれども御身京に歸りて人にかたらば六かしかるが故に御身を殺し申なりといふ一休それは心得ちがひなり我命をしむにはあらねど我がはしと思はざるものを汝とりたりとも何が故に人にかたらん有て邪魔なるもの汝取らば我は幸なりさすればわれを殺にも及ぶまじ其まゝ汝につかはすゆゑ心おきなく持行べしとふたゝび見かへりもせず悠々として歸京あり鬼丸も其道心に恐れふたゝび殺害せんともなさずかの金銀を奪ひとりすゝか山にかくれそれより手下をあつめ强盜となりしより人おそれをなし七つすくればすゝか山を通る人なく山上に鬼すむといひふらせし事ありこれを田村將軍鬼丸退治に附會せしものにや

附言一休和尚御一代の事をくはしくしらんとならば一休諸國物語圖會といへる本五冊あり和尚御幼年より御終焉まで諸人を教化ありし事ども狂詩狂歌等を取まじへあるひは五戒の御說法など目前に見るがごとしくはしくあらはしたるいと興ある本なりよみて見給ふべし

○清水寺といへるは靈水山上より涌出して四季增減なし故に清水寺の號あり又田村丸この觀世音の利生によりて數千度のたゝかひに一度も敗を取たる事なきは全く大悲を尊信し給ふが故なり田村丸は坂上宿禰苅田麿が男とあり身のたけ五尺八寸胸の厚さ一尺二寸目は鷹の目のごと〳〵身の重さ三百斤また輕からんとすれば六十四斤となりいかれる時は鳥獸もおそれまた笑ふときは兒女もなれしたしむといへり

愛に平家の士主馬判官盛國が子に主馬八郎左衛門尉盛久といふ士有平家の士に名を得し蛭波瀨尾上總五郎兵衛惡七兵衛景清なんどゝ同じく世にしられたる者なり　〻普門品日〻三卷づゝとなへ清水寺の觀世音をしんぐする事年久ししかるに平家の一門武運つきて

木曾義仲のために都を追おとされ檀の浦へ落行しを又義經能賴にせめたてられ二位殿建禮門院をはじめ奉り一門の人々のこらず西海の波にしづみ給ふしかるに上總景清盛久は命ををしむにはあらず主君の仇を報はんと戰場をさりぬけ盛久は都北白川に隱れ夜々白川より清水へ日參せりこゝに都に有しときしたしく召つかひし女ありしが北白川盛久の隱家へたづね行きうつり替る世とは申ながら平家の御内に於て世にしられ給ふ御身のかゝる人目をさへしのび給ふことのいたはしさよと折々は音づれ來りけるが盛久も世に有しときは數多召仕ひし者の誰一人尋ね來る者もなきに女の身ながら舊恩をわすれず問來る事こそ嬉しけれと又なきものに思ひあたり扨も鎌倉には賴朝卿平家の一門もしや殘黨の隱をぬらふ者も計がたしとて檀の浦にてのあらまし吟味あるに名を得たる景清盛久等が生死定かならざりしかば彼等は末々當家に仇をなさんもはかり難し尋出すべしと京都の守護北條四郎時政に仰付らる時政畏りて盛久が在所注進する者あらば褒美として黃金十枚遣はすべしと辻々に高札を立置しかばわれ人これを評判して盛久の在所しりたらばとき金をもうくる事なりけりとり〳〵噂なしたれども誰もそのあることをやしらざりけん訴出るものもなかりしが爰に彼女この事をつたへ聞つ〳〵と思ひけるは其いにしへは恩を蒙たる主君なれどもいま

は天下の尋人なればよしや我は隱しつゝひとも終には尋ね出されなんとて黃金に心がはりしていそぎ北條の館にいたり盛久が北白川に隱れ住るよしを注進す時政いかなるときにて賤しき女の彼者をしりたるやとあるに彼女答へて我は盛久殿世に有しとき召仕れしものゆゑ此頃北白川に行て物がたりなどし夜々毎に清水寺へ參り給ふ事をさへよく〳〵承り候といふに時政かの女の不忠不義をにくみ思はるれども高札の表いつはりがたしと則黃金十枚を與ふるに女は大に悅びて歸らんとするを夫と下知して取て引伏せ高手小手にくゝし上げ高札のごとく褒美はつかはしたりさりながら己は主人の舊恩を黃金のために忘れ訴人したる段全く主殺しの科のがれがたしとてきびしく禁獄なさしめ扨子息江間小四郎義時をよびて盛久討手をいひつけしかれども北白川にて捕へんとせば中々たやすく搦がたかるべし幸ひ夜々しのびて清水へ參詣する由なれば下向をまちて廣道にて不意をうつて生捕べしと下知なせば義時畏りて猶謀を考へ合圖を定め十人二十人こゝかしこに伏置て盛久がそしと待ところに盛久はかくとも知らず清水寺より下向する處を一番の組子ばらぐゝと取卷たり盛久は早くもさとり松の大木をこだてとしいかに汝等平家の士主馬判官盛久を召捕んためなるべしわれと思はんものはかゝれ〳〵と罵たり義時すゝんで盛久にむかひ汝い

も北白川に隱住こと注進の者あつて慥にしるたとひ此瘍は切ぬくるともいつまでのがれ果べきぞ江間小四郎義時がむかひし上は敵にとりても不足もあるまじとさとすといへども大望をいだける盛久有無の問答にも及ばず爰を切ぬけんと千變萬化すれども合圖によつて三百餘人水をも洩さじと取圍めば盛久終にたゝかひつかれ無念ながらも搦られけり則鎌倉へわたされければ頼朝公は御前へめされいかに盛久平家の一門かく成果し事これ頼朝がなす業にあらず平家の一族奢に長じ王位をかろんじ擧るより天命しからしむる處必頼朝をうらむべからず深に汝は名を得し侍何とぞ頼朝に仕へて俱に國家を輔佐なさんとならば我も滿足たるべしと宣へば盛久は頭を上げ是は思ひもよらぬ仰かな忠臣二君に仕へずいかでさる事のなし得べきやと堅く申放ければ則土屋三郎宗遠に預けられ度々土屋を以て奉仕の事を勸めさせ給へども忠臣無二の勇士なればかつ不通承伏なさで早く首をはねられん事こそ御慈悲なれとて仕るけしきあらざれば此上は是非なく明日由井が濱にて誅戮すべしと仰あるされば翌朝由井が濱へ引わたすに鬼神とよばれたる盛久を見んとて鎌倉の人民われも〳〵と見物す盛久敷皮の上に押なはれば太刀取には土肥次郎眞平檢使には梶原平三景時なり盛久は土屋宗遠および土肥梶原に厚く禮義を述申けるは某日頃京都清水寺觀世

普を信じ毎日普門品三卷を讀奉ることおこたりなししかるに今曉より早く是へ參る道すがらはよみ終りたれども今一卷生前によみ終りたししばしの暇をたまはれかしといふに三士も殊勝におもひ皆々聽聞いたすべし心しづかに讀誦あれといふに盛久眼を閉て普門品一卷讀上る事常の音聲にかはる事なし既に誦し終れば三拜をなし居直る處を太刀取土肥眞平は後に廻り太刀ふり上げ丁どうちける處に西の方より光明くわつとさすぞと見にしが土肥が持たる太刀鍔元より三つに折て盛久が身には恙なし是は普門品の中に刀尋段段壞とある處にして罪を滅し三罪におよぶといふとも太刀段々に折て助るといふ事なり盛久は末期にいたり未來をたすけ給へと讀たるなれども多年鐵石のごとき信心なれば斯のごとく劔段々に折たるにうたがひなしかゝる處へ秩父重忠早馬にてかけ來り聲をかけ盛久が誅戮しばらく待れよ君より仰ありとよばはり〳〵矢來のうちへはせ入て頼朝卿の御教書を出し盛久が斬罪今日の處延引すべしとて則盛久を召れて直々尋させ給ふ事あるが故畠山庄司をつかはさるゝところなりと有ければ今日の斬罪をとゞめすぐさせ頼朝卿の御前に召れけるが有難や頼朝卿が御臺所政子の前もろともに昨夜の御夢に年頃八十歳たけさせ給ふと見にさせたまふいと殊勝なる老僧香ぞめの袈裟をかけ水晶の珠數をもち給ひ鳩の杖にすがり立給ふをいかなる方ぞといふに我は都の東山に住ものなるが今度四人となりし盛久は常に觀世音を信じ歩をはこぶのみならず毎日普門品三卷を讀誦する事怠らず元來身に犯せる罪もあらざれば盛久が一命を我に給はちんとはるゝ〳〵都より來るなりと見し夢は我のみならず政子も同じ夢の告なり是まさしく清水寺の觀世音の盛久の命乞給ふと覺へたりしかる上は命をたすけ本知を返し與るなりとて紀州熊野の知行所を返し給ふ盛久も觀世音の大慈大悲かつは頼朝が仁慈を感じてふた〳〵び頼朝を恨みず舊領にかへりて朝暮大悲を尊信しけるとなり今に紀州の内に一村天領にも非ず領主もなく村中に一人の頭人ありて其村を支配なして俗に作り取といふ處ありこれ則盛久の子孫連綿する處といへり

世にかくてつながるゝ身も救なん生を放つ神の惠みに

○惡七兵衛景清は一の谷の合戰の場より一人あとを藏しこれまた盛久と同意にて亡君の仇頼朝を一太刀うらみんと鎌倉に徘徊して其便宜をうかゝふといへども日々に源氏の榮ゆく中々近寄事あたはず時に南都東大寺大佛殿三位中將重衡卿の燒亡されたるを此度頼朝建立あつて堂供養のため頼朝にも南都參詣ある由景清きゝて是こそ時節到來と先達て南都に上り七大寺の衆徒にまぎれて付ねらひける大佛殿供養の導師は前にいへる法然上人なり景

清は腹巻の上に衣を着し頭を袈裟づみゝにして衆徒にまぎれて頼朝の参詣をうかゝふ處にとにかく諸武士らに隔てられて近寄事の叶はざれば兼て用意せし半弓にて頼朝の廊下を通らるゝ處を丁と射る頼朝の運や強かりけん山門の棟木に磕と立つ景清歯噛をなして大衆の中へまぎれ入るゝハ紛れ者と警固の武士上を下へと返す處に四相をまとる秩父重忠密に大衆の中に入て腹巻したる大衆をうしろより確と抱き曲者を組留たりと呼るに景清も大剛力ふり性どかんとなすといへども重忠も坂東一の大力互に劣らじ負じと組合處へ驚固の武士數百人おつ取巻終に縄をぞかけたりける景清が射込たる矢の根今に殘りたりといふかくて景清を六波羅へ送られしに大切の囚人といひ殊に大剛勇のものなればと新たに厳重なる牢屋を立て手がせ足がせを入て禁獄なす今大谷の南牢の谷といふ處は則景清を入たる牢の舊地なりしかれ共頼朝ふかく景清が勇猛ををしみ給ひて志を飜して頼朝に隨順せん事を則重忠をもつて度々仰あるといへども二君に仕へぬ鐵石心これによつて是非なく其せゝさし置れけるが景清も日頃清水観世音を信じ普門品讀誦怠る事なしかるに牢の邊りを通るもの牢中をさしのぞき音に聞へたる景清も世の盛衰は是非なけれ今は禽獸にひとしき身なりとつぶやくを景清これを聞き口惜や身に一點り犯罪はあらねど亡君の恨をはらさん

忠志ゆゑ貫も大同前につながるゝ事てそ口をしけれ誠や日頃よみ奉る經中に杻械枷鎖即得解脱とある大悲の誓願空しからずば今一度景清が身をたすけ給ひて本意を達せしめ給へと高らかに普門品をとなふる處にふしぎやさしもきびしき手杻足がせかのれと拔たるに景清大に勇み仲助の空しからぬを尊み此上はとすくと立て牢の柱を一ゆりゆれば隅の八寸角にけづりなしたる柱はらく〳〵と拔てぐわら〳〵堂と崩れたり番兵どもこはいかに地震か雷かと驚く處を景清はかの角柱を以て薙たてく〳〵行程に誰かこれを遮る者もなければしづく〳〵其場をたちのきて又鎌倉に忍び入是非頼朝を一太刀と其便宜をうかゝひたりしかれども頼朝卿の武運朝日の昇るが如にて又もや景清鎌倉にて生捕れ頼朝の御前に引出されしかば頼朝仰らるゝはさしもの汝二度までも縄目を請る事は汝が運の盡たる處にして源氏の高運には及ばざるを知べししかれども平家のために斯まで粉身困苦して我をねらふ心ざし感ずるに餘りあれば此度もまた免すべし今ひとたび我をねらひて見よとて下知して縄をゆるし給へば此とき景清も發氣なせしや恐ろしき源家の高運かく迄ねらひまねらすれども本意を遂せざるのみならで御手に入こそふしぎなれ今曉し給ふ一言金言といふべし此上は景清が遺恨は散じ申べし去ながら平家の祿を以て成人し景清今さら源氏の榮を見るときは又もや懐

薗の聞といまりかたかるべしとて指頭をもつて兩眼をくり拔てかく盲目となる上は目に見ざれば恨もなしとて牛國日向なれば御いとま申うけ東國にかへり勾當と號し後には娘に逢て最期の節普門品を讀み頼朝卿の御前にくり拔し兩眼は御經より光明かゝやきて兩眼あきらかに見たりけるとなりふしぎに結構なる往生をとげゝる是觀世音の御利生なり

又楠正成も常に此觀世音を信じ奉られけるが或ときゝ千早の城を忍び出長崎勘解由左衛門が陣所の前をひそかに通られしを長崎が番兵見付一矢射かけしに正成の臂に當り南無三寶と矢をとり捨行れしに落付て矢の跡を見られしにすこしも疵は見たず不斷首にかけられし普門品を見られしに一心稱名といふ所に矢のたちたるあとありしはこれ觀世音の御利生ゆゑと感涙を流し給ひしとかや

○四天王寺の道に三年坂といふ坂道あり俗いふ此處にて轉ぶときは極めて三年のゝち死といふ大なるひがごとなりこれは産寧坂なり女の産やすき坂といふ事なり寧はやすしとよむ子安觀音馬といめすべて西門の中までをいふなり其由緣は聖武天皇の后光明皇后御懷姙ましゝければ皇后ふかく觀世音を御いのりありしかばある夜の御夢に老僧一人來り給ひ安産をいのり給はゞ此觀世音を深くいのり給へとて御長二寸の尊像を

あたへ給ふと見て御ゆめはさめたり御枕邊に黄金佛の觀世音御丈二寸の小像たゝせ給ふ皇后奇異のおもひをなし給ひ朝暮この尊像を尊信し給ひしが月みちていとやすくと姫宮降誕ましゝけり則孝謙天皇これなり皇后大悲の誓願をたふとみ給ひ禮謝の御ため一宇を建立し給ひ泰産寺と名號則本尊にはこの小佛を安置し給ひ六代安産の御佛となして諸人に結緣なさしめ給ふは有がたき思し召なりかるがゆゑ觀世音の左に皇后の御影をも安置せりかゝる尊き御佛のいませる道なれば一度此路をふみて祈願する女人はあんさんうたがひなしとて産寧坂といふなり

御詠歌

まつかぜや音羽のたきの清みづを
むすぶこゝろはすゞしかるらむ

この松かぜやといふは松ふゝ風はたゞさつゝと聞ゆれどもさとりの耳には觀音大悲の御説法の御こゑと聞ゆるといふ心なり何事も阿吽の二字にもるゝといふ事なし森羅萬象草木國土悉皆成佛ときゝ時は是みな佛體なり左すれば悟たる耳に聞ときは松風の音も説法の御聲と聞ゝ音羽の瀧の水音こゝろ清くすゞしゝ聞となり三毒のぼんなうに穢たる垢は心のよ

でれなり佛の知惠の水にてなければ淸くならず參詣をなし音羽の瀧の水を手に結び一口のめば心の垢もわらひ流しすいしかるとうんとの御歌なりまた瀧の水三筋に流るゝは中は利右は智惠左は慈悲なりこれを觀世音の一利智悲の三體とす今日凡夫いかなる惡人にても利智悲の三ッかけたるものなし盜して人を殺すほどの者にても三歳子の井へはい行を見てはあふなしとて脇へのくる心の出るは人間自然の慈悲なり又智惠といふものは見る物きく事に付て氣のすゝむものなり依て右の手が其ごとく何事をなすにも先にすゝむものゆゑ右を智惠とし左の手は何事にも納まり後よりあしらふが故に慈悲とす常に人をつかふにも心得違不調法もあればきびしく叱らねばならぬものなれども後より慈悲の心を出し了簡いたすは是左手のごとく依て三體とす又右はは.げしきゆゑ火とす左は水とす不動明王も右に利劒をもち給ふ左に念珠をもち給ふも皆此こゝはりなり如來の右手上給ふは天は三十三天までほんなふのきづなと智惠を以てなし給ふなり左は地をさし給ふは奈落のそこまで佛果をさづけ得さすべしとの御事なり觀世音は此瀧の水を一くちにても飲ものあらば身心まで淸くすゝしくなさしめんの御意なれば尊みて飲べきものなり

歌に

音羽川せき入てゝおとす瀧の瀨に人の心の見なもするかな

おとは川せき入し水に陰とめてひとのこゝろを月とみる哉

みそにのみ聞まじものを音羽川渡となしに見馴初けん

夕されは松吹かせの音羽川あたかもすゝし山の下かげ

○十七番　山城國洛東六波羅蜜寺

人皇六十二代村上天皇天曆五年建立なり六波羅蜜寺といふは七佛未來千佛の如來みな六波羅蜜を行ひ勤め給ひ佛となり給ふ自身佛とは我力にてなすには皆この修行をせねば淨法成らず三世兩遊の釋迦世尊でも此修行を成れたる事なり六波羅蜜といふは物ををしさといふを止め金銀財寶ばいふに及ばず何にも人の望はやる事なりかいこう蜜といふは戒をたもち修行する事なりにんにく波羅蜜とはいかやうの事にても腹をたてず精進波羅蜜とは修行怠なくつとむるをいふせんじやう蜜はたいくつせず修行するなり般若波羅蜜はぐちのまよひを止る事をいふ此修行この戒は中〳〵もつて衆生のたもちがたきが故に如來かぼしめしにはたい阿彌陀佛と申せよ成佛得させ助つかはすとの御本願なれば六波羅蜜の修行はい

らぬとなり六波羅蜜は修行の名なりさて開山空也上人は人皇五十九代宇多天皇の御孫にて六十代醍醐帝の第二の王子なりだいご帝は延喜帝の御事なり上人御誕生のときより不思儀なるは御初聲より始終あみだ佛〳〵となきたまふと聞ゆ弘法大師はあびらうんけんと泣給ふ是を夜なきといひ七里が聞たゝるとて置ず母君これをいたき所々方々と流涙ありてのち和泉國槇尾にまします櫛僧正と申高僧の御耳にはその子の泣ごゑ眞言だちにと聞なければこれ唯人にあらずとて母公にもらひて弟子とし給ふ後には弘法大師とならせ給ふそれにまさり空也上人は阿彌陀なりといふ御父帝思召ありて鞍馬山に御殿を作りて上人三才のときより置給ふに神佛應護し給ひくらま山の鹿狼のるゐ夜なよな御そばに集り仕へまゐらせ七ツの御としより出家とならせたき御望にて貴船明神へ御願を立られ何卒出家と成下さるべしと御祈ありしに明神出現し給ひ御殊勝なる思召なり御望にまかせ剃髪なさせ參らせんとの御夢見たまひしが覺てのち見給へば御剃髪に衣を着せられたりいとも有難く思しめし何事も皆空也とて自から空也と名のり夫より〳〵らせ毘沙門天に御願ありけるは我所々國國をめぐり念佛を唱へ歩行衆生を助得させたく力を添させ給へと祈誓し給へば毘沙門天御厨子より出させ給ひ有がたき上人の思し立かな我も力をそゑ參らせん是を念佛の拍子にし

給へとて金の鉢をわたし給ふ空也上人是をいたゞき六字の名號を紙にかき毘沙門天へさし上給へば鉢をもつて御受取あつて御厨子の内に入らせたまふ此鉢を阿字の鉢とて鞍馬山の神事に出る至つて大切の鉢なり空也上人は右の鉢をたゞき洛中洛外をめぐり給ひたいうかく〳〵らし居ものゝ耳に念佛の聲をきかせて佛縁をなしたまふ今に鉢たゝきといひて頭は俗にて衣を着し妻帶して町々修行す是は異形なるものなれども開山空也上人の御さし圖にて今にありこゝに又鞍馬山にて定盛といふ獵師あり手に鹿の皮をもつて獵に出けるを上人見給ひて物の命を取こと罪の第一なり其の上鹿は我寺を守護しつかへしなり旁ふびんなる事なれば今より殺生留るべしと段々と御示しありしかば定盛發氣して涙をながし最早殺生ふつ〳〵と止るべし御弟子となして下されよと持たる弓箭を打折しかば上人うれしく思召出かしたゝ.さりながら汝は妻を具したればこれを捨るは慈悲の殺生なれば頭をそらず妻帶なすとも心だに絆にひかされざれば佛道修行調ふなりと懇に教へ俗體妻帶のまゝ御弟子となるこれよりして今に俗體なる濫觴なり又瓢簞をもち又は敲く事は裏中夜毎に念佛修行するには寒氣をふせぐがため酒を入て定盛につかはされしによりてなりその後加茂明神へ御願ありて諸國濟度なすに應護をたれ給へと申させ給へば明神上人に御對面まし

まして鰐口を半分裂て上人へつかはされ是を打きて念佛し給へと申させ給ふ上人これをたゝき鉦を四十八願の數に合四十八挺をこしらへ給ふ鞍馬の毘沙門天よりさづかり給ふ金の鉢と打込て四十八の打鉦をなし給ふ今鉦を打念佛を申事はこの上人の御形見なり其故はみな是木火土金水の五つなり人に於ては心肝腎脾肺の五つ心は火なり其色赤く肝は木にして青く腎は水脾は土なり肺は金にて音を出す又四季にとる時は東は春にして木なり南は夏にして火なり冬は水にして北なり西は秋にして金なればこれ念佛の聲を出す西方を願に鉦たゝき念佛を申せば同氣相もとめ自然の道理なり上人かく心を込てめぐりたまふときに人皇六十二代村上天皇の御宇天暦五年の春疫病ことの外流行し人はもちろん牛馬にいたるまで死する事おびたゞしく既に國民の種を盡すべき程なれば帝も叡襟を惱ませ給ふ此ときに空也上人祇園牛頭天王に祈願ありけるは抑天王は疫神を司り給ひて放逸邪見のものに疫神を遣して罰し給ふと聞く此事紀三井寺の條にくはし今すでに人民これかため人種を盡さんとす仰ぎ願くはこれを救ふの術を示し給へと祈り奉らせ給へば天王御告ありけるは十一面觀音を作りて祈るべしとなりとつて上人清水寺へ籠り十一面觀音を刻給ひて病苦の者此本尊を拜むべしと御すゝめにて則觀音を地車にのせ市中を引廻り給ひ御香水にて御茶湯をのませしめ給ふに大

熱にてくるしむ者も忽にねつさめ全快なしける故貴賤群集して往來も成がたければぎをん石の鳥居のもとに本尊をすへ奉りこゝにて藥湯をいたゝかせ給ふ其ときの茶筌いま祇園の寶藏に納めあり其故をもつて空也寺より茶筌を出し又元日の茶筌冬より京町中へ賣出すはこの利益によつて年中の疫病を除くといへり疫病しづまりて萬民快樂のゝちかの本尊を六波羅野に一宇を建立して安置し疫病除の觀世音と稱稱し奉る處なり本堂の下には大般若六百卷を地に敷納あり今十七番の御本尊と申奉るはこれなり

○唐土にも多羅國といふくにゝて疫病流行のとき帝王歎き給へば十一面觀世音あらはれ給ひ我すがたをきざみて平癒を祈るべしとゝめるより高僧すなはち十一面觀音を刻し人民に拜せしむるにたちまち病者本快せしといふ和漢とも其御利益同じ

又空也上人は紫野雲林院の邊に住給ひある時十月の頃大宮通を下へ鉦うちならして御通りありしに白髮の翁さむげなる體にて上人の御そばへ寄る者あり上人いかなる人と御たづねありければ我は松尾明神なりと仰げるにいか成れば其御すがたにて是まで影向ましませしやと宣へばされば上我に神いさめなし呉るものは有とも煩惱の風をふせゞべき衣を一重あたへ給へと仰ければ上人衣をぬぎ給ひて此衣は年頃經文を讀み念佛を申籠たる衣なりとて明神へ上給へば明神御詣あつて上人かならず松尾へ來り給へ重ての對面をまつなりと別れ歸り給ふ其のち松尾明神へ上人御參詣ありしかば明神出させ給ひ神前の鰐くちをそばなる太鼓と上人へあたへ給ふて是をもつて念佛を弘め給へと御わたしあり是によつて松尾明神の御託宣にて神事には太鼓鉦をうち念佛を申なり今これを六齋といふ其鰐口は空也寺に納まれり上人は定盛が持たる鹿の角を杖の先にくゝり付てくらま山にてわれに仕へし鹿のばだいの爲とて一生これをつかせ給ふ此杖も空也寺にあり又松尾明神に鰐口なく神樂に太鼓なきは上人に進せられたるいはれなりしかれば神前にて念佛を申とも神慮にかなふなるべし上人は太鼓鉦にて月々六齋日とて所々にて念佛をひろめ給ふこれ月の六日八日十四日廿三日廿九日晦日これを六齋日といふ此日は常よりも善事をなして腹たつことなく慎むべし大事の日なりと善事をすゝめたまへり六齋念佛の初なり月々この六日は天より人人の善惡をあらためて帳面に記し閻魔王の御前へあげ置なり死てのち閻王の前にて此帳面をしらべて罪の輕重を糺さるゝなり又今生にては一切善心なく惡心放逸の者は十年づゝ命をちゞめ給ふなり上人には西山の邊にも住給ひしかども念佛をすゝむべき人の數少きゆゑ都の市中に出て一宇の堂を建立したく思召何方がよろしからんと御覽する處に三條櫛笥の

邊に紫の雲かゝり見えければ此所ぞ善き靈場ならんと堂宇をたて紫雲を其まゝ紫雲山とし極樂寺とぞ申ける後應仁の亂に伽藍こと〴〵く燒亡し今油小路四條坊門空也寺これなり此寺の鎮守は則松尾明神なり正法に奇特なしといへども又奇特なきにしもあらず大和國松室仲三といふ僧あり其人いまだ兒にてありしとき師匠北院空城僧都の御もとへ空也上人御越ありしにしばらしき兒いでゝ師の坊は留主にて候と申されければ上人仰けるには よくこそ御留主いたされし淋しからんと仰ければいかにもさびしく候といふしからばむかふに碁盤あるを取來られて巷を打申さんと宣ふに中々重くして持てざるよしを申さらば此珠數を上に置てもたれよとてわたされければ畏りて其盤の上に置てもちて見るにかるがると持來りけるとかや又内裏へめされてあがり玉ふときも常の御修行のまゝにて歩行にて參内し玉ふ道にて雨ふり出しけるに不思議や何國よりかは白鷺きたりて笠の如になり上人の上を覆ひ雨をふさぐ其時念佛を高らかに唱給へば御身より光明かゞやきて諸人ふしぎのおもひをなせり御晩年に及び奥州へ御下りあつて黑川といふ處にて御遷化なされしに香をたき給へば紫雲たな引花ふりねひるが如きの御臨終なり 則火葬し奉る其灰を以て上人の像をつくりて空也の御影と拜し奉る御歳七十歳御影は本尊の脇侍檀に御厨子に納奉る

又不尊の右にかゝら掛の地藏と申地藏尊あり

○此靈驗を尋奉るにある時夫婦に娘一人暮せし至てまづしき者あり夫とはわづかなるものを賣あるくといへども中々親子三人其日を過すことなりがたく家内道具一ッ賣二ッ賣今は賣盡しうるべきものもなくせんかたなければ夫の留守娘に向ひ申けるは扨々かはど迄つはしき身とは成り果るものかな我々二人の家にのみあれば一日二日は食せずとも忍ぶべけれども夫は外へかせぎそこ爰とあるき給ふ身なればさみしき腹にてかへり給はんとのいたはしく色〳〵と我が手立もかまへたれどもはや賣べき品なければ是非なく今思ひ溜りたる事のなければ必ず此事夫にふかく隱していふとなかれと娘に言ふくめ我が頭をすき上げ惜氣もなく根元よりふつとぎりそのかもじを賣代なし食をとゝのへ待居けるに程なく夫は色青ざめたる顔色にてかへりける此親子のもの常々地藏尊を信心すといへどもかゝる貧窮は地藏尊の御力にも及ばん御事っゝは我女房娘ながらもふがひなしと思はん耻かしさに我家ながら外へ行し如に腰かゞめ居ければ妻は商のなき事をさとり言葉やはらかに朝とく〳〵より出所々方々と歩きつかれ給はん商の少き日は猶つかれも多かるべけれども明日は左も有べからずと顔色を見て力をそ

へ嘸心さびしくおはさん先御食事あれとて差出しければ夫は驚き今日の八つ木の心當とても無はずなるにかくかまへられしはいかなる事ぞやもはや家内代なすもの無はずなりと不審しければ女房はとやかく言くろめ食事をすゝめけるゆゑ食しながらも米の出所合點ゆかず女房外へ出たる後にて娘を呼て尋ぬればとかくにわからず大に案じかく困窮にせまりぬれば二人が言合しもしや他のものにてもかすめ取もせざりしやと申ければ娘は言まじとは存ずれども餘りにうたがはせ給ふは是非なく母様の髪を切給ひそれを代なしとゝのへたる食事なり明日は我髪をきるべしといふを聞父は驚き涙を流し世にはさまく有といへども我身ふがひなき故に妻子をやしなふ事あたはず妻子にかみをきらせ煙の代になすべき事のあるべきやさてもくと我身のつたなきを恨みまたは妻子が髪迄もきり米代となす貞女の程うれしく過分さよと涙を流し申けるが夜に入妻子よく寐入たるに書置を認め其方事はつたなき我につれ添ひ居る故親子とも難ぎのかん苦たゑず貞心のほど生々世々わすれ置ず男の身として女房子をはぐくむ事あたはず耻入といへども今更せんすべなしなまなか我かくて有ならばいつを限りなき困窮ならんも計がたし我は一人なりいかなる人をも頼み世をわたり呉よかし出たる日を命日と思ひ回向をたのみ申なりと書殘し心づよくも出で行ぬ妻子はかくともしらず夜明是を見て驚きかなしめどもすべきやうなく女房は夫に別し歎き忘るゝ間なく終に病の床に伏ければ娘も今は袖乞となり母をはぐくみけるに程なく母死して跡に殘りし未だ十四歳の娘こそ不便なり父には生別れ母には死別れ便る力もあらばこそ誰たのむべき方もなければ母の死骸をかた付る事もならず歎居けるにかゝる處へしやく杖をつきたる出家出來り給ひ何をなげくぞとあれば娘申けるは御出家なればこそ御尋下さるゝ事のありがたさよ是は自らが母にて候が死申されしなり父にもわかれ貧しき上に母の死給ひしなきがらさへ葬むることならず頼とすべき人もなき身なりければかく歎き申なりと言ければ不便なる事哉氣づかひ致すな上我かた付て得さすべしと袈裟をひろげて母が死骸を包み腰帯にくるくと結出家の背中に負て其方も付て來れよとて鳥邊山の方に至り娘とゝもに其邊の木葉をすくひかい集め死がいの上につみ火葬となし夜もすがら經をよみ給ひ明方に骨をとり出し是こそ母が形見なり持行て回向すべし幼きものゝ不便さよしるべの者にてもあるやと仰ければ兩親に離れて知るべと申てはなしと申ければ然らば兩親の菩提のため又は其方の爲なれば佛の御恵みもあるべし我は

六波羅蜜寺に住僧なりと仰ければ段々の御慈悲に預りし御禮申盡しがたし冥加の御施物上たく思へどもなしがたし上べき貯へなき身に候へば仰にしたがひこゝろばかりの施物と思召御受を下さるべきやと申上げれば志ならば何にもあれ受んとあれば悦び懐よりはさみとり出し髪なで上て借氣もなく根元よりふつと切て差出す出家は是を御覽じて女の大切に思ひのばしたる黒かみを母の布施物にせよとて兩親がそだて延せしくろ髪にては有まじきによく〳〵兩親の菩提と思へばこそと涙を流し給ひ千兩の黄金にもかへがたき布施物なりとて悦び受給ひぬればあら有がたき仰かな自分も尼と成て西の間と申に少しのゆかり候得ば是を頼み修行に出たき望みにて候と申げれば扨も殊勝の心ざしなりとて出家はわかれ歸り給ふ鳥邊野の朝の風にちる露のふのが涙に數そひて立がたく思へどもかくてあられぬ事なればしは〳〵として立わかれぬかく迄厚き御情を蒙りし御僧に今一度御禮申上度とて又もたち歸り御跡をしたふて六波羅道へゆく先觀世音をおがみ父母の菩提を祈拜し御脇立の地藏尊を拜み奉つりけるに御手に持せ給へるしやく杖に生々しき黒髪かゝり有しが不思議なる事とおもひよく〳〵見れば正しく我黒かみなり驚そばなる僧にこの地藏尊のしやく杖にかゝれるかもとは前々

よりかゝり給ふなるやと尋ければ出家も是を見共に驚きまさしく汝が髪なるべしとあるに付前夜よりの御厚恩受し次第を一々語りければ扨も〳〵有がたやとて僧もろともに恐れをなしけるが娘な〳〵〳〵左やうの事とは存せずもつたいなや母が死體を御背に負せ參らせ鳥部野にて夜とゝも讀誦下されし事の冥加なやと地藏尊の御前を得もはなれざりけるとかや此事見る者きく者諸人此地藏尊の靈驗をあふぎ奉るとなり毎年七月廿四日御開帳なり

御詠歌

重〳〵とも五つの罪はよもあらじ
六はら堂へまゐる身なれば

おもくともといふは身の上なり朝おきるより寐まで罪をつくることのみなり世の人我は罪なしなどゝいふ者あり是どこからゆるして罪なきやいつ作ともなく罪のみ作る凡夫なり重き罪とは五逆罪をいへり是主人を殺し僧を殺人たるを殺は分て深し出家をそしり中言をいふは佛の身より血を流し給ふ親を殺ものはこの世にて磔刑にかゝり未來は奈羅苦の底にしづみせめを受て浮む世とてはさらになし劔を以てするはとの事はなさずとも不孝のものは

みな親を殺に同じ事なり殺せば忽我身罪に行るゝゆゑに我身のをしさに得せぬなりされば殺さぬとて其罪は同じ事なり不孝のものは五逆の罪に當る神儒佛何れも不孝のことあれば悪給ふなり六はら堂へ參り觀世音をおがむほどの者ならば八億四千の罪ありとも重き五逆の罪はあるまじ五逆の者はいか成佛ぼさつにても見捨給ふなり其餘の罪ありとも最期の一念に助給へと彌陀觀音を賴たてまつればすくひ給ふなり又我は五逆の罪にもひとしき罪ありとしるならば早々心をあらためざんげして善心にたち歸り彌陀觀音の御誓に預り度と歩をはこび拳れとの御歌なり

佛とは何といはまの苦むしろたい慈悲心にしくものはなし

西へ行心ひとつのちがはずば骨と皮とに身はならばなれ

○總門を北面なるは本朝にて當寺を初とす其故は人皇七十一代後三條院御宇治關白頼道公平等院を建給ひしとき總門の向きを降義し給ふ折節大納言公任卿參られけるに頼道公のたまひけるは此境地は東は川南は山西はうしろとなる北より外に總門をたつべき處なし北に總門ある寺や候と尋給ひけるに和漢の才にたけ給ふ公任卿も即答なかりしが大江匡房いまだ十二歳のとき同事にて參られたりけるがのたまひしは我朝にては

都六波羅蜜寺漢土にては西明寺天竺にては大那爛陀寺と申されければ實もさなり子細候はじとて北に總門をたて給ふとかや大江匡房卿幼より秀才世にたぐひなかりしとかや

○十八番　都六角堂頂法寺

六臂如意輪觀世音は聖德太子七世已前の守本尊なり三十二代用明天皇の太子なり七世前はしやうまん夫人天竺にては南岳大師日本にては聖武皇帝と成給ひ七世目に聖德太子と申奉る又八耳皇子とも其外御名かずぐ尊稱す御母皇后春の始なれば御馬御覽せんとて出させ給ひ御馬屋のほとりにて御誕生ありしゆゑ厩戸皇子とも申たてまつる西方阿彌陀如來の脇立救世觀世音御姿を隱し聖德太子と今世へ出させ給ひ佛法を弘給ふ御年十三歳に大和國豐寺を建立し給ふ夫までは大工といへども堂塔のたてやうも知らざれば御差圖ありて升がたなにかにいたる迄それぐの仕方また用べき道具をも皆々御教あり涙花天王寺に道具の名號ありこれにてしるべし甲斐の黑駒といひて一日に千里をかける名馬あり是に召れて調子丸楽川勝跡見逆位を召連られ淡路の國岩屋の浦といふ處にてはるかに沖の方を御覽あ